

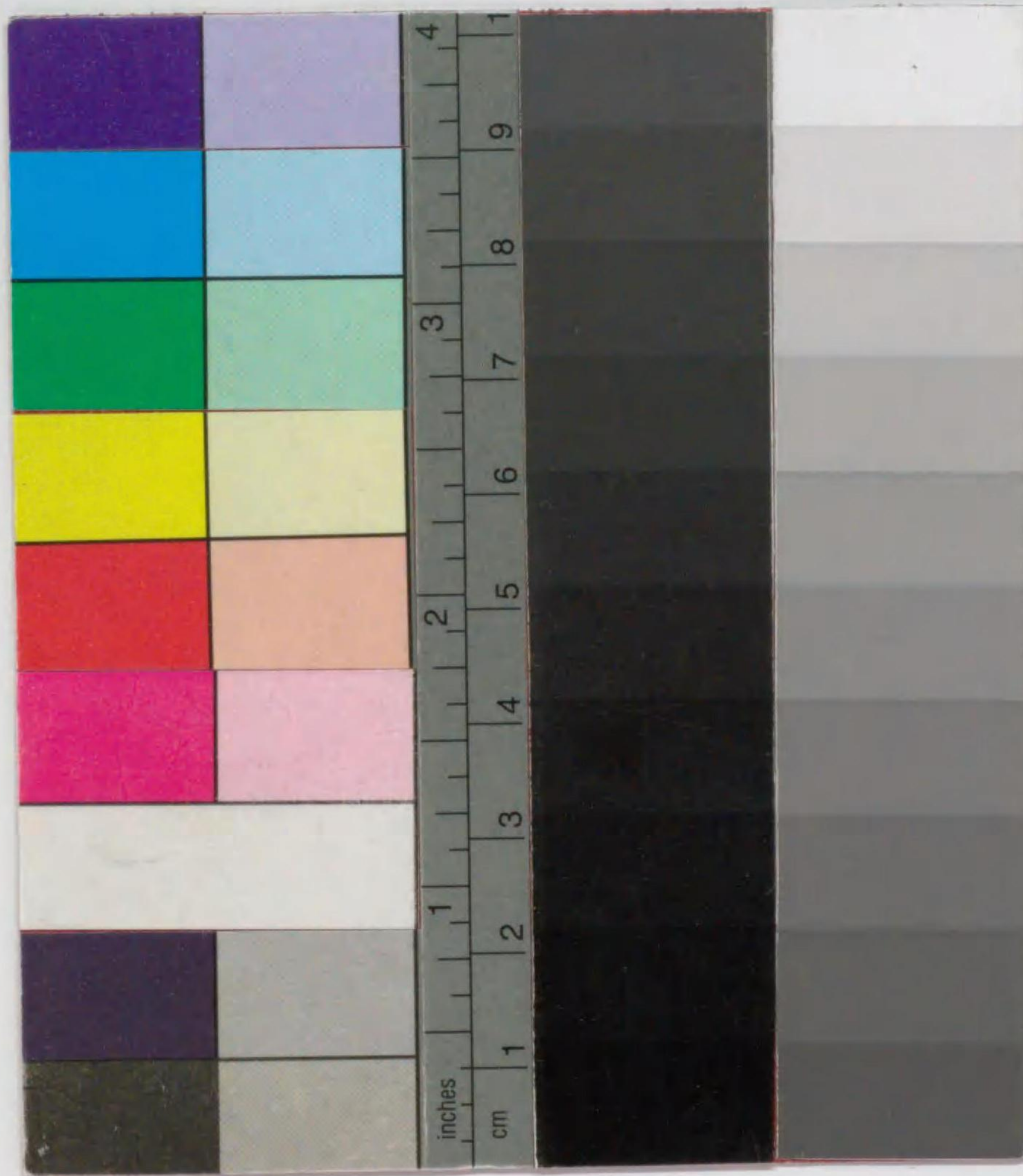
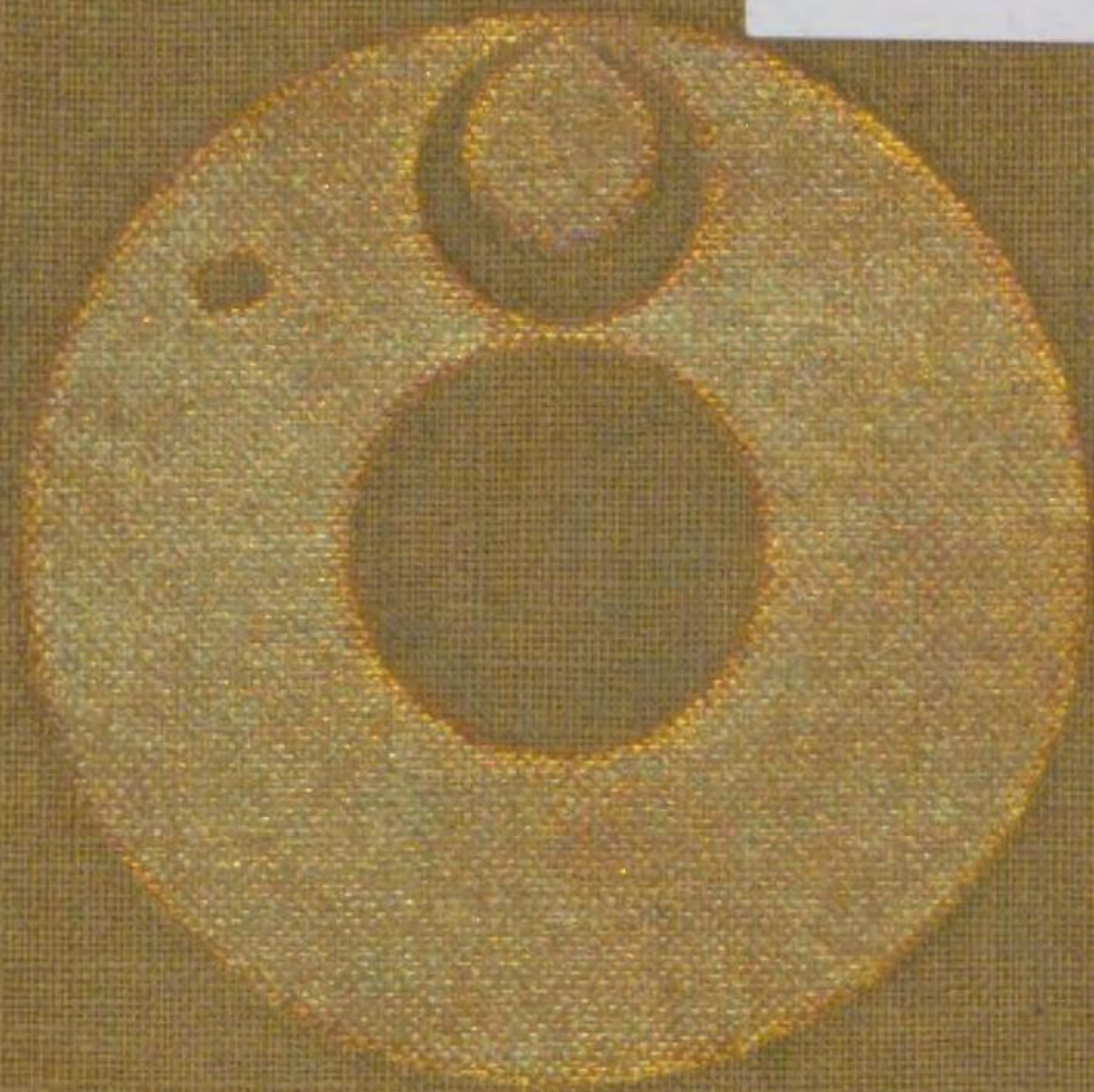
578-350

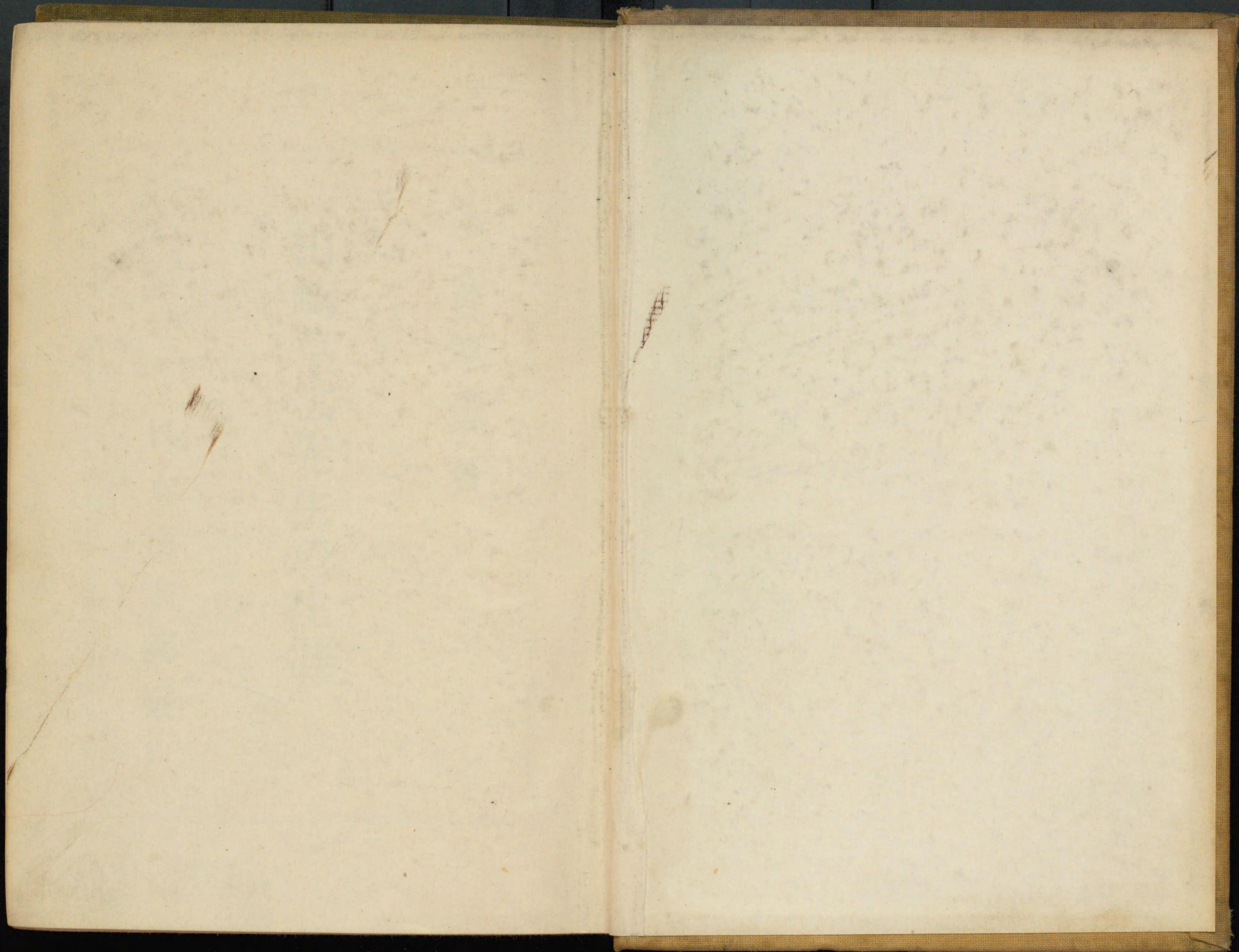


1200501520853

8

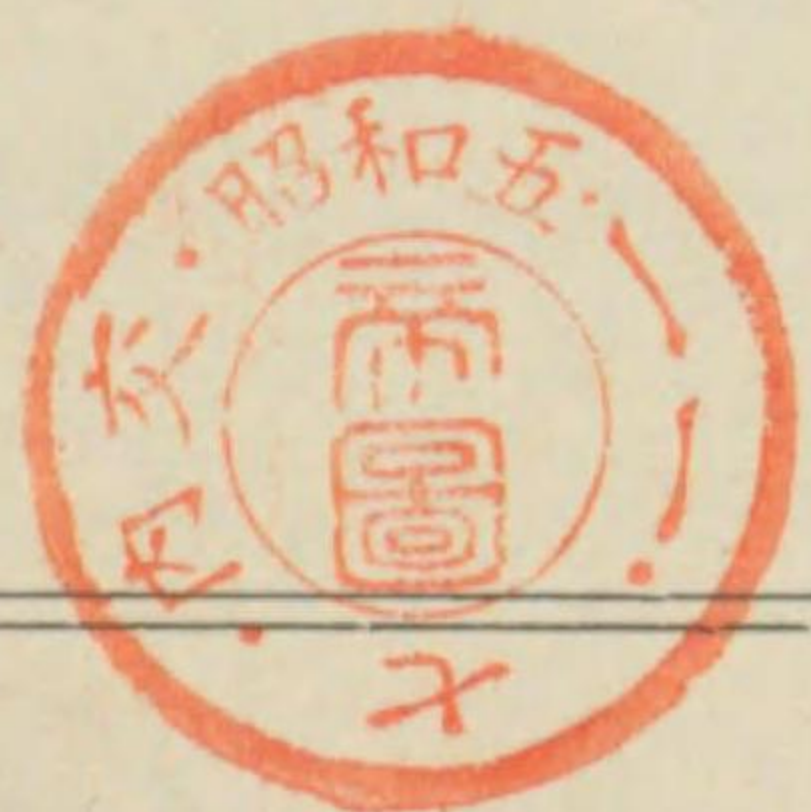
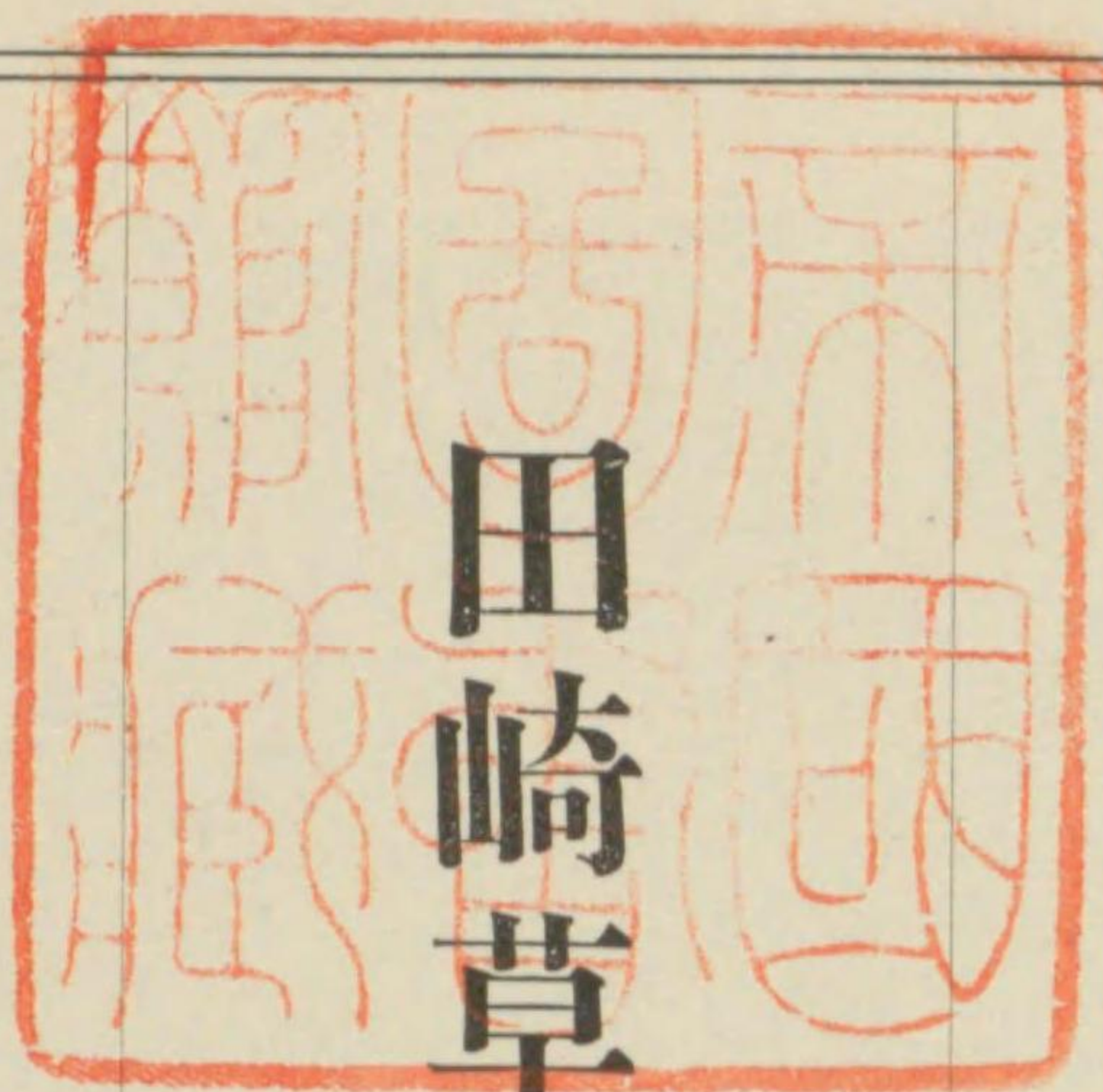
350





小室翠雲著

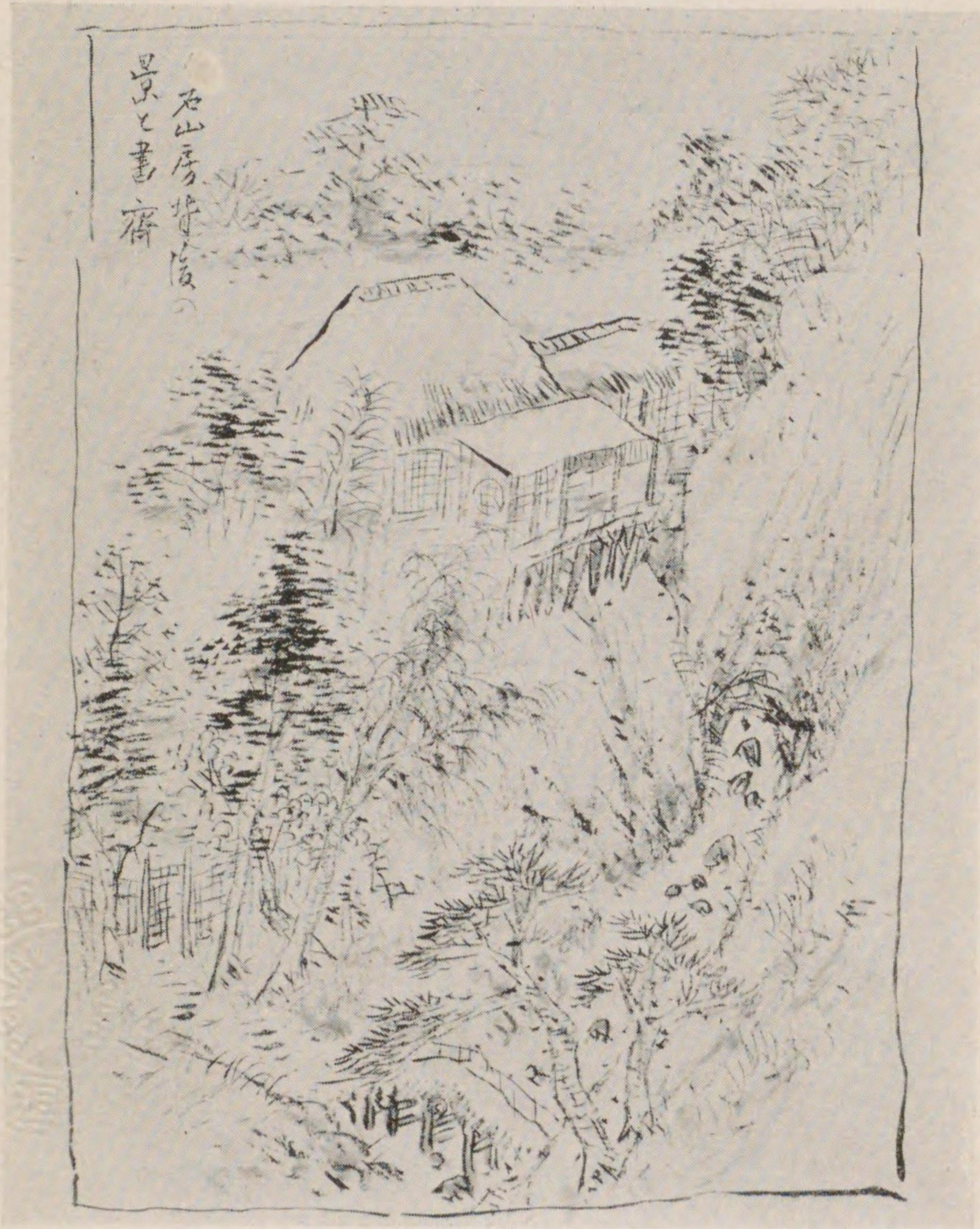
田崎草雲先生の生涯



日本南畫院發行



先師草雲先生像
以翠雲貞謹寫



予十二歳の妻草堂先生の門に入り暑夕英
道高凡十接一十餘年修始無窮なる教を
受く音容如常眼前に在ると山皇追慕の
念を懐くは今に至り三四尺の法要を習むが
り當時先師より直詔一言金玉として師の底
当より忘れぬことあり亦日撃して夢寐寤
還腦表を離れぬ如死等と慕ふて先師の
面月の残甲片骸を著し一之を以て知人子欲と記す

我々の予嘗て某文藝雜誌に上平雪先生の
高苗子夫人と題して一文を採行せしことあり
時之を讀むる某氏書と寄せて妙中先生
の事蹟を問ひ予に面談を求むるものあり乃
ち誘て是れを往きて是れは只池田弥原治と云ふ何
れ人田時宗外戚松井家の子孫高なるは少
壯の頃白石山房に寄寓し能く先生の日常
を知り談吐談出歴しし時之如く仍て予

の謬る所を疑と一池田君とを晤し所を尋しして
以て之を剞楨し附し追志の一端となすべし
茲に素より山莊病餘の業記載する實
相前後せりと免る者予の之を諒也

昭和五年八月念五

著者識



578-350

目次

一	その出生時代	一
二	富士山の権化	四
三	白石の奇瑞	一一
四	幼少時代の腕白	一五
五	田舎へ子守に	一八
六	書のために脱藩	二〇
七	文晁との因縁	二五
八	田崎家と松井家	三〇
九	紙鴛賣	三三
一〇	書の研究	三五

一一	大膽な亂暴……………	三七
一二	貧のつらさ……………	四二
一三	旅修行と賈易者……………	四七
一四	初めて潤筆料の鍾馗……………	四九
一五	松井家の家柄……………	五二
一六	松井家の零落……………	五七
一七	全盛の山谷堀と俠妓小照……………	六一
一八	梁川星巖との關係とお戸帳の盜賊……………	六七
一九	妻菊女の狂亂と月の大悟……………	七五
二〇	親子の情愛と勤王と佐幕……………	八一
二一	格太郎の切腹と親子の感應……………	八九
二二	お房の改葬と千葉ヶ嶽の復讐……………	一〇〇

二三	脱俗の行爲……………	一〇七
二四	高貴への使……………	一一六
二五	愛の涙……………	一二三
二六	是真の知己……………	一二八
二七	露根蘭の詩……………	一三一
二八	逸話の教科書……………	一三五
二九	寄附の精神……………	一四二
三〇	愛犬コロ……………	一四五
三一	風流な動物園……………	一五一
三二	奇抜な七ツ道具……………	一五四
三三	鐵齋の來訪……………	一五七
三四	國旗の盜難……………	一六二

三五	織姫の贋作	二六四
三六	門人との愛情	二六八
三七	土産に書を	二七五
三八	草雲先生と水戸浪士	二七七
三九	好きなもの嫌ひなもの	二八三
四〇	口紅の朱竹	二八五
四一	喜の字の祝賀會	二八七
四二	茶村の愛嬌	二九五
四三	皇居の揮毫	二〇三
四四	獸肉黨の洗禮	二〇六
四五	腐つた鯛の土産	二二三
四六	銀婚式の献納書	二二四

四七	まアちやん	二二六
四八	殊勝な心と怪偉の相貌	二二三
四九	昆虫の寫生	二二五
五〇	悪戯の復讐	二二六
五一	無邪氣な事ども	二三八
五二	金平糖箱の紛失	二四二
五三	観音様の行衛	二四九
五四	餅の盗喰ひ	二五四
五五	來客の人々	二五五
五六	旅文人の狼籍	二六一
五七	禪僧と牧師	二六四
五八	春畫の愛嬌	二六七

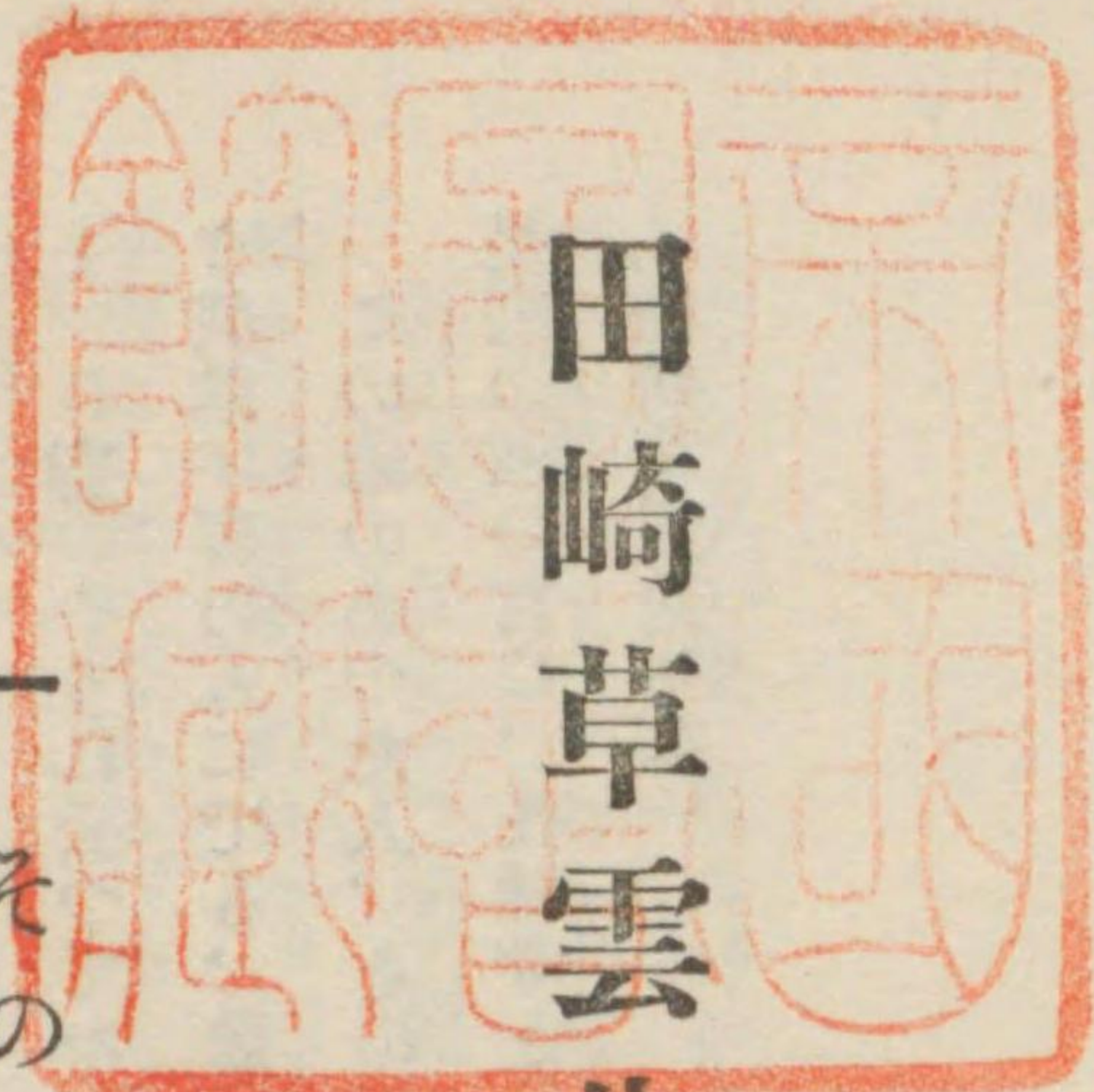
五九	雪見酒……………	二七〇
六〇	風呂と料理……………	二七三
六一	酔を醒してやらう……………	二七八
六二	義妹の啖呵……………	二八〇
六三	日月星の定絞……………	二八六
六四	美術界の感慨……………	二八七
六五	勤王と俠客……………	二九〇
六六	臨終と記念の一刀……………	二九七

附 著者の作による挿繪數葉挿入

(終)

田崎草雲先生の生涯

門人 小室翠雲 著



一 その出生時代

旋乾轉坤の明治維新は、不幸にして我が美術界の闇黒時代で、それは寧ろ慘憺たるものであつた。この時代に生れた藝術家は、一方ならぬ辛苦を嘗めた。

江戸は東京となつて文化の中心は西京よりこゝに移つた。闇黒時代の美術界にも、流石、東京には一縷の光明が輝いて、初めには柴田是眞、河鍋曉齋あり、次で狩野洞白、月岡芳年、小林永濯、狩野芳崖、橋本雅邦、瀧和亭、野口幽谷、川端玉章、山名貫義、奥原晴湖あり、漸く復興の氣運を導けり。

この時に當つて、地方に崛起せる大家を求むれば、東は足利に、田崎草雲先生あり、西

は京都に富岡鐵齋、鈴木松年、今尾景年、森寛齋、幸野梅嶺、岸竹堂、田能村直入、熊本に杉谷雪樵あり、大に地方人のために意を強ふし、藝術界のために、鬱然として氣焰を吐けり。殊に我が草雲先生の足利に閑居せるは、恰も明星の地に輝きたるが如く一大光彩として、その土地の大莊嚴となつた。そうして足利の白石山房は、日本屈指の名勝となつた。

草雲先生が八十四年の生涯は、實に數奇なる運命の翻弄であつた、一子格太郎氏が悲惨なる最期に依つて、田崎家はその後を繼ぐ人が失くなつた。先生をして遂に超然獨脱の人たらしめた。先生は常に、

「俺は雲水の身となつて、行衛定めず全國を行脚して、行つた先で死ぬのが祈願である」と、口癖のやうに云つてをられた。心は已に出家であつた。まゝならぬ人世は、先生の如き箕落不羈の人にでも、遂に祈願を果さしめなかつた。

この志のあつた人、その云ふ所、その成す所、凡人超越の妙趣があるは云ふまでもない。足利の西の宮に、長林寺と云ふ禪宗の巨刹がある。その門前に

「田崎草雲先生墓」

杉孫七郎子の筆に係る碑が立つて居る。根府川石の大きなもので、その裏面には幽玄院畫仙草雲居士の字がある。先生はこの地下に、永遠の眠に入られたのである。

先生は、文化十二年乙亥十月十七日、江戸神田小川町錦小路なる足利藩戸田氏の邸内に呱呱の聲を擧げられた。幼名は瑞白、頼輔、恒太郎、明義など、稱した。芸の字を分けて草雲としたのである。全く江戸ついで、谷文晁、渡邊華山と同じく

「江戸三人」

と稱すべきである。それから轉々たる八十四年を経て、明治三十一年戊戌九月一日、足利で逝くなつた。畫家としての田崎草雲先生を知らざる者はないが、勤王の志士としての田崎芸を知つてゐる人は甚だ少ない。それは實に遺憾なことで、先生が勤王のために、活躍された精神、この氣慨、この修養が、やがて氣韻を生命とする南畫となつて表はれたのである、故に苟も先生を知らむと欲せば、先づその勤王の精神、活動を知らざるべからず。これを知つて初めて以て先生の畫を説くべきである。

二 富士山の權化

萬代の國のしづめと大空に

あふぐは富士のたかねなりけり

とは、絶大の英主明治天皇陛下が、畏くも富士山の御製なり。

けに富士山は日本の象徴なり。まことや神洲の正氣、凝つて芙蓉萬仞の雪となり、秀靈
鍾つて、玲瓏、玉の如き英姿となる。日本を知らんとせば、先づ富士山を知れ。日本を説
かむとせば、先づ富士山を説け。花は櫻木、山は富士にして、人は武士なり。この人にし
てこの山を描く、我が草雲先生は、實に富士山の權化なり、結晶なり、分身なり。

日本美術史上、輩出せる大家、その幾百人なるを知らず、而してこの靈山富士を描き以
ては、先づ我が草雲先生を以て第一と推さざるべからず。苟もこの靈山を描く、その人先
づ靈ならざるべからず、白石山房に靈化せる草雲先生の、この靈山を靈描せる、亦宜なる
哉、白石山房が第一の誇は、靈山富士の英姿が、遺憾なく窓に滿つること也。白石山房は、

全く富士の庭園なり。富士山か白石山房か、白石山房か富士山か、富士山と白石山房とは、
二にして不二なり。

我が草雲先生は、こゝに起臥し、こゝに嘯傲し、こゝに吟詠して、その靈氣を日夕、飽
くまで吞吐して、自ら氣韻生動し、先生は全く靈化して、渾然として富士山と一體となり、
富士山と先生と、不二にして無別なり。宜なる哉、その富士は靈化し、靈動して、正に古
今獨歩なり。

先生は、眞に日本男兒なり、男の中の男たる武士なり。されば眞に富士山を知り、眞に
理解して、渾然として常に一致せられたり。先生こそ正に富士山の權化なり。先生を知ら
むと欲せば、先づ富士山を知れ、富士山を知らむと欲せば、乞ふ、白石山房に行け。白石
山房こそ、實に草雲先生の精神の宿る處、氣魄の存する所也。

朝早く起きられた先生は、兩眼鏡を手にして、二階の南の窓に立ち、熱心に富士山を見
てをられたが、聽てその兩眼鏡を池田に渡し、

「足下はこれで富士を見てゐて、俺が今描く形と色とを見較べて、濃いとか淡いとかと知

らせるのだ」

と云はれた。

見れば、机の上には、富士の下畫が出来てをる。池田は、身に餘る大役とは知りつゝも、命ぜらるゝまゝに、一心にやつてのけるより仕方がない。早速、兩眼鏡をあてたやがて先生が、

「左の端から二番目の山の色は、俺の色と、ここに違ひはないか、どうだ」

と云はれるので、兩眼鏡を放してその畫を見る、實物の方が淡いで、その通りに云ふと、先生は、

「そうか」

と云ひつゝ、立て来て自分で兩眼鏡をあてゝ復た見る。

「それならこの次の山だ、」

と、再び机に凭られた。池田は兩眼鏡を脱して、机の方を見たり山の方を眺めたりしてをる、

「さアこの色工合はどうだ」

と云はれるので、池田は

「俗緒がも少し濃いようです」

と云ふと、先生は不平さうに首を傾けたが、筆を投げて出て来て、兩眼鏡を取つて自分にあてた、暫らく見て居られたが、稍やぢれ氣味で、

「馬鹿、俗緒が濃いのではない、墨を濃くするのだ。足下は色合と云ふものを知らないのか、目をどこに付けて居るのだ、しつかり聞いて、眞劍にやれ眞劍に」

と、直ぐ例の調子の漫罵を浴せかける。これではやり切れぬ。

一體、春は霞がかゝり易いので、動もすると、山が霞に包まれて終ふ。で、成るべく早く起きて霞のかゝらぬうちに寫生するのだ。こんな工合で、毎日餘計な漫罵を浴びながら、十日間もかゝつて、

「これで好し」

と先生がにつこりされた時は、池田も初めて重荷を卸したやうな氣がしたであろう。

この山は二つとはなし日の本の

富士は不二なり、不二は富士なり

とは、草雲先生の實感である。白石山房へ來ないとともこの歌は出ぬ。富士を日本一として不二と書くは昔あつて、白隠禪師の如きも書いて御座る。

先生が苦辛の畫は、

「白石山房即目の圖」

と題して共進會に出たら、果して大評判で、それから引續いて、富士山を依頼する者が多かつた、富士山と草雲先生とが大評判となつた。併しそれには人知れぬ苦辛あり、努力があつた。この苦辛、この努力の結晶に過ぎぬ。

富士山については、まだく々色々な話もあるが、こゝに天下一枚の月夜の富士の圖に就て、好い話がある。

呑龍様で有名な太田に、穀屋と云ふ旅館があつた。その弟に三郎と呼ぶ書畫屋があつて、人は穀三郎と呼んでゐた。この男が、

「徳川の萬徳寺」

で通つた有名な尼寺が、廢寺になつた折、この寺の什物類を一切買受けた。この中の一品であるとして、一軸を持つて來た。展べて見ると、

「富貴中之富貴」

の六字が、如何にも溫雅に、秀潤に、御家流に能く出來てゐるが、落款には寒山とあるが、この寒山が分らないので、鑑定してくれと云つた。先生は暫らく首を捻つてをられたが、

「誰の書であるか、一寸、見當が付かぬが、賣るなら何程で賣るか」

と問はれた。

「賣る賣らぬより、先生が買つて下さるかどうか、買つて下さるなら、何もお金は頂かなくとも、先生の墨の付いたものなら何でも宜しい、交換致しませう」

と云ふので、

「そうか、交換すると云ふなら、好い畫が一つある。それはこの正月元日の夜の夢に見た「月夜の富士」を、その夜明前に、床から出て描いた畫で、全くの靈感で描いたので、天

にも地にも唯一枚きりである」

と云はれると、穀三郎は飛び立つばかりに喜んで、大に得たりと喜び勇さんで歸つて行つた。

後で先生は、ニコニコして、

「寒山とは、徳川二代將軍秀忠で、誠に稀有の珍品である」と大自慢、大喜びであつた。

「月夜の富士」は、その後、太田の在の龍舞村の酒造家へ賣られたので、その主人が鑑定依頼に來たが、全く眞筆ところが、實に天下一品の傑作だと披露せられて大喜び。

この畫は、満天、晴れ渡つて、月が皎々と輝いてゐる、この下に雪を帶んだ白玲瓏たる富士が、こんもりと表はれてゐるので、空の色は青、富士は白、月光は銀、渾然として一大理想郷のやうである。これを描かれたのは正に明治二十三年一月一日、午前三時十分であつたと云ふ。誠に珍しい畫で、富士の寫生に多年、苦しまれた先生でこそ、初めて出来るのである。渡邊華山にも、田原の廣中氏の月夜の圖があつて、寫生から出た畫とし

て評判である。一時は拾數萬でも尙購ひがたしと云はれてゐたが、この「月夜の富士」も、正にこれと對比すべきであらうと思ふ。

三 白石の奇瑞

文化文政の時代は、徳川三百年間の賢宰相と謳はれた松平樂翁公定信の治政の時で、公がお正月の寶船に贊をして

この船の寄るてふことを夢の間も

忘れねばこそ實なりけり

と歌はれたやうに、黒船の襲來に次で、日本は愕然として太平の夢を破られて、上下騒然として、誠に國家の危機であつた。

文化十年五月には、露西亞の船が高田屋嘉兵衛を送還して來たが、九月には此方から、露人ゴロウウインを放還してやるなど、日露の國交が頻りに切迫して來た。そのため譯官馬場某は、露國の囚人から露語を學んだなど云ふこともあつた。日本開國史上に特異の光

彩を放つ、忠孝無二の渡邊華山は恰も二十一歳で、繪事甲乙會の將に起きんとするの前年である。

この年十一月を以て、我が草雲先生は、江戸は神田小川町錦小路なる足利藩主戸田侯の邸に呱呱の聲を挙げられた。その沸々たる脈管には、敗けじ魂の江戸ッ兒の氣性が、磅礴として居つた。殊に「花は櫻木、人は武士」と謳はるゝ武士で、豈に嘗に五月の鯉の吹流しのみではなかつた。苟も草雲先生を知るには、先づこの血と魂と、そうしてその土地とを知らねばならぬ。

父は七藏と呼び、その先は野州下都賀郡眞名子村の農家であるが、男兒事を成さずんばとの大決心と勇氣とを以て、出で、足利に行き、戸田邸に中間奉公に住み込んだが、忠實勤勉に能く働いたので、聽て武士に取立てられ江戸詰になつた。

母はます子、

七藏夫婦は、頻に男の子欲しさに、神田明神の神前に、授け給へと、丹誠を籠めて祈願した。或る夜妻がトロ／＼と眠つたかと思ふと、いとも氣高き大神が、そこに現はれて、

美くしい白の碁石を一箇授けられた。あまりの尊さに、それを押頂いて、忽ちぐつと嚙むだと、七藏が夢に見た。

それより母身重になり、十月經つて、易々と聲も勇ましく生れたのが男の子で、それが即ち我が草雲先生である。夫婦の喜びは如何ばかりぞ、一家は忽ち光明に輝いた。

白い碁石に因んで、名を瑞白と號け、其他字名雅號等幾でもあるが夫れは前に述べたやうで。先生が晩年の閑棲を、白石山房と號したのは、蓋しこの因縁である。白石を夢みて生れ、白石山房で死んだ、先生の生涯は、全くこの一箇の白石で一貫してゐる。こゝに最も敬虔なる信念のあつたことを知らねばならぬ。

先生には、二人の妹あり、長女をおかねと云ひ、次をお松と云つた。おかねは横山家に嫁し、お松は山本家に嫁して、共に平和なる家庭の人となつた。

この奇瑞に因て、先生が命名されたる卜居。白石山房は、足利の西に十日山が聳えてゐる。それに公園の丘が接いてゐる。その丘に續いた梅林の小高い丘中に、藁葺の二階建がある。それが即ち草雲先生の活歴史を生んだ白石山房である。

山房は四方とも壁少き建物にして、二階は二間きり、一間は板間で、それに西隣りした室が畫室である。この畫室には二枚の額が掲つて、頗る異彩を放つてをる。その一は硯田農舎。他の一は蓮岱畫屋の四字づゝである。硯田農舎は、細川潤次郎子爵の筆で、白石を夢に見たと云ふ因縁に依り、石を見るの字を合せて硯の字を得たのである。田は云ふまでもなく田崎の性の一字より脱化したのである。田とやつたから農舎と來たので、つまり先生は畫家として、硯を田として、筆で耕してをる農夫であるから、しやれたもので、流石は十洲先生の才氣煥發な所が見える。蓮岱畫屋は、某支那人の書であるが、昔こゝに蓮岱寺と云ふ巨刹があつたが、明治維新後、廢絶して終つた。つまり蓮岱寺跡と云ふことになる。同じ寺の舊蹟でも、その字が俗では額にもならぬが、幸ひに蓮岱の二字が美くしいので丁度そのまゝ使へた。殊にこゝは富士山の絶勝の所であるから、更にその字が活動してをる。即ち富士山は八朶の芙蓉とか、白蓮、倒に開くとか云つて、富士山はそのまゝ、白蓮と形容されてゐる。岱はたかやまと云ふ字で、支那では、天下第一の名山なる泰山の字になつてゐる、解り好く云へば第一の山と云ふことである。日本で第一の山と云へば即ち富

士山であるは云ふまでもない。然れば蓮岱の二字は全く富士山の形姿であるから、白石山房のために特に撰んだ字のやうである。況んや蓮岱寺の歴史と地理のあるに於てをや。白石山房のために相應と云ふべきである。

この二つの額は、白石山房の大莊嚴である。

四 幼少時代の腕白

一家の光明と仰ぎ、掌中の珠と愛せられた草雲先生も、斯く大きくなるに従つて、餘りに腕白なるには、流石の兩親も驚いた。

「田崎の腕白小僧」として、藩中での評判となり、常に長屋中から尻を持ち込まれては、兩親もほとく手古摺つてゐた。

餘りのことに、母なる人が觀相家に觀て貰つた。觀相家は眉宇から頭と、丁寧に觀て、その逞ましい骨相に驚いた。さて徐に口を開いて

この兒は、元より非凡の骨相である。若し上手に育つれば、天下に大名を擧げるほどの

人となることは勿論であるが、若し誤まれば盗人になる。

と云はれたので、母は非常に駭いて、心配さうに、父にこの由を告げた。

父は或る日、彼を膝近く呼んで

「貴様は若し誤まれば、長じて盗人になると云ふが、それも持つて生れた運命だから仕方がない。併し盗人になる位なら、決して小盗になるな、コソノ盗賊で、衆人に迷惑かけるやうなものになるな。なるならば、天下の人を助ける大盗になれ」と厳と云ひきかせた。

この父にしてこの子あり、この家庭教育こそ、全く草雲先生を造り上げたのである。誠にこの父七藏は、奇用な人で、畫も素人ではあつたが、少しばかり描いたので、草雲先生が僅か七歳の折、既に畫筆を持たせて、四君子などの手ほどきをやつたが、尤も好んで菊を描いたと云ふ。先生が明治畫壇の大家なる、元よりその天性に依るが、一面には必ずこの遺傳があつたのにある。

そんな中にも、腕白はますます増長して、相變らず、同藩の長屋中を騒がせてゐた。こ

ゝに面白いことは、藩中の或る家に、至つて口八釜しい老婆があつた。その老婆は、遠慮會釋もなく、先生が腕白をすると、大聲で怒鳴つては叱りつけ、始終、散々な目に逢はせた。先生は子供ながらも夫れが口惜しく、その内に何かな復讐してやらうと考へてゐた、折も折、或る夏の日である。蜻蛉釣りに、モチ竿持つて、屋敷中を駆け廻つてをると、先方の邸内の外雪隠へ、例の八釜しやの老婆が、使用に這入つたのを見た。先生は喜ぶまいことか、覺えず微笑を禁じ得ず、親の時よりこの時だとばかりに勇み立ち、抜き足指し足、忍び足で、雪隠の戸の隙間をねらつて、モチ竿をグザと指込んだ、恰も十段目の光秀が竹槍撫いた勢である。中に踞踏んでゐた老婆の驚くまいことか、殊に堪り兼ねたのは、そのモチ竿の尖端が、婆さんが命よりも大切な黒鬚濛々たる局部をグザと突いた。老婆は覺えず

「あれッ！」

と大聲を擧げて救ひを求めたが、流石は武家の女だ、それにもひるまず、直ぐそのモチ竿を奪ひ取つて、

「誰だッ！」

と云ひさま飛び出して来て見れば、何時も名代の

「田崎の腕白小僧だ」

「この小僧」

と云ひさま、散々な目に遇せた。亂暴なりと雖もまだ少年だ、大人のこの老婆に敵すべくもない。老婆は怒氣沸々として、遂に泣き叫ぶ先生を引摺つて、父七藏の下へ伴れて行つた。

父は餘りのことに呆れた。且は申譯のために、涙ながらに、麻縄で高手小手に誡めて、終日、戸棚の中に投り込んで置いた。それでも泣きもしないで、じつとしてゐた。

五 田舎へ子守に

餘りの腕白に、手古摺り抜いた、田崎家では、思案餘つて、彼が漸く十一歳の春、母の在所なる野州眞名子の家へ預けた。

甘い親の下を離れた、親類の窮屈が、何よりの折檻と思ひの外、コセ／＼した小川町あたりより、廣い伸び／＼した田舎へ来たことが却て愉快で、自由で、いよく／＼羽を伸ばして、前よりは輪を掛けて腕白をするので、預けられたその家の方でも、ほと／＼困りぬるた。

その揚句、そこから程遠からぬ井戸端と云ふ所の藁葺屋根職の家へ、子守奉公に出した。

子守奉公と来ては、手械首枷の體刑で、餘儀なくおとな温順しくなると思ひの外、これ位のことでビクともせぬ。

「こんなことに困るものか！」

と復讐的に、脊負つた子供を、井戸の洗場に、四つ這ひに這はせて置いて、脊負ひ紐でしつかと、子供を井戸側に括りつけ、

「これ見よ」

とばかりに、そのまゝ後をも振向かず、さつさと親類へ逃けて歸つて来た。

これには、流石、親類の者も持て餘し、終に兩親なる里方へ戻して来た。その大膽さに

は兩親も聊か驚いた。これは一筋縄ではいかぬ悍馬なることに漸く氣付いた。

この腕白時代に、その天才が閃いてゐることは、古今東西その揆を一にするので、英雄豪傑皆然らざるはない。豊太閤でも奈翁でもそんな逸話が澤山ある。併し後になつて夫れが成功すれば、なる程と感心するが、その當時に在つては、悉く皆な排斥痛罵せられたものである。我が草雲先生の如きも亦然りて、これが他日、明治畫壇の大光明となるとは、親ですら猶ほ氣が付かなかつた。

六 畫のために脱藩

腕白小僧々々々と手古摺つてをる間に、早や草雲先生は十八歳の男盛りになられた。

先生が十八歳は、正に天保元年で、渡邊華山が三十八歳で、正月には、田原藩侯三宅氏の遺跡を、武州餅尻に調査し、訪餅録三卷を書いた年で、八月には、明治第一の志士吉田松陰が長州萩の城下に生れた。その前年には、賢宰相松平樂翁公が歿せられた。

「その内に何事か仕出かすだらう」

と、恐れられつゝも期待されてゐた我が草雲先生は、この春、果せる哉、足利藩、空前の大願を出したので、一同は

「それ見よ」と驚いた。

空前の大願とは何そや。子供ながらも好きで書を稽古してゐたのが、天稟の才能で、めきくと發達して、前途頗る囑望されると共に、自分にもそれが非常に愉快であつた。それで大膽にも、

書を以て身を立てむと思ふから、天下を修行して歩きたいから、お暇を下さるようと、藩主戸田侯に願ひ出た、

家中の者は、餘りに突飛なるに驚いたが、果して前例がないからとて許されなかつた。如何に腕白でも、藩命に背くことが出来ぬ。これには流石の先生も大に困つた。一旦、思ひつめた、この願意が聞届けられず、止むなく温順しくはしてをるものゝ、心は常に怏々として甚だ樂しまなかつた。

この不運な内に、更に思ひ設けぬ不幸が繼い來たのだ。それは先生が十三歳の時に起つ

た凶事である、天地に唯一人の生母ます子は文政十年十二月廿三日に逝くなつた。父七藏は時に年三十八歳、先生の外に二人の妹があつた。所詮、不自由な男世帯ではやつて行けぬと云ふので、世話する人があつて、第二の妻を迎へた。その第二の妻女の名はとよ子と云ふ。

第二の母が来てからは、連れ子の弟もあつて、不幸にして家庭は兎角、圓滿を缺いた。それがために面白からぬ月日を送つてゐる内に、天保五年、二十二歳の春を迎へた。

久しい間の悶々の情、鬱勃たる不平は、遂に爆發した。それは實に壯烈且つ悲惨であつた。その爆發は、恐ろしき脱藉であつた。脱藉して初めて自由な身となつた。脱藉！それは武士として堪へ難き苦痛であつたが、先生はそれを却て初志の貫徹、決行と喜ばれた。この脱藉！この決心！こそ、他日正に明治畫壇に大異彩を放つた我が草雲先生を生んだ第一歩である。この勇氣、この大決心を持たねばならぬ。

殊に二十二歳の青年で、血氣旺盛である。正に男兒立志出鄉關、學若不成死不還の意氣があつた。その勃々たる意氣を抱いて、先づ畫道の先輩と仰いで懇々、訪うたのは、上州

木崎の金井烏洲の門であつた。

烏洲時に年三十七、最も氣慨に富んだ。初め畫を江戸の人春木南湖に學び、倪雲林に私淑して最も氣品あり。當時、仙臺に菅井梅關あり、畫名、一世に高し。會々上州に遊び、烏洲と相往來して交り甚だ深し。或る人、烏洲に問て曰く、先生と梅關と孰れが勝ると、烏洲憶せず答へて曰く、我なりと。或る人、梅關に問うて曰く、先生と烏洲と孰れが勝ると、梅關答へて曰く、我なりと。或る人一日、二人に對して告ぐるにこの言を以てす、三人元より邪氣無し、哄然として一大笑するのみと、以てその人と爲りを知るべし。梅關は天保十五年正月、即ち弘化元年、六十一歳にして逝く、故に烏洲よりは恰も十歳の年長であつた。

烏洲より、畫名天下に振ふ谷文晁に紹介狀を貰つて、大に爲すあらんとして、江戸に文晁を訪うた。

文晁の畫壇の地位は、今更云ふまでもないが天保十二年十二月十四日七十八歳で逝くなつた。當時已に可成りの老體であつた。

是に於て初めて、眞に畫を修業するの好機を得た。これからは古畫扮本に依て一意専心、獨學自習して遂に大成したのである。

先生は全く獨學自習の人で、師匠としては梅翁唯一人である。が、梅翁は元より師匠と仰ぐに足らぬ。で、自分の愛するまゝに古畫を師匠とした。中にも南畫本來の面目を喜んだ。と云つても、決して劃然と南派北畫と分けてゐたのではない。氣に入れば北畫も描いた。この研究の結果、先生独自の新機軸を出して、南畫にも北畫氣分のあるのもあれば北畫にも南畫氣分のあるものもある。雪舟が足利時代に入唐した時は明代の南畫萬能の時代から稍もすれば南畫筆致を見るこの梅翁はホンの梅に雪を描くに過ぎぬので、到底畫家と許すことは出来ねが、謂ゆる旦那藝で、お旗本の御隠居で、入用お構ひなしである處から、藝には不相應な食客的門下生を求むるに至つた。先生はこの門下生となつて、初めて活路が開けた。こゝで梅翁から、弟子として、梅溪の號を貰つた天保十年、二十五歳にして松井氏を娶つた。父孫左衛門は相當に暮してゐたので、先生の前途を囑望して、大に援助した。こゝに草雲先生が畫の徑路に就いては面白い。第一は、遺傳と云ふべく、父七藏が多

少、畫に親しむ所から、先生は早や六七歳の頃から、子供の慰み半分ではあるが、父に就いて畫筆を握り、四君子の稽古をやつてゐた。これが實に先生を作り上げた第一歩である。第二は、脱藩して祿に離れたので、今度は食ふに困る。如何にして食ふか？問題であつた。偶ま梅翁の門下生となつたのが、他日日本繪畫史上に、最も大なる足跡を印するに至つた始となつたのである。

七 文晁との因縁

文晁の權威は有力なる、門人多數を有して天下の文人騷客は皆友人で、その時代の畫壇を風靡した豪勢のものであつた一代の狂歌師蜀山人、

「書は五山畫は文晁に狂歌をれ藝者小萬に料理八百善」
とやつたのもこの時分である。

その玄關に「頼まう！」

と呼んだのは、恰も目出度い正月の元日であつた。今しも旗本の隠居や、金持の大旦那、

さては骨董店や太鼓持など、聲威を謳歌する連中が賑々しく集つて、盛んな酒宴の最真中であつた。

その座敷に通されて、初対面の挨拶を恭しくすると、ほろ酔ひ機嫌の文晁は、烏洲の紹介状に依つて、梅翁の門人なることを知るや否や、酔眼朦朧として草雲先生を眺め、さも傲慢さうに

「貴公は梅翁の門人だと云ふが、定めて梅描きだらう、一つ梅を描いて見よ」と云つた。

元より覺悟の前である。我が腕を示すはこの時とばかりに、渾身の勇を鼓して、稠人列座の中で、毫も臆する所なく、墨痕殊に鮮かに、墨畫の梅を描いた。

濃淡、潤潤、最も能く整つてゐた。文晁はこれを受取つて、一渡りちつと眺めたが、忽ち破れ鐘のやうな大聲に、「何だ！ これでも畫描きか、こんな梅なら、俺は足でも描いて見せる」

と、悪口雜言を極め、散々に嘲笑した。

「折角、師の禮を取つて來たのに」

と、草雲先生もこの侮辱に堪へられず、心中には覺えず男泣きに泣いた。當り前ならば、腕に覺えのある一刀を引拔ぬき

「何だ！ 失敬な」

と、思ふ存分に誡めてやるべきだが、他日の大成を思へば、これ位のことは堪へねばならぬ、韓信は股さへ潜つたではないかと、遺る瀬ない憤懣を抑へて、ならぬ堪忍するが堪忍と、齒を喰ひ縛つて黙つてゐた。そこへにお辭儀をして座を下つた。

燃ゆるやうな憤怒を胸に包んで、すごくと玄關まで來ると、そこには立派な蓬萊山が飾つてあるばかりでなく、菰冠りの酒樽が、どつかと置いてあるその上に、白木の三寶があつて、その上には三組の朱の大盃が載つてゐて、先刻の悪口雜言、癢に觸つて堪へられぬ。残念無念の遣る瀬なき、これ窟強の復讐と、思ふが早いか、その菰冠の口を捻じあげ三組の下の大盃を當てドクンドクンと音を立て注ぎ、忽々三杯を煽り付けて終つた。

好い氣持になつた草雲先生は、いよく例の腕白性を發揮して、自分が今履いて來た破れ草履を、恭しく裏返しにして三寶の上に載せ、樽の口もそのままだから堪らない、時な

らぬ臺所が酒の海と化した、口を拭いてよろしく知らぬ顔の半兵衛をきめ込んで、文晁の門を出た。

「師とするに足らず」

と、文晁を見捨て、後、諸所を漫遊して、漸くなつかしき故郷足利町へ歸り、先づ上州島村にゐる烏洲方に到り、何食はぬ顔で、文晁に紹介の禮を云ふと、烏洲は威猛高になつて

「馬鹿！ 貴様は文晁の所で何をして來た」

と、眞向から怒鳴つた。が、草雲先生は落つき拂つて白を切り、

「何もして参りませぬ」

と、云ふと、烏洲は言下に、

「して來ないことがあるものか！」と云つ、

「これを見よ」

と、突き付けられた手紙を見ると、それは文晁からの手紙で、樽を飲み乾したことから泥草履を三寶に載せたこと、この當日の亂暴狼籍を非常に怒つてゐるのである。これには流

石の草雲先生も参つて、今更隠す譯にも行かず、あまりの面目なさに、平身低頭、平にその無禮を謝罪した。

すると烏洲が

「ム、心から悪るかつたと謝るなら許してやると同時に、まだ見せるものがある」

と、文晁から來た手紙の残り半分を見せた。それには

「後來、名を成す見込のある手筋なれども、初めから賞めてやつては、却て身のためにならぬから、悪い人になつて嘲笑してやつたのだから、君からも能く面倒を見てやつてくれ」との依頼状であつた。

「えつ?! これが文晁先生の御心であつたか」

と、愕然として驚くと共に、その心、その親切を知らずして、徒に憤懣のみしたのは、實に恥かしいのみならず、自分としてこんな残念なことはないと、初めて分つた草雲先生はあまりの嬉しさ勿體なさに、ポロ／＼と泣き出された。烏洲も改めて、

「天狗にならず、一層勉強して、他日、名を天下に擧げるようになれ」

とその手紙をくれた。

この一齣さだの話は、實に面白いと共に、草雲先生の御傳記中にも注意せねばならぬことである。從來、草雲先生は、文晁に帥事されたやうに傳へられ、畫家の系統表などにも、その衣鉢を繼いだやうに出てゐるが、草雲先生と文晁との關係はこの一齣のみに過ぎないので、その後逢はれたこともないのである、況んや帥事されるような機會は更に無い。これは史家の爲に一言述べて置きたい。

八 田崎家と松井家

草雲先生が手ほどの師匠加藤梅翁は、最も閑雅な入谷に住んでをつた。

草雲先生は、眞劍に畫を學ぶ氣になつたので遂に入谷なる梅翁の家へ内弟子として住み込むことになつた。

梅翁の隣家に、松井新左衛門と云ふ土器大工があつた。この家は最も歴然とした家柄でその祖先は武士で、徳川家康に仕へてゐた。天正十年、甲州天目山に武田勝頼を攻めた時

不幸にして名譽の戦死を遂げた。その後、天下が家康に歸してから、その功に依り、近親の者を物色して取立てんとして、八方捜査の結果、駿州松井村に土器を營む者が、天目山に戦死した人の實弟なることが漸く分つたので、それを召し出して、兄の戦功に依り、大名に取立てんとしたが、同人は堅くこれを辭退して

「武士なるが故に、兄と甥とは戦死を遂げたのであるから、自分は武士となるを好まず、それよりは至つて氣樂な土器大工で世を送りたしとのことなので、然らば今後、徳川家に於ける祝儀不祝儀の折には、葵の紋を付けた素焼の土器にて酒を酌むこと、定め、その土器御用を命じ、土器大工と云ふ役名にて仕事せしむとの儀にて、爾來、幕府及謂はゆる御三家御三卿も、祝儀不祝儀には必ず葵の定紋を現はせる素焼の土器を用ふことになつた。その式禮は徳川三百年を相續して來た。この家が舊と松本と云つたので、松井松本と稱して、松井家では一番舊家であつたのである。その上、祖先の戦功に依り、目見得以上と號し、何時にても時の將軍に接することの出来る格式の家を、目見得格と申したので、待遇は旗下であつた。

それ故この家の系圖は、なか／＼尊重されて居ると云ふことを豫て聞いてゐたので、或る時、師匠梅翁の口添へに依り草雲先生は、松井新左衛門方へ系譜一覽いたし度き由を申込んだ、松井家では元より家門の名譽として喜んで承諾した。この風流の一事が、抑も田崎家と松井との連鎖となる第一歩とは、神ならぬ身の知る由も無い。

草雲先生は引續き屢々松井家へ出入して居るうちに、菊女と呼ぶ二十歳ばかりの娘が、屋敷奉公から戻つて來てゐるが、若い男と女、遠くて近いは男女の仲とやら、何時の間にやら二人は割なき仲となつたので、遂に媒介する人があつて、新左衛門と七藏の許しを得て天下晴れての夫婦となり、黄道吉日を選んで目出度祝言の杯をした。この娘が

「草雲の室菊女」

として、大に内助の功を致し、後には不幸にして貧のために發狂したのである。即ち格太郎は、この菊女が生んだ一粒種である。夫婦となつてから、新左衛門方で萬事の世話をしたのである。それから故有て松井家はその居を、入谷より山谷堀に移した時、草雲先生も亦、一家を擧げて共に山谷堀へ轉居された。それから間もなく「草雲」と自ら號せられた

ので、その前は「梅溪」と云つて居られた。併し草雲と號するに至つても、敢て梅溪の號を捨てたのではない。世間では能く梅溪は前の號で、草雲とは、後の號である様に云ふがそれは恐らく誤解である。草雲とは、最後に改めた名で前にも云ふた通り「芸」の字を、二字に分けたに過ぎないので、實際は號ではない。矢張り梅溪は生涯の號であつた。併しながら好で草雲の號を用ひられたから、世人能く草雲を知て梅溪を知るもの稀である。

九 紙 鳶 賣

山谷堀に移つた年の暮であるが、世間が不景氣で、畫の依頼も少きところから、草雲先生は困つた揚句、一策を案じて、妻の弟の文藏と兄の新兵衛と三人で、淺草の並木の辻へ正月用の紙鳶の畫を描きながら賣りに出た。これこそ藝が身を助ける不仕合せである。

所がその三人ともが、貧なりと雖も武士である。何れも長刀を手挟んでゐる。草雲先生は手拭で頬冠りして顔を隠す、文藏が骨に紙を貼ると、直ぐ先生が畫を描く、畫が出来ると新兵衛が糸目を付けると云ふ役割。面白い風の變つた紙鳶屋であるとして、人足が賑々

しく止る、道行く子供等は

「やア〜お侍か紙鳶を賣つて居る」

など、珍らしがり、却て異様な姿が評判になり、お蔭で大へん能く賣れて大に助かつたと云ふ

抑も紙鳶賣を考へつたには、元來、山谷堀の一部は、松井家が幕府からの拜領地であるところから、入谷時代に、新左衛門の別墅があつて、自分が紙鳶が好きなところから、毎年、暮になると、自ら大へん苦辛して紙鳶を作り、近所の子供にもやつた。それを貰つた子供が喜ぶのを見て自ら樂しむと云ふ變つた道樂があつた。しかもその紙鳶が、世間には類の無い「堀龍」と云ふのである。それは真中に龍の字を丸形に書き、周圍を廣く餘白にしたもので、その龍の字で、今日でも職人などの印半纏にもあり、おもちやの紙鳶などにも能く見る、俗に云ふ牡丹字と云ふ書き方で、これが又子供等の人氣に適ひ、「堀龍の紙鳶」

と大そう流行つたものである。つまり山谷堀で出來た紙鳶と云ふ意味で、昔は紙鳶と云へ

ば堀龍と決つてゐた位である。

そんなことで新左衛門には聊々自信があつたので、三人が相談の上漸く決めたので、年の瀬の苦らしい所を超えられたのである。

十 畫 の 研 究

山谷堀に移つて以來、親しく唐宋元明の諸家又は日本古畫などに就いて、獨り自ら熱心に研究してゐた。天地を師とし、自然を友として、一日も休む時なく勉強したものである。この勉強、この努力、これが大切である。先生が貧しい中の奮闘、努力は、眞に畫を學ぶ者の大教訓である。

併し生きる爲め、自分一人のみならず、親を養はねばならぬ、家族を養はねばならぬ。故に苟も依頼者のある限りは、紙鳶でも地口繪でも何でも描いた。或る時は芝居の看板まで描いた。従つて四條風のもの、圓山派のもの、又は住吉、土佐、何でも御座れで描いた。「一體畫家が何でも御座れば、頗る耻辱としてゐるが、自分には生活上の關係もあつたら



うが、何でも御座れで描きまくつた事が、大に今日の補ひになつてゐる」と、晩年に能く語られた。蓋しこれが勉強であり、稽古である。

この時代に於て、傳ふべき一人の門人があつた。それは、終生、足利の土地を離れないで、郷土的先生で終つた古河竹雲である、竹雲は實にこの時代からの門人で、草雲先生門下の最古參者であつた。

「彼にして今少し氣概があれば、足利のみに埋もらず、廣く各地を遊歴し、多くの文人墨客と交際をしたならば、名聲はもう少しは揚つたらうに、氣力が乏しいために、遂に田舎書工で終つて仕舞つたのは惜しいことである」

と、草雲先生は頻に惜まれて、常に能く話された。

竹雲、名は啓次郎、毎日、商ひに來た魚屋の俵で、家族の口數が多いので、小僧として先生が引取られた。それを足利へ伴れて行つたのだと云ふ。併し性來、畫が好きで、頻に稽古をしてゐるので、先生が見込んで世話をされたのであれまになつた。實際、師匠の云はれる通り、氣力が今少し張つて東京へでも出てゐたならば、屹度、二流位の先生には

なれてゐたに違ひない。

十一 大膽な亂暴

草雲先生の腕白は、殆んど天性であつた。故にその腕白が、徒らな亂暴ではなくて自ら靈智の發する所があつて、最も磊々落落、無邪氣であつた。こゝに先生の人格が閃いて居る。故に三十になつても四十になつても、時々その腕白が現はれる、そこには眞に腕白で、少しも厭味がない、確に古英雄の面影がある。

或る時、本所の駒込橋に住んでゐた畫家嵐溪に招かれて行つた。何かの機會に

「梅溪」

と呼び捨てにした。先生はムカ／＼とした、最早や一刻も堪忍することは出来ぬ。

「何だ！」

と云ひさま、腰の長刀引抜くが早いか、

「えッ！」

と一聲と共に、座敷に點してあつた丸行燈を、物の見事に眞二つに斷ち割つて終ひ、

「貴様如き越後出の畫描きに、呼び捨てにされる筈がない」

と云ひつゝ、嵐溪に打向つた恐ろしい權幕に、主人嵐溪は眞ッ青になつて、命から／＼逃げて終つたことがある。

又、兩國の青柳で、一夕、畫家の宴會があつた。元より草雲先生もそこに列坐して居られた。杯盤が大分狼藉になつた頃、或る畫家が、席を立つて外へ行く都合で、先生の膳をフイト跨いだ拍子に、そこにあつた酒徳利に袴の裾が一寸引かゝつて徳利を倒したから堪らない、その邊一帯が酒の河となつた。彼が

「失敬」

と云ふより早く、草雲先生の手は、ものをも云はず、矢庭に、その男の片足を確と握つたが早いか、無雙の強力を揮つて、ぱつたとそこへ捻ぢ伏せた。所がその男も酒癖の悪い男と見えて、捻ぢ伏せられて黙つてはゐない。

「何だ！」

と云ひさま、起き上つて取組み合つた。さア大變！ 大きな強い男が二人組み合つた酒の上の亂暴だ、お膳からお膳へと、轉け廻つて、その狼藉さ云ふばかりもない。心ある人が、見るに見兼ねて仲裁せようとする、他の人はそれを留めて、悪と悪との喧嘩だから打捨て、置けと云つた、

「何だ?! 悪と悪との喧嘩だ?」

と云ふやうなことから、その喧嘩に枝を添へて大騒ぎになつた。それでも本人の草雲先生は、弱りもしないで、呟々とやつてをつた。

その外、柳橋の青柳へ、或る筋から招待された時、

「山谷堀から來て居る先生を、お宅から頼まれて御迎ひに參りました」

と、女中が取次いだので、酩酊してゐた草雲先生も、これはてっきり、宅に何か異變でも起きたに違ひないと驚きつゝ、直ぐ座を起つて裏の棧橋へ出て見た。そこには一艘の屋根船が待つてゐて、

「どうぞ、これにお乗り下さい」

と、船頭が手を取つて迎へてくれるので、よろめきながら夫れに乗ると、丁度、酒が廻つて來たのでそのまゝ、眠つて終つた。ぐっすり一眠りした頃、咽喉が乾くので目が醒めた。見ると、船は山谷堀とは反對の方角、永代橋の方へすんぐ下つて行く、變だ？と傍らを見廻すと、見馴れぬ侍共が四五人ゐる、先生が起き直らぬうち、細紐で縛つて終ひ、

「我々は白柄組の武士であるが、この頃、江戸で催される書畫會の席上で、何時も足下が狼藉を働き、多くの人々に迷惑をかけるとのこと、甚だ以て不都合である。依て我等が世の中のため足下を誡めむと思ひ、本日は、以後の見せしめのために我が屋敷へ連れ戻り、足下の膽玉を試して見るつもりであるから左様心得ろ」

と、威猛高に怒鳴るので、一時はその餘りに意外なるに驚いたが、根が勝氣の草雲先生、忽ち心を落つて、

「まゝよ、どうなるものか、白柄組とて何が出來ようぞ」とばかり、無言の儘、そこへごろりと眠て終つた。

良い心持ちに眠り續けて居ると、今度は頻に揺り起す者があるので、パチツと目を開く

と、何時の間に昇ぎ乗せられたものか、正體なき自分は、駕籠の中から揺り降されるところであつた。彼等の引立つまゝに座敷へ通ると相當な屋敷構で、長火鉢を前に、片膝立てた女が、長羅宇の煙管で煙草を吹かしながら

「さア遠慮なしに、此方へ進みなされ」

と云ふ、見るとその女は、天鷲絨の袍襪を着て居る。丁度、芝居で見る山賊の女房と云ふ格である。あまりのことに呆れて、言葉も出ないで、何も云はずに居ると、頓て長刀引下けて四五人の侍どもが現はれ、其處へ大きな膳の上に、數々の料理を盛つたのを運び出し頭分とも見える男が、頗る大形の三ッ組杯を重ねたまゝ、なみく／＼と酒を満たして黄金色の浪を湛へ、

「さアこれを美事に飲みきれれば好し、若し飲みきれず又は、酒の上で亂暴を働く時は、そのまゝには許して置かぬ」

と脅したが、そんな事位にビクともする先生ではない、少しも悪るびれた氣色もなく、彼等の差すがまゝに、その三ッ組を、上から順に美事に傾け盡し、滴る雫までも飲み乾して

甘さうに杯を嘗め、

「あゝ甘かつた！」

とばかりに、そこへ復たゴロリと、大の字なりに横になつたかと思へば、鼾聲、雷の如くぐつすり眠込んで終つて、朝まで一眠り。

翌日、四ツ頃になつて、却て彼等の方で、その大膽なる振舞に呆れて終ひ、遂にその場で仲直り、

「どうも、お立派〜」

と、以來白柄組の侍と、飲友達となつて、長らく交際を續けてゐられたとのことである。

十二 貧のつらさ

天下の亂暴者白柄組の奴等に、舌を捲かせたほどの大膽な勝氣な、敗けじ魂の草雲先生でも、所詮、勝つことの出来なかつたものが唯一つある。それは思ひも設けぬ「貧」の一字であつた。

山谷堀へ来た、格太郎が生れた、世の中は不景氣だ、晝の注文は無い。三年目位には、實に猛烈な貧乏に襲はれた。

「四百四病の病ひより、貧ほど辛ひものはない、金が糶の世の中ぢや」

と云ふが、實際そうだ、流石の草雲先生にも、この貧の辛らさを痛切に嘗められた。

或る時、三日間と云ふもの、全くの喰はず飲まずで、米一粒も口へ入れられぬ始末で、ほとく困り果てられた、揚句の果に、案じ出した窮餘の一策は、聖天町のそば屋から、三十日拂の約束で、盛そばを四百文だけ取寄せて、一先づ夫婦が空腹を凌いだ。けれども最早や三歳になつた格太郎は、廻らぬ口で、

「マンマーマンマー」

とせがむ、まんまでなければ

「いやぢや〜」

と、首を振つて駄々をこね、終ひにはそばのざるを投出して大聲揚げて泣き出した。これには流石、豪氣の先生も困つた。殊に親として子を愛せぬものはない、こればかりは決し

て貧富の隔てはない、寧ろ貧しい者ほど親子の情が厚い、先生は

「いやぢや〜」

と、格太郎の泣く聲を聴く度に、三尺の刃を以て胸を刺されるよりも猶ほ辛らかつた。如何はせんかと、殆んど途方に暮れてをられる折しも。

路次の角に「角中」と云ふ船宿があつた。その女房が、格太郎の泣き聲を聴きつけ、親切にも、赤ん坊の頭のやうな大きな握り飯を二つ、

「さア坊ちゃん！ お上りなさい」

と持つて来てくれた。

「えッ有難う」

と云ひつゝも、夫婦は餘りの有難さに、覺えず嬉し涙が浸んで来た。

「落ぶれて袖に涙のかゝるとき、人の心の奥ぞ知らるゝ」

と古歌にあるやうに、又は唐詩にある、魏の范曄が故事の

「尙有綈袍贈。應憐范叔寒」

とある如く、實に嬉しいものである。先生が天下の士なることを知り、他日の大成を知つたならば、誰かこの時に一碗の飯を惜むものあらんや、されど何れも同じ、それを知るものがなかつた。その中には角中の女房こそ、眞の知己であつた。先生は幾度かこの苦境を物語つては泣かれた。二つの握り飯、それは可憐なる格太郎が喜ぶのみではない、自分等二人も、實は飯が食ひたい、格太郎の手から取つて食ひたい位に米が戀しかつた。

その時は角中の女房の義侠と同情とに依つて助かつたが、それから後も亦復た斷食をしなければならぬやうな、貧しさに見舞はれたが、この時には、先きにそば屋から取つた、ざるが四枚あつた。世の中は何が幸福になるか分らぬもので、このそば屋が、商業の失敗のために、俄に夜逃げした。で、ざるがそのまゝ、残されて行つた。それを道具屋へ賣つて四百文を得たので、一時の飢を凌ぐことが出来た。このそば屋の徳に依つて、二度の飢が救はれた。

因みに云ふ、この角中と呼ぶ船宿の亭主が、慥かおどけ小説として評判な「東海道膝栗毛」の作者、十返舎一九のやうに聞いている。兎に角、一九は、船宿の亭主で山谷堀に

たことは事實である。それに草雲先生に交り厚く、互に往來してゐたと云ふから、或はそれが實際かも知れぬ。

餘談ではあるが、この十返舎一九の「膝栗毛」について面白い一説がある。

それに依ると、この原作者は、有名な酒井雅樂頭の縁者に、酒井仲といふ人があつた。この人は元來、華胄に生れながら、その窮屈な生活を好まず、常に花柳の巷に往來して、兎角、素行が修らなかつたが、一種の天才で、和漢の學に造詣深く、俳句、狂歌、皆それ／＼に秀で、居つた。殊に諧謔の才は天稟であつたが、身持ちが悪かつたために、家を飛び出して諸國を流浪いたし、掴まへられては又歸つて、或は勘當、或は押籠、その揚句、またフラ／＼と放浪の旅に出ると云つた調子で、横着の仕放題、我ま、三昧で、日本國中を氣に任せて遍歴をしてゐたが、元來が馬鹿でないから、行く先々で國々の人情風俗、さては風景から歴史まで、深い感興を以て、思ひ付くまゝに自由に書いて居つた。

或る時、この稿本を、十返舎一九が見て、

「これは面白い」

と驚き且つ喜んで、是非これを私の名で出させてくれと頼んだ。酒井仲先生も、如何に奔放とは云へど、身分柄もあるで自ら堂々と名乗つて出す譯には元よりいかぬで、渡りに船と喜んで、一九に貸したものであると云ふ、或はそうかも知れぬ。草雲先生と係り合ひの話、これも亦何かの因縁かも知れぬ。

十三 旅修行と質易者

貧苦の生活は、自ら人間を畏縮せしめる。それは磊落の氣象に富んだ先生としては、實に堪へ難き苦痛であつた。

「これはつまらぬ」

と、この苦痛を脱すると共に、更に心氣一轉、大に浩然の氣をも養はむと、一枝の筆を携へて、飄然として天下漫遊の旅に出られた。女房と子供とは、妻の妹に托したが、元より小使錢の餘裕のあらう筈もない。これが丁度、二十五歳の春であつた。

先づ行つた所が下總、今の千葉縣である。相當に晝の仕事もあつて、小使も取れるだら

うと思ひの外、何處へ行つても一向、描せてがなく、江戸の先生も殆んど顧みられぬので、囊中忽ち乏しくなり、今や旅費にすら窮するようになり、果ては宿屋にも宿つて居れず、毎夜くの寝所にも行詰り、彼所の農家の納屋、こゝの藁の中、或はその軒下と、順禮者にも劣るやうな憐れな野宿を續けてゐたものゝ、空腹を満す思案もなく、腹が減つては歩くことも出来ぬので、流石、豪氣の先生もほとゝ困り果てた。その中をとほく歩いて、朝早く八日市場へ差かゝつた折しも、村の祭禮で、鎮守の森の鳥居前に、陰陽の旗印を立てた易者の露臺があつた。が、主人は相憎く不在で、露臺の上には、易者の冠むる網笠と辨當箱とが乗せてある。鳥居から覗いて見ると、今しも本殿に進んで行くのがこの易者らしい。して見れば、お参りしてこゝまで戻つて来るまでには、鳥渡、間もあらう。好矣、その間にこの辨當を頂戴して、姑し飢を凌ぎませう、これも外ならぬこの鎮守様のお與へと、濟まぬことゝは承知しつゝ、心に喜んで、どつかと腰を卸して、この網笠を冠り、人が見れば、易者自身のやうに装ひ、早速その辨當の包みを開くと共に、瞬く間にかき込んで終つた。上首尾々々と、イザ立ち上らんとする處へ、六十恰好の田舎爺さんがやつて

来て、

「一つ身の上を觀てくれ」

と云ふ。毒食は、皿まで、旅の耻はかき捨てに、一文でも取れば取り得、今の一文は後の一兩、良い加減に占つてやれと、大膽にも筮竹を拈じ、算木を動かし、口から出まかせに爺さんの喜びさうなことを云つて無茶判断をしてやると、爺さんは大へん喜んで、八文投げ出して行つた。これは忝けなしと、懷中へ捻ぢで露臺を後に、雲を霞と逃けて終つた。

十四 初めて潤筆料の鍾馗

海光山色、畫中の路を歩いて、日數重ねて銚子の港へさしかゝつた時、折好くも、土地の大網主だと云ふ漁夫の親分へ紹介してくれた人があるので、先づその漁夫方へ落つくとその頃、大そう痘瘡が流行つてゐたので、主人が云ふには、

「お前さん鍾馗が描けるか、鍾馗が上手に描けば、屹度、描せては澤山あらうから、先づ試みに描いて見ろ」

との事であつた。

それから一生懸命に鍾馗を描いた處が、自分の心が届いたか、我ながら傑作と思ふほど出来が良い。が、凡て人物は、眼の入れようで巧拙が極まり、死活が分れる譯だが、殊に鍾馗に於て然りであるから、或る日、主人に仔細を話し、成田の不動尊へ七日間心願を掛け、その上で目を入れたしと云へば、主人も非常に喜び大賛成をしてくれた。依て早速、成田へ行き、七日間、水垢離斷食して祈願を凝らし、満願の翌日、早速歸つて、目を入れると、果せる哉、意想外の上出来であつた。主人も大層喜んで、これならばと、主人の盡力で、鍾馗々と、この土地ばかりで十數枚も描いたので、漸く懷中も温かに成つたので一先づ江戸へ戻り再び来るかとて、約三ヶ月もその家で厄介になり、深く主人の厚意を謝して暇を告げた。

この鍾馗こそ、草雲先生が、畫家生活の第一に、謝儀らしい謝儀を貰つた初めてあり且つ畫として眞面目に、研究的に努めたので、正に魂を打込んで苦心したものである。この苦心、この研究が、他日大成の素因をなしたものなることは云ふまでもないと、毎年五

月に、鍾馗の圖を揮毫するために、能くこの追懷談に耽けられた。

鍾馗こそ正に先生が發祥の圖であり、成功の畫であつた。昔に惡魔拂ひの卜占なるのみならず、正に幸福の請來者である、福の神である。先生と鍾馗、鍾馗と先生とは、正に二にして不二である。先生の心と鍾馗の心とは、相通じ相感じ渾然として正に一なるものである、故にその畫が傑作である。草雲先生を知らんと欲せば、先づこの鍾馗を知れ。

それから閱年經月五十年過ぎて、草雲先生が七十五歳の時である。その銚子の網主の孫だと云ふ男が、

「これは昔、先生が自分の家にゐて揮はれたものであると云ふが、果して眞にそうであるかどうか、安心のため鑑定してくれ」

と、この頃の相場で、一斤三四圓もする銘茶斤と、鱸の粕漬一樽とを土産に持つて白石山房へ來た。五十年の人生、茫々として夢の如し、變れば變るものである。先生もこの當時丹誠籠めて畫いた鍾馗を圖らずも見て、實に感憶無量であつた。が、この畫は正真正銘と折紙付になつて、本人は大に喜んで歸つたことがある。

五十年前、名もなき旅書師が、五十年後、天下第一の大先生になるとは、描いて貰つた連中は元より知らう筈もなく、そんな位なら俺も描いて貰へば好かつたと後悔しても、今更及ばぬことで、

「これが草雲先生か」

と知るに至つて、残念がる者ばかりであつた。

十五 松井家の家柄

草雲先生に磊落の氣象があると共に、これに伴ふ女房の菊女も、亦松井家の氣骨ある血統を受けて、自ら琴瑟相和する所があつた。

菊女は六人の兄妹で、四人が男、二人が女で、菊女と妹金とであつた。四人の男の内では長兄は彌左衛門、次を益太郎、次を新兵衛、末を文藏と呼んだ。何れも皆六尺豊かな大男で立派なものであつた。普通の入口では、首を傾けねば頭がつかへる位の身體であつた。然もこの内、酒を飲まなかつたのは、長兄の彌左衛門と末の文藏とであつた。益太郎も新

兵衛も、相當に酒豪であつたが、この頃、世間が大分物騒になつて来て、夜になると、方々で辻切り、試めし切りが流行る。殊に近い神田の和泉橋で、試めし切りが出て、毎晩のやうにやられて、世間では大へん恐れ、夜になると通るものがない、その恐ろしさ、その不便さが酷いと、大評判になつてゐる。

それを聞いた彌左衛門兄弟四人に草雲先生、

「それは頼でもないことだ、そんな試めし切りなどする奴は碌な奴ではない、これも人助けのためだ、義を見て爲ざるは勇なき也だ。我々兄弟五人がこれを聽いて黙つてはをれぬ好矣この試めし切りに出る奴を、あべこべに此方から試めし切りして、世の中の人を助けようではないか」

と、血氣と義に勇む五人、身の危難も忘れて、世のためにそれをやつ付けようと相談は即座に一決した。

そこで五人が籤引して、誰か酔漢になつて、よろ／＼とそこを通りかゝる、試めし切りの奴が出て来る、自分は好しとエーツと掛聲すると、それを合圖に、忍んで居る他の四

人が出で、片付けて終はうと云ふことになつた。

籤を抽くと草雲先生が試めし切りに逢ふ醉漢に當つた。大膽な先生は結局それが面白いと、日の暮るゝを待ち兼ねて、小田原提燈を片手に、御馳走の折詰を片手に、どこかの宴會戻りの様子を装ひ、よろ／＼と千鳥足に、ぶら付きながら、羞しかつたのが和泉橋、それとは知らぬ試めし切りの奴、好き客御座んなれと、頬冠りして腰に長刀を帯びた浪人姿の大男、長刀の目釘に濕りをくれつゝツカ／＼と出て來た、時こそ好ければとエーイと勢ひ好く合圖をすれば、待つてゐた四人の者、橋の袂の小暗い處から、バラツ／＼飛び出して來た。その勢ひに驚いて逃げむとするを、さはさせじと引つ捉へ、有無をも云はせず、五人で滅多切りに切り付けた。多勢に無勢、忽ちやつ付けられて、憐れな最後を遂げた。そこで死骸を側の方へ寄せ、橋の欄干へ貼紙して、

此者儀、毎夜、夜に入るを待合せ、往來の町民を切り試めしと申し、故なく切捨て、懲へ金品を奪ひ取ること數日に及び、附近の町民恐れをなして、夜分は通行する者も無之始末、今夕も我々に切り掛りしを以て、不都合千萬に付、切り捨て候也。

松井新左衛門一家

町奉行殿

と認めて、そのまゝ一同は歸宅した。實に痛快な復讐である。

松井家には、家康直筆のお墨附があつて、特權を與へられているが故にたとへて武士と雖も、不都合の場合は之れを切り捨て、この理由さへ立てば、何等、科めはないことになつてをる。

殊にこの松井家は、前にも云つた通り、お目見格以上の家柄で、常に立葵の定紋を附けることを許されてゐた。その上、家康のお墨附か破格の勢力を有して居る所から、面白半分に四人の兄弟が、立葵の定紋附の着物で、何れも義經袴に反ツ刀を挟み、鐵扇手にして吉原へ繰り込み、勤番者に喧嘩を賣掛け、和解と稱して料理屋へ連れ込み馳走をさせると云ふやうな、遊戯いたづらをすると云ふやうな實に無邪氣なものであつた。

或は又、八丁堀が廻つて來て、侍に喧嘩を賣掛けて、不都合千萬なりとて町奉行へ引立あられることがある。それを却て面白がつて、態と喧嘩を賣掛けるので、元々勤番者を喧

嘩相手にするのが目的なのでない、町奉行を相手にするのが眞の目的なのである。何故と云ふに、兄弟等は葵の紋附の着物の上に、廣袖の襦袢を引かけ、一見、ならず者のやうに装ひ、八丁堀が知らずに町奉行所へ引立て、「褌ぎませイ」と怒鳴つて、襦袢を引褌ぐと、これはしたり、下には立派な立葵の御紋、町奉行は驚いて、

「誰方様の御身内？」

と、恐る／＼尋ねるを待てるて、

「葵の定紋へ繩打つて好いのか、我々はお目見得格の松井新左衛門一家である。寺社奉行なら兎もあれ、町奉行へ引立て、砂利の上に座らせるとは不都合なり」

と、威猛高になつて啖呵を切る。すると恐れ多い失策とて、町奉行は、

「御内聞々々」

と、扇子の上に黄金を包んで差出し、却て町奉行が謝罪するので、それを「御内分取り」と云つて、兄弟等が面白がつたものであるが、實際これは、松井家ならでは出来ぬことで金では買へぬ藝當だ、草雲先生も例の腕白天性として、この仲間入して、「御内分取」をやつ

たこともあり、と大に笑つて話されたことがある。

この松井家の血を受けた菊女である。普通の女とは違つてゐて、自ら草雲先生の氣に入つた所があつた。この二人を父母として生れた一子格太郎、彼は確に超凡越格の人物であつたに違ひない。彼の大成を見るに至らずして早く世を去つたことは、返す／＼も残念であつた。

十六 松井家の零落

松井家の家柄が良く、特抜の地位を占めてゐると共に、自ら裕福であつた。先づ家祿の外に役扶地と云ふものがあつた。土器の方では、轆轤を使ふものは、一臺に付、年分二百文づゝの税金を、全國から納めて來た。これが可成りあつたものだ。故に三重の祿を取つて居る形で、自然、裕福な譯である。

富めは奢り、奢れば亂れるは世の習ひで、俸共が揃ひも揃つて皆道樂者で、自分から旦那氣取りで御金を出して、態々、神田祭の花車の上で馬鹿踊りをする奴もあれば、年中、

海へ網打ちにばかり出て、遊び暮す俣もあり、殊に益さん（男益太郎）などは、親の金を小判で百兩盗み出し、その時分、木挽町の歌舞伎座で、一代の人気を集め、殊に女子供に騒がれてゐた、岩井半四郎がゐる、素張らしいものであつた。この芝居の跳ねるのを、途中で待受け、侍姿のまゝで半四郎の前に立塞がり、

「貴様は一體、何者だ、武士の行手を遮り、剩へ女の衣類を着し、額にあてた紫の切地は何の爲めだ、無禮極る奴だ」

と脅すと、この時分では、俳優を「河原乞食」と蔑んでゐたから、武士の前などでは、ビヨコ／＼と頭を下けて小さくなつてゐたものだ。が、この半四郎は殊に人気役者で、女形おやまの第一人者で、殊に女子供に愛かれて、「大和屋々々」と呼ばれて、その歸りなどには、美しい藝者や道樂息子などが、ぞろ／＼従いて來たものだ。そこを武士に咎められたので、人氣を下げることに夥しい。早速、額にあてた紫の切地を取り、大道へ平伏して、

「ハイハイ、手前は半四郎と申す役者で御座います。決して御武家様の行手を塞いだわけでは御座いませぬ。以後は謹んで注意致しますほどに、何とぞ御許し置き下され」

と、土下座して詫び入るのを見て、益太郎は懐中より例の小判百兩を取り出し、ザラリとそこに投げ出した。時ならぬ山吹の花が路傍に咲いた。

「そうか、貴様が半四郎か、評判の大和屋だな」

「ハイ」

「それならこの百兩を呉れてやるから、拾つて行け」

と大盡氣取る馬鹿けた振舞をして、喜んでをると云ふ始末。

兄弟が揃つてそんな風であるから、お目見得以上の格でありながら、一同が時の將軍様のお顔を知らないと言ふ有様で、手代の源次郎と呼ぶ男が、代理で將軍の前へ出て、御用を聞いて來るやうなことであつたから、裕福の家も忽ちぐらつき始め、その頃、先代より拜領地であつた中橋の廣小路や、池の端や、入谷を初め、淺草奴鰻の角から蛇骨湯の方へ折曲つた地所までも、皆な人手に賣渡して山谷へ移つた譯で、大分、零落して來た。

いよ／＼小遣に窮して來ると、例の「奉行いじめ」で「御内分取」をやると云ふ亂痴氣を始め出す。それも再々やるので、この頃では八丁堀の方で相手にしなくなつたので、今

度は川岸を變へて、中川の舟奉行を喧嘩相手にする新手を考へ出した。それは中川は「御留川」と稱して、將軍のための禁斷漁場で、その見張番として、川岸に舟番所を設け、これに舟奉行を置いた。無情と思ふ魚にも矢張り心はある、魚がそこへばかり集つて來るので、釣道樂の者等はこれを羨んだものである。それを松井兄弟は横着にも程があつて、殺生禁斷の場所を破つて、慥と目立つやうに舟番所の近くで釣をやる。忽ち見咎められて、舟奉行へ呼び出される。それを待つてゐるのだ。例の姿で

「葵の定紋へ繩打つて可いか？」

と、吉原でやつた手をやり、舟奉行を手古摺らせて、揚句の果に「御内分」を捲き上げると云ふ始末、實に呆れたものだ。

それも度々やるので、舟番所の方で能く知るやうになり、終ひには

「今年は、大分、鱸が多いやうだから、釣りに來い」

と云ふやうに心安くなつた。

そんな鹽梅で、名譽ある松井家も、零落して山谷下んだりへ落ち延びて行つた。

「自分もこの御多分に洩れぬ一人だ」

と、呵々と笑ひつゝ、草雲先生が能く話された。今にして思へば、實に感慨無量である。

十七 全盛の山谷堀と俠妓小照

山谷堀も、今では見る影もない無風流な土地で、徒に肥料船の溜場になつて終つたが、昔は江戸屈指の狹斜の巷で、風流才子の銷金窩で、

「よろづ吉原、山谷堀」と唄にも謳はれて、吉原と併び稱せられて、江戸名所の一つに數へられ、中々全盛を極めた意氣な土地であつた。その頃では、待乳山下の側は船宿と藝妓屋が軒を並べ、水郷の情趣、滴るやうであつた。殊に夏の夕方など、家根船の出入が目まぐるしく、晝のやうに美しくかつた。佃と云ふ曲の音メ賑かに、三味線かき鳴らして、藝妓が客と共に、向島あたりの料理屋さして乗出して行つた。向島から墨田川一帯の、花のやうな繁華は全くこの時代で、遊ぶ人も今日ほど俗化してゐないので、全く江戸情緒が旺盛してゐた。

憚ながら堀の小照の估券が潰れます。何とか恰好をつけて貰はねば、いつかなこの手は放しませぬ」

と、頑として應じない。貴公子もほとく困り果て、決して悪意でやつたのではない。畜生の馬のやつた粗忽と、許してくれと謝つた。

この小照は、同じ山谷堀の小萬と一時、俠名を謳はれたのと肩を並べて、土地の賣ッ兒で、今は山谷橋際の深川屋と云ふ料理屋から、座敷の暇を貰つて外へ出たばかりであるが狸々藝妓とあだ名される程の大酒家で、酔歩躑躅として千鳥足、ちよこく運びに堀の方へ廻らんとした時、千住方面から馬を驅つて來た貴公子、危ぶない！ と呼ぶまもあらばこそ、一寸馬足に觸れて躓づいた。が、大したことはなかつた。

「何だ！」

と云ひさま、馬の足を捉へて離さぬ所に、小照の意氣がある。

「詫をせむにもラチをつけるにも、大道では話もならぬ、まア兎に角」

と、深川亭へ伴れて登樓して終つた。これが初會で、貴公子は小照にぞッ魂惚れ込んで通

ひ詰めた揚句、つひに子までなした。十月の苦勞が終んで、生れ落ちたのが玉のやうな男の子。

その貴公子とは誰であらう征東都督近衛公——今の公爵の祖父君であらう。その兒は漸く成長したが、情けない哉、腹が卑しい。近衛家へ入れる譯にはいかぬ。伊勢の一身田高田派本山の専修寺へ、養子に遣はされた。これが今日の常磐井伯爵家である。

この俠妓小照は、本名をお百と云つて、松井家の總領新左衛門の息新兵衛の二女であつて、草雲先生の室菊女の兄の娘である。時世時節で賤しい稼業はしても、泥田に咲く蓮の花、心までは汚れてゐない、その沸々たる脈管には、連綿たる松井家の血が流れてゐた。されば近衛公と意氣相投する所あつたのも決して偶然ではない。

そんな姻戚關係から、娘お百が藝妓になつた時、父の新兵衛は、義兄に當る草雲先生に頼んで、藝名を付けて貰つた。そこで先生は「小照」とある。小照には、義理ある叔父に草雲先生を持ち、勿體ない近衛公の落胤を生み、それが常磐井伯爵の母となる。手繰れば不思議な因縁の絲、何時までも切れで續くは思ひ出の話あり。

山谷堀の時代は、先生が梅溪時代で、謂ゆる喧嘩梅溪で名を賣つた頃で、年も若くてなかく元氣だから、面白いことが随分ある。

先生の妻女の弟に龜次郎（後に新兵衛）とその弟に文藏と云ふ二人があつた。そこへ先生と三人の兄弟が、何でも變つたことがやつて見たい性分で、或る時、三人が甘く相談して新宿の女郎屋某樓へ遊びに行つた。上手に企んで行くのだから、三人が別々に登つて、同じ一人の女郎を馴染として買つた。そこでその遊女が梅溪の部屋へ行つた時には、龜次郎と文藏とが、同じやうに手を頬に敲いて呼ぶ、呼ばれるから仕方がない遊女がそちらへ行つて、龜次郎の部屋に行つて居ると、今度は梅溪と文藏とが、うるさく手を敲いて復た呼ぶ。この度は文藏の方へ行くと、龜次郎と梅溪とが呼ぶ、と云ふやうな調子で、さんざんに遊女を苦るしめた。ホーホーと忙がしさうに飛び廻るのを見て興がつてゐた。

こんな無邪氣なことを喜んで、時々遊びに行つたが、つゞけて丁度一ヶ月にも及んだ。最後に時分は好しと、今度は三人一しよに登樓して、例の女を呼んだ。一時に三人のお客で、女の方では大迷惑。ほとく困じ果てゝゐるのに附込んで、

「これ！ 我々三人は兄弟である。それを知らぬ振して、馴染客として登樓させ、他の客のやうな素振をして居るとは怪しからぬ、同じ商賣とは云へ、餘りに水臭い」と怒鳴り、三人が揃つて異口同音に抗議を申出でられこの女を途方に暮れさせて、わけもなく喜んでゐたと云ふことがある。

十八 梁川星巖との關係とお戸帳の盜賊

絃歌の聲なまめかしき、畫のやうな山谷堀の生活は、忽ち一夢となり、打つて變つて、鐘鼓、梵唄の聲靜かな、紅塵堆き中に在つて紅塵に染まぬ、淺草觀音地中傳法院内の生活となつた。實に面白い。

傳法院時代は、全く先生の精神的に大成した時代で、先生を全く信仰的に導いた。先生はこゝに敬虔なる觀音信仰者となられた。有難く不思議なる淺草觀音出現の因縁を頂禮しつゝ、朝夕に觀音堂の御寶前に參詣せられた、觀音堂の向拜は、實に立派な、莊重な彫聯が掲つてゐる。

實相非莊嚴。金碧裝成安樂刹。眞身絕表象。煙霞畫出補陀山。

二十四字で、これこそ活ける法華經であり、觀音經である。字簡にして能く觀音様の大説法をしてをる。見よ、煙霞の靈變たる、そのまゝに觀音様の淨土なる。補陀山である。補陀山であるからとて、遠い支那まで訪ねるに及ばぬ、淺草の觀音様、こゝがそのまゝ、補陀山である。觀音様とても、決してこれを遠い所に尋ねてゐてはならぬ。この眞身は元より表象を絶してゐるが、この觀音様に直々逢はねばならぬとの大説法である。こゝに淺草觀音の尊いことを説いてをるではないか。

草雲先生は、朝に晩にこの聯を讀んでは、自ら觀音信仰の栞とせられたに違ひない。殊にこの傳法院時代に於て、初めて草雲先生の畫家としての名が天下に紹介せられたので、最も注意しなければならぬ大切な時代である。「淺草草雲」と呼ばれて、どうやら世間に知られ始めた。この時代こそ正に先生の苦辛研究時代であると共に、一方には依然として貧苦と奮闘せられてゐたが、先生の一代を通じて、正に黄金時代とも見るべく、日本歴史なら恰も鎌倉時代である。苦辛の内に愉快あり、努力の内に發達あり、貧苦の内に安樂があつた。

明治中興に至り「四十八鷹」と名を打て、書舗の懇請を容れて上梓され、大に當時の美術界を賑はし頗る美本が發賣された。これぞ草雲先生が、傳法院時代に貧苦と戦ひつゝ描いたもので、その時は、別に「四十八鷹」と云ふやうな題名は無論付けてはなかつた。而も極めて精巧なる密畫で、謂ゆる流派などに捉はれず、超然として自由に、最も寫生的に勇ましい鷹を、勿論鷹に所屬する花鳥畫。有らゆる姿態を變化に富んで書いたので、前後四十八葉の多きに及んだ。以て先生の筆致の精細と、研究の眞面目なるとを見るべきである。尤もこの時代は、畫家が他流の筆意に依ることを前にも云ふたとほり、一つの耻辱とした因習があつたので、先生はそれを無落款にしてをられた。が、出來も傑作なので、或る外人がこれを見て、

「日本にもこんな畫家があるか！」

と驚き、殆んど顧みられない日本の美術を、海外に紹介したいと切望の餘り、さらに再版することにした。折角、外國にまで紹介するのなら、せめてこの筆者の名だけでも知りた

いと、いろ／＼詮索した、揚句當時の朝野新聞記者成島柳北が、

「これは紛ふ方なき草雲の筆である。狩野派のやうな所もあるが、針を絹に包んだと均しく、絹外へ針頭が顔を出してゐる。出した顔が草雲である」

と云ふやうな鑑定をしたので、その書店が早速、先生の家へ来て了解を得て問ふた所、大喜で歸へり夫からいよ／＼佛國へ輸出されると、大評判になつて、日本美術界のために大名譽となつた。この傳法院時代には、實に驚くべき名作、傑作が澤山出来て居る。

併し一面には、實に憐れな生活で、常に貧苦のために悪戦苦闘してゐたのである。この傳法院境内仲見世の住宅といふのは、三軒、軒を並べて、右が日本一の詩人にして且つ勤王の士たる梁川星巖、左は幕府の御用金達中山某、その中山は、慰み半分に、草雲先生の弟子となつて書を稽古して、號を嵩岳と呼んでゐた。殊に星巖の妻紅蘭は、女ながらも文筆の才があつて、詩も出来れば書もやる、その書は勿論南畫である。そんな譯で、星巖と先生とは實に親しく往來せられ、この家庭は、實に打解けて交際して居られたが、申合せたやうに、何れ劣らぬ貧乏世帯で、お互の懐具合が手に取るやうであつた。

或る夕方、先生は例の如く觀音様へ御參詣に行かれた歸りに、側の草駄天堂へ、廻りて

かた／＼一寸詣られ、見るともなく不圖見られると、これは又意外?! 無雜作に掛けてある御戸帳が、勿體ないほど立派な蝦夷錦である。つぶしに賣つても三兩や五兩はある。今日の三兩……それは他日の百兩にも千兩にもあたる。これが今、目の前にぶら下げられたのは、日頃信心の觀音様が、我を憐れんで與へて下さつたのだ、幸ひあたりには誰もゐない草駄天様には御氣の毒だが一時、一寸拜借するも、時世時節だ、その内、花咲く春にも逢へば必ず御返しするからと、心に念じつゝ、悪るいことゝは知りながら、それを脱して拜借に及んだ、早速それを去る骨董屋へ持つて行くと、三兩に買つてくれた。五兩にと頼んだが駄目だつた、今日の三兩は貧しい生活の大助かり、何時か隣家の星巖に、臺所の豊かさを嗅きつけられ、

「先生、この頃は大分工合が好ささうだが、少し用達てゝ貰へまいか」

と圖星を指されたので、こちらも少々氣が咎めるので、好い氣になつて、言ふがまゝに金一兩だけ貸した。一兩の金を貸すなどは夢にも思はぬこと、自分も元より驚くが星巖は更に驚いた。これも亦運命の神の惡戯だ。

程もなく、星巖は詩の稿料が入つたので、綺麗にその一兩を返金して、さて改めて、
「君御恩借の御金は有難く御返しするが、この度の金の出所に付、少々不審の點が御座る
が、一體どうして入つたのであるか」

と、ヘンなことを聞いた。草雲先生は悪びれもせず、

「それか！ それは」

かくく、斯様と、及ばぬ時の神頼みと、韋駄天堂拜借の一條を、隠さず正直に話されたの
で、流石の星巖も苦笑を禁ずる能はず、からくくと笑ひつゝ、

「君が盜賊で、僕がその子分、罪は同罪だ、一時助けて貰つた御恩を思へば、黙つても居
れぬ。己れも出すから、二人で新らしい錦欄を求め、それを携へて傳法院へ詫に行かう
ではないか」

と、早速、田原町の呉服屋から錦欄の戸帳を買求め、傳法院へ二人で出かけ、一分四什露
骨に懺悔して、今後は決してせぬからと斷つた。傳法院でも、終んだ後のこと、而も正直
に懺悔されて見れば最早やその罪は消へて、元の清淨の身心になつたと、何の咎めもなく

寧しろその正直を讃めて、笑つて済んだ。

この逸話は、嘗に傳法院時代の傑作なるのみならず、先生一代中、空前絶後の傑作であ
つた。これ等も亦東洋的豪傑の半面が偲ばれる。

當時は、星巖も劣らぬ貧乏で、ある夏の日、不圖、草雲先生が、星巖の宅へ、

「御面！」

と訪ねられると

「ハイ」

と妻紅蘭の返事がした。出て来るかと待つてゐたが、容易に出て來ない。復た

「頼まう」

と呼んだ。

何時もなら直ぐ出て来るのみならず、星巖と共に來て、

「さアさアお上り」

と云ふのに、今日はドウしたのか、唯返辭のみで頓と姿は見へぬ。又、

「頼まう！」

と呼んだ頃、漸く紅蘭女史が、おづく〜と出て来た。

来たは来たが、これは又驚いた。如何に眞夏とは云へ、女だてらに素裸體、小い前掛に見悪い所だけは掩つてゐる。流石の草雲先生も驚いたが、あまりと云へばあまりだ。心安い中として、

「紅蘭さん、正門だけはそれで好いが、裏門の方は少々物騒ですなア」と云へば、紅蘭女史も臆せず、

「さアそれだから、一寸、出て来れなかつたのです」

と、それでも顔を赤らめつつ、後遂りに奥へ引込んだ、

紅蘭女史は、だだつ兒のやうに云はれてゐるが、なか〜以て女らしい可愛い所がある星巖は安政五年九月三日頓死す其年悪疫流行幾萬の暴死を出す星巖亦たこれに罹る。時に類齡七十其春門生相集て古稀の賀筵を催さんことを乞ふ。星巖作詩之れを拒辭す。

鴛劣無能年既高、眼看鯨蠶鼓風濤、生辰不受詩明賀、爲憶大君宵肝勞

十九 妻菊女の狂亂と月の大悟

「四十八鷹」以來、先生の畫名は頓に揚つて、各方面からボツ〜依頼もあるやうになつたが、相變らずの貧乏で苦しんでゐた。折柄、ある筋から「秋の七草」を、最も精密に丹誠籠めて描いて貰ひたいとの依頼を受けた。これぞ誠に貧苦の救濟、地獄に佛と喜んで引受け、早速、筆を執つた。

思へばこれも亦觀音様の御利益、一つには觀音様へ御禮のため、二つには丹誠籠めて精進潔齋し、妙智力の加被を仰いて、一代の傑作を得むものと、朝晩に近い觀音様へお詣りに行つた。先づ朝、お詣りしては、丹誠を籠めて筆致の精靈を願ひ、孜孜屹々として一日を勉強してこの進境を喜び、夕に復たお詣りしては、一日の無事と進捗とを謝し、更に明日の加被を願ふては歸る。晝三昧、信仰三昧に、一日二日と過ぎて、一週間も経つた時は、うれしや「秋の七草」は大體出来上つた。その一點一畫、悉くこれ先生の血涙の結晶であり、丹誠の結晶であり、信仰の結晶であつた。



最早、落款だけになつたので、先生も初めて安心して、氣が伸々して、がっかりされた位であつた。思へば恙なし、而も自分ながら感心するほど見事に出来上つたのも、亦偏に観音様の御利生である。何は兎もあれ、その出来を御報告すると共に、聊か御禮も申したいと、梓張のまま床の間に立てかけて、観音様へお詣りに出かけられたのは、早や日も暮れかけた頃であつた。

先生は、「秋の七草」が思つたより立派に出来、それが仕上がつたと云ふので先づ大安心、観音様に信仰の賜なりとて、毎時よりは丁寧に、ゆつくりお詣りして、少し遅くなりあたりは已に暗くなつて、路々の家にも燈火が點いてゐる頃に、漸く我が家へ歸つた。毎時もよりは元氣に、

「歸つたよ！」

と呼んだが、返辭がない。平生は行儀好く

「お歸り遊ばせ！」

と云ふ菊女の顔が見えぬ。それに家の中は眞暗だのに行燈も點いてゐない。

「おい、どうした?! お菊お菊！」

と、呼びつゝ、暗い座敷へ通つて見ると、これは驚いた。お菊はその座敷の暗い所に、一人でチヨコント坐つてゐるのだ。

「お前、何してをるんだ? そんな所で？」

と怪んで問へば、初めて我が聲が耳に入つたか、驚いて振向き、

「お歸り遊ばせ」

と、何時ものやうに應接した。

「お前、何してゐるのだ?!」

と、餘りの不思議に、重ねて問へば、

「ハイ、妾は秋の七草が、淋しくて大嫌ひ、それで貴下がお描きになつたのを、今消してをりました」

と、平然として云ふ。

「何?! 七草を消した?」

と、我が耳を疑ひつゝ早速、行燈を點けて見ると、こはそも何事ぞ！一週間の丹誠、瘦せんばかりに苦辛したこの血涙の結晶！それを縦横十文字に墨を塗つて、ベタ／＼にして終つた。

「何だ！こんなことして！」

と、怒らざるを得なかつたが、お菊は尙冷然として、

「妾はこれで初めて清々しました」

と云ふ態度が、いよ／＼へんになつた。七日の苦辛、一夕にして水泡に歸し去つた。

見れば、眼がへんに釣り上つて、髪はおつさはらに蓬々として、先月來、具合が悪いとて臥てゐたので、顔も蒼白く、少し面癩れる。それをほの暗い行燈の影に見る。何だかぞつとするほど氣味が悪い、貧故餘りに苦しんで、時折、氣がへんになつたこともあつたが、今はそれが發作的に爆發した、ああ氣狂いだ！と驚いた。怒つても駄目だあこの苦辛の作品を、滅茶／＼にされて終つた上、内助のお菊を氣狂ひにして終つたと、そこに坐つたかと思ふと、さめ／＼と熱い涙が、膝を濡ほした。

情けない、如何に貧とはいへ、貧故に氣が狂亂するとは、妻の狂亂、これから一家をドウ支へて行くか。流石の先生も、惑はざるを得なかつた。

これから後、お菊は全くの氣狂ひとなつた。或る時、先生が外から戻つて來られると、菊女は一心不亂に、他所行の美しい縮緬の腰巻を、ズダ／＼に小さく惜氣もなく切つて終つてゐる。この縮緬の澤山の小切れを、釵の足で、疊の敷目へ丁寧に詰め込んでゐる。あまりにおかしいので、先生は

「何をするのだ？」

と問はると、菊女は眞面目に、

「ここから蚤が出て困るので、蚤の出て來ぬやうに、塞いでるます」と答へた。

こんなやうなことが屢々あつた。菊女はいよ／＼本物の氣狂ひになつた。

明治畫壇の權威橋本雅邦も、矢張り貧乏で苦しんだ、一時、海軍省の雇員として築地の役所へ出勤の留守中、女房が自家に放火して焼いて終い、雅邦をして長大嘆息せしめたことがある。草雲先生の妻、丁度これと一對で、畫家の妻に不運なる、又憐むべきである

身は貧苦に攻められて、身體には縊縷を纏ふてゐても、心は常に高山流水、偉人高士の風自ら備はつて、何時も美しく錦を纏ふてゐる。ここに風流の閑日月があつた、藝術家としての立派な面目があつた。

ほどもなく、貧しい家庭の内助の功有つた室菊女が逝くなり、家の中は俄に秋の枯野のやうに淋しくなつた。加ふるに一子格太郎は、將來の成功を楽しみに、塾に入れた。家には先生一人きりで、淋しさは惻々として身を襲ふ。

頃しも中秋の十四夜、空は美しく晴れて、圓い月が涼しい光を投げた。恰もこれ大口千里が、

月見れば千々にもこそ悲しけれ、我身ひとつの秋にはあらねど

と、歌人をして千古に泣かしむるの夜である。況んや最愛の妻を失ひ、搗てて加へて貧苦に攻めらるる先生に於てをや、泣かざるを得ない。その心餘つて、珍らしくも歌を詠まれたわれによく似たる今宵の月なれや

浅茅が原にひとり澄むらん

とこの、境涯に至つて、初めて能く月が悟了された。美しい月と、立派なる先生と、先生と月とが全く一つになつたのである。先生の心は月に入り、月の心は先生の胸に流れた成島柳北が

月や我、我や月やとわかぬまじ

心のすめる秋の夜の月

とは、大悟の歌として有名であるが、先生のこの歌と、全く同工異曲である。憐れなる境遇の中に、その心は此の如き立派な大悟がある。先生の畫は、決して偶然に出来たものでないと、いよいよ堅く信ぜらるるのである。

二十 親子の情愛と勤王と佐幕

豪勇、磊落、一世に鳴つた草雪先生にも、亦温かい涙があつた。この涙こそ、藝術家として百世に名を成す人たらしめたのである。恰も鬼をも挫くやうな乃木大將にも、逝くなつた二人の子供は勿論、旅順に戦死した幾萬の忠勇なる兵卒を思ふては、滂沱たる涙を禁

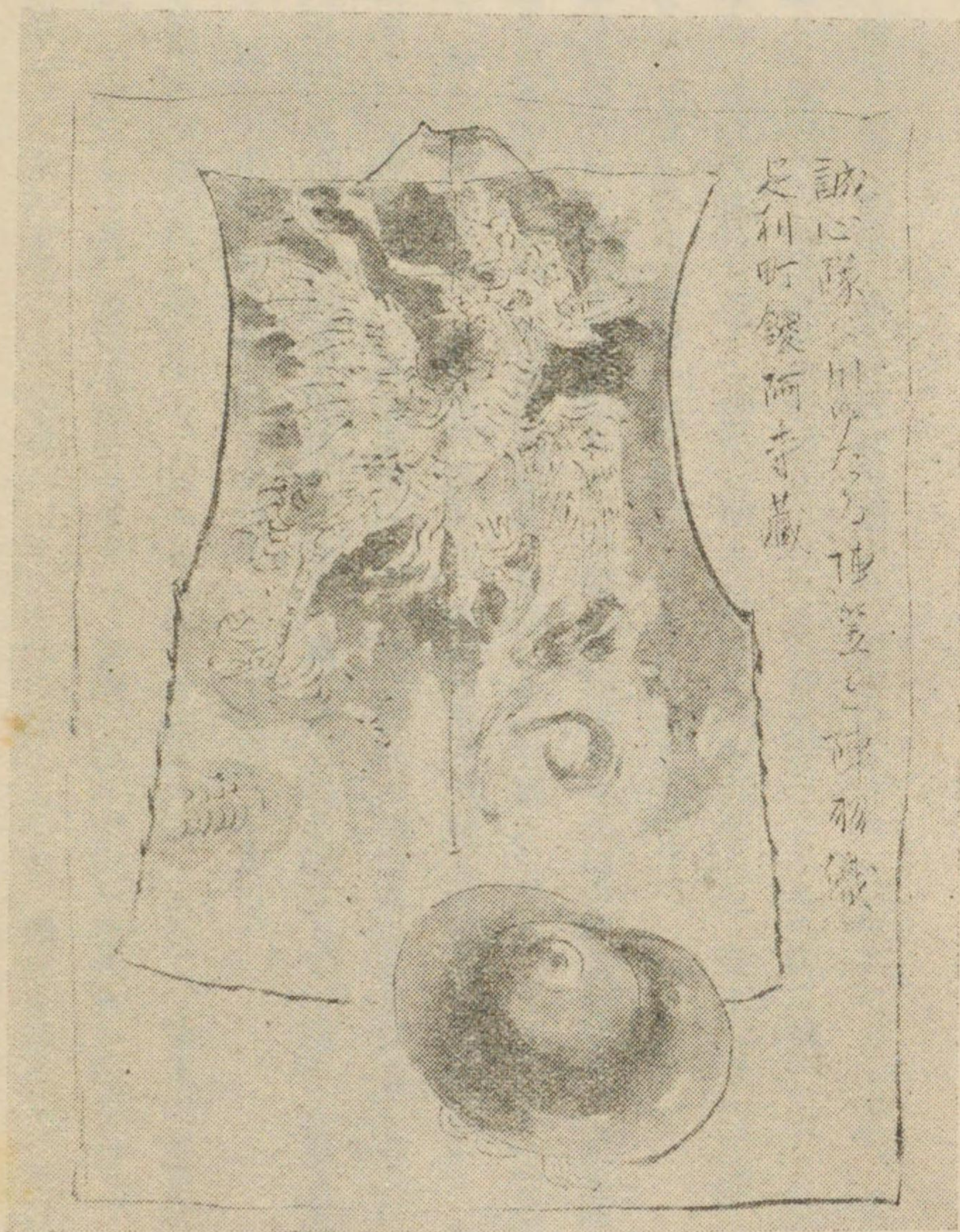
じ得なかつたやうなものである。この涙こそ、將軍をして武士の典型として、花も實もある日本武士として、千載に仰がしむる所以である。

草雲先生は、一子格太郎の死を思ふては、能く泣かれた。ここに美しい人情があり、美はしい親子の情があつた。先生は能く

「俺は寄邊渚の捨小舟、誰を力と頼む人もない孤獨の身なるがために、幸ひに今日の境遇を贏ち得たのである。若し倅格太郎でも達者でゐたならば、恐らくは今日の名は成せなかつたらう。格太郎も早世し、外に手助けもないために、畫を描くより外に、自分の慰安となり、老後の安定となるものはないと決心して、非常に努力した、即ち禍が轉じて福となつたのである」

と、正直な述懐をされた。その度に、濃い睫毛には、涙の露が宿つてゐた。

先生をして常に泣かじめた格太郎こそ、先生とその室菊女との間に出來た、唯一粒の男の子であつた。貧乏の中にこそ苦るしんだが、その愛は、決して百萬長者に劣らなかつた漸く長じて、或る漢學塾に入れて専ら漢學を修めしめた。時恰も明治維新前後のこととて



尊王攘夷、勤王倒幕、さては公武合體より、勤王の志士あり、佐幕の勇士出で、天下は麻の如くに亂れた。幕末第一の豪傑と云はるる井伊直弼が、大老の職に就いて、この難局を處理し、安政の大獄を起して謂ゆる勤王の志士を一網打盡して、天下を泰山の安きに置かむとした、遂に勤王、佐幕の兩黨に對立することになった。

然るに運命ほど奇しきものはない。草雲先生は擲筆事戎劍の氣概を以て、勤王黨として活躍されるのに反して、一子格太郎は、佐幕黨として戦ふに到り、父子相争ふの悲劇を生じた。即ち先生の藩主、足利の戸田氏は、表高壹萬壹千石と武鑑には見ゆれども、實際收納は七千石に過ぎずして、内外多端にして、御殿様はお氣の毒なほど食乏であつた。猶ほ三州田原の渡邊華山の藩主三宅侯が、僅に一萬二千石の小藩にして、而もこれも劣らぬ食乏で、勤王の活動が思ふに任せなかつたことと丁度同じである。

それで戸田氏では、藩士少く、加ふるに軍用金の貯へともなく、勤王の大事を決するには、不幸にして甚だ後顧の憂あるを考へ、當時、浪々中の草雲先生を起用して、足利に呼び戻し、町家の子弟に士格を與へ、これを誠心隊と名づけ、訓練を施して不足の藩士を

補ひ、以て一朝、大事の用に供せむとした。

草雲先生は時こそ來れと足利に到り、専らその誠心隊の中心となり、これが指揮を司ると云ふ始末なるに拘らず、一子格太郎は、江戸に在て、從來、學んでゐた塾が、擧つて徳川の恩顧に報ゆると云ふ關係上、佐幕黨となつて、期せずして父とは正反對になつた。これも亦止むを得ざる時勢である。子を愛すること人に増した先生としては、實に堪へ難き苦痛で人知れず、涙を絞られた。

これがため親子の間が、兎角、面白くなかつた上に、更にここに面白からぬ一事が出来たそれは先生の隣家にして而も門人たる中山嵩岳、大へん心安く交際してゐたが、不幸にして女房が早世したので、お墨と呼ぶ出戻りの妹と本妻の忘れ形見たるお房と云ふ娘と、三人暮して極めて氣樂であつた。

然るに格太郎とこの娘お房とは、丁度年頃の若い者同志、加ふるに心安い隣合、遠くて近いのは男女の中とやら、二人は何時の間にやら、親の目を忍ぶ仲となつて終つた。所が、義理の母なるこのお墨も、極めて多情多淫の女であつた。

一方、草雲先生は、室菊女の没後、男世帯の兎角不自由な所から、隣り合のお墨が時折手傳つて助けてくれた。そんなことから段々心安くなつて、先生との間に、美しい戀が出来てゐた。然るに多情なるお墨は、更に發展して、當時、幕内の關取であつた千葉嶽と云ふ力士と、怪しい仲となつた。それが早くも早雲先生にまで嗅ぎ付けられた。さうなると毒婦なるお墨には、先生が目の上の瘤となつた。何とかせねばと考へてゐる内、機嫌よく來た先生に、恐ろしや、毒を盛つて、一手に片付けようとした。毒を盛られた先生、「これは失策つた！」

と氣がついたので、直ぐ行燈皿の油を嚙み下し、幸ひに毒を吐き出して終つたので、危き一命を取り止めた。こゝらの様子は實に先生の大膽と、その武士的用意の細心なるが分る。こんな恐ろしい仇同志となつたから、自然、その子格太郎とお房との間のことが、兎角圓滿には進まぬことゝなつて、父嵩岳と先生とが諒解を遂げやうとしても、陰に陽に離間中傷するので、纏る問題が纏まらぬことになる。のみならず、お墨には、兎角、お房が邪魔になり、爲ること爲すこと、氣に入らぬことばかりである。故に格太郎との間の、蜜

の如き戀も可哀想に、日向に出ることができなかつた。二人が晴れて夫婦になるのは何時のことかと思つてゐる間に、早やお房の腹には、格太郎の種が宿つて、今は早や袖でも隠されぬやうになり、日増に人目につくやうになつた。それでもまだ妙な意地を張つて、一人娘をやることは出来ぬ、大事な倅を地家には出さぬと、ゴタ／＼してゐる間に、お房は易々と生み落したのは玉のやうな男の子！

當時格太郎は、傳法院境内にありて、日蔭ながらも、お房と赤ん坊と三人、毎晩、川の子なりに臥て、兎も角も夫婦暮しを續けて行つたのであるが、まだ若い母のお房の不注意から、或る晩、添寝の折、乳房で墮息せしめて、あはれ暗へと葬つて終つた。

父草雲は、足利が誠心隊のために、毎日勤王に働いてをるに引替へ、倅格太郎は、佐幕黨として江戸に働いてゐる。佐幕黨の形勢はいよく窮迫して、彰義隊の組織となり、格太郎は、毎日忙がして奔走してゐた。

二十一 格太郎の切腹と親子の感應

勤王佐幕の兩黨は、勢ひ遂に相戦ふこととなつた。その大團圓が上野の戦備忙しき折から、上野は東叡山に立て籠つた彰義隊の面々は、徳川三百年の恩顧に報ゆるはこの時と忠義一途に命を惜まぬ武士ばかり、精銳最新の武器を持つた官軍の一擧に、戦ふ暇もあらばこそ、戊辰の五月五日、蚤朝から攻めかけたのが、僅か 時間の後には、憐れや彰義隊は實に悲惨な敗北を遂げて、徳川の豪華を誇つた寛永寺の大伽藍も、大砲一發、忽ちにして灰燼に歸して終つた。勿體なくも、寛永寺の法主北白川宮能久親王殿下を初めとし、勇士の面々、散り／＼バラ／＼に落ち延びた。

格太郎等の同志、七人組なる落武者は、官軍の目を忍びつつ、暫し世の静まりる待たむとて、母菊女の菩提寺なる今戸稱福寺の本堂の床下に、赤毛布を敷いてこれに潜伏した。

これは同塾の士で、松浦武四郎を筆頭に、精綺水で名を成した岸田吟香、栗田萬次郎、京都で南畫壇の泰斗となつた富岡鐵齋、林和一、渡邊洪基、

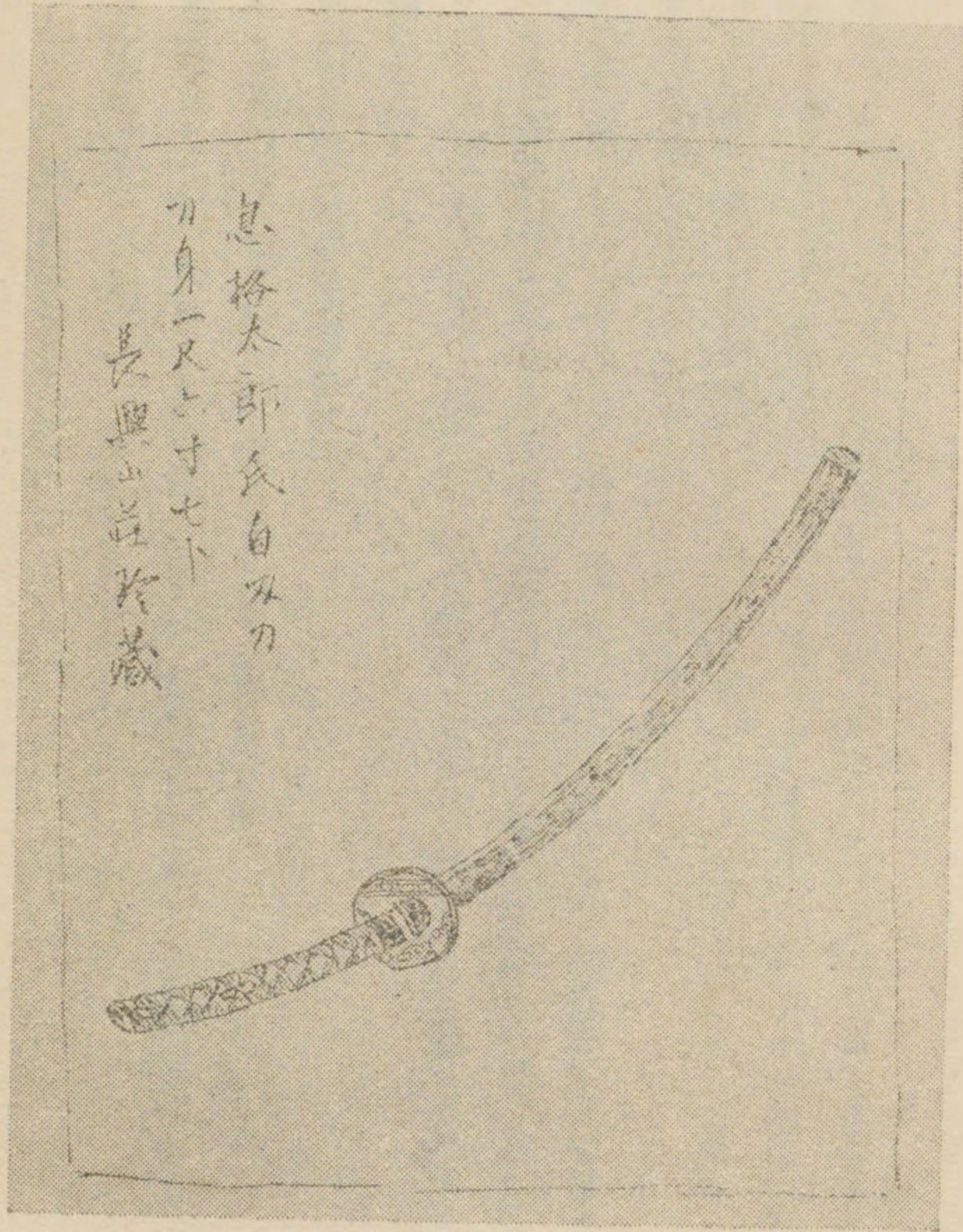
と當の格太郎の七人である。

勝てば官軍、敗れば賊、薩長の官軍は勝ち、幕府は賊軍として葬られた。勤王黨の父と佐幕黨の倅と、父は勝ち子は敗けたと云ふ面白い現象となつた。殊に一酷なる草雲先生自ら又は交へなかつたが、敵となり味方となつた。加ふるに恐ろしい朝敵の汚名。その朝敵を倅に持つたとしては、實に憤滿に堪へられなかつた。格太郎としても、父の氣性を能く知つてゐる、到底、詫が契はぬと明らめてゐた。父ありながら、親子と名乗ることすら出来ぬハメとなつた。加ふるに最愛の妻お房とは、晴れて夫婦の許も得られぬこの上に、我等が愛の結晶なる赤ん坊は、妻の不注意のために殺して終つた、思へば慄れなる我が身なる哉と、慨かざるを得なかつた。

上野の戦争から約半歳も経つてからだ、格太郎からの廻章に依り、根岸御行の松の「笹の雪」(豆腐料理)へ會合した面々は、稱福寺に潜伏した六人の落武者同志であつた。

一同の席定るや、格太郎より一應の挨拶があつた。曰く、

「この度、不思議な因縁に依り、去る人に伴はれて、我等夫婦二人は、俄に遠い佛國へ洋



行することになつた。ついでには海外萬里への旅であるから、途中に於て不測の災害に逢はむも圖り難し、殊に無事にしても、何年後に果して歸朝するか、その時にこの同志七人が、果して何れも無事で再び逢へるかどうか、これも亦心元ないことである。依て生別即ち死別の心持ちで、今夕お招きした次第である。」

との言葉を聽いて、一同はあつと驚いた。が、佛國へと洋行、その遠大なる志望を羨む者や、その前途を祝福する者、その成功を祈る者など、大分賑かに話し合ひ、酒も大分廻つて、何れも好い景氣になつた頃、格太郎夫婦は、云ひ合せたやうに上着を脱ぎ捨てて、
「熱い〜」

と云ひ出した。吟香は不審に思ひ、

「我々は寧ろ寒い位なのに、どうしてそんなに熱ひのか」
と云ひつつ見ると、斯はそも何事ぞ、夫婦は、散蓮花の模様、南無阿彌陀佛と染抜いた揃ひの衣裳を着てゐるので、一層異様に感じつつ、
「何故、この様な衣裳を着てゐるか」

と問へば、格太郎夫婦は少しも、去り氣なく、

「實は最前も申上げた通り、海外萬里の波濤を蹴破るので、生別れの覺悟で作つた、敢て他意あるに非ず、各々方には決して御疑ひ御無用」

と、呵々と笑つて云ひのけた。且つ格太郎は一通の封書を、吟香に渡し、

「これは彰義隊再舉の密書であるが、君は不日、蘭人へボンと同行にて上海へ渡航する由なれば、船、内地を離れたる頃を見計ひ、人目を避けて熟讀されまし」との言葉で、そのまま懐中した。

それから暫らく經つて後、へボン氏と共に上海へ渡船の時、開封して見ると、彰義隊の再舉とは眞赤な嘘、實は自分等夫婦が自殺覺悟の顛末書であつたのには、

「これは！」

とばかりに驚いたが、その時は已に遅かつた。

これが最渡の別れとは、神ならぬ身の知る由もなし、愉快に大に飲み且つ大に談じて、その夜遅く各々我家へ歸つた。

一方、草雲先生は、維新の大業も成り、勤王の志も遂げたので、そのまま藩の邸内に居を卜し、折しも君公の命に依り、急ぎの畫を二階の畫室で一生懸命に描いてゐた。その日は丁度、雨天で、同藩の湯澤謙吉、安田治太夫の兩士が、話しに來てゐるが、午刻になつたので、中食のために二人は一時辭去し、藩の正門なる雪輪小路の門より出で、辻使所で二人が使用を達してゐる所へ、赤合羽に身を纏つた江戸飛脚らしい男が、二人を見るや否や「この御屋敷内に、田崎草雲と云ふ畫工の御住居は」と問ふので、安田は、

「正門を潜り、右へ従ひて一番東外れの二階家である」

と教へてやると、

「有難ふ」

とすたこそ急いで行つた。それを見送つて後、湯澤氏を顧み、

「今のはどうやら江戸飛脚らしい、果して江戸よりの飛脚とすれば格太郎氏よりの急用に違ひない、或は格太郎氏の身邊に、異變が生じたのでないか、とも角早く中食を認めて

再び田崎家を訪ふべし」
と、案つつ家へ戻つた。

湯澤、安田の兩人を送り出した草雲先生は、猶ほ畫筆を續けてをらると、南の窓の障子越に、屋外から雞卵の殻のやうなものが、音もなくフワ／＼と飛んで来て、今現に使用しつゝある筆洗の中へ、ストーンと落ちた。あつと思ふへる間に、異様に白煙が立揚つたかと思ふと、スーと消へて終つた。而も蒙々たるその白煙の中に、青醒めた倅格太郎の切腹姿が、あり／＼と見へた。はてナと思ふ刹那、玄關に、

「尋まう！」

の聲「ドレ」と云つて、階段を降りると江戸で見知りの植木屋松藏が、赤合羽の飛脚姿で立つてをる先生は驚いて、

「オ、松藏！ お前が今飛脚として来たからは、倅格太郎が切腹したであらう」と圖星を指されて、

「へい」

と云つたきり、餘りの不審に、後の句が出なかつたが、漸く

「先生、どうして夫れか知れました?！」

と云へば先生は、今感應の一分四什を物語られる。松藏も餘りの不思議に驚きつつ、請せらるるままに二階に登つて、江戸から持つて来た手紙を渡す、先生はそれを受取られたが紛ふ方なき息格太郎の筆跡、それには、不在中、親に對する不幸の詫、先立つ罪は幾重にも許し給へと、それより更に、今度自殺するについての始末など、細文に書いた父への遺書である。それを讀んで居る所へ、安田、湯澤の兩人が再びやつて来て、委細の話を聞き「斯くなる上は、最早や敵も味方もなければ、不孝の罪も消へた譯、親子の情として許されて、一刻も早く江戸に出立して、死體の引取させねばなるまじ」

と云へば、先生は、首を横に掉つて、

「否々、自殺して不孝を詫びたからとて、朝敵の汚名は雪ぎ難し、朝敵の死骸を引取ることは、世間の手前、武門の面目にも拘る大事、寧ろ一人たりとも賊を斃したるは天下の爲に慶賀のするところ、宜敷大杯を舉ぐべきである、殊に今更、自分が江戸へ行つたか

らとて、格太郎が蘇生する譯でもない、別して明日、描き上げねばならぬ君命の大切な
畫、これを捨ててまず江戸へ行く要はない。決して御構ひ下さるな」
と、又もや筆を執つて描き續けた。先生の心事萬斛の暗涙滂沱たり聞くもの數行の涙を禁
しらないのである。

格太郎の最期は、草雲先生の子として耻かしかぬ程、實に立派なもので、所は傳法院の
境内の家で、長刀を以て、腹眞一文字に美事に搔き切り、そのまま前へ伏倒れたので、刀
の切尖が背中へ突き出てゐた。これと列んでお房は、短刀で乳房を抉り、兩膝を細紐で堅
くク、つて、座の崩れぬやうにして、矢張りこれも前へ倒れたので、短刀の切尖が、背に
突き出てゐた。あたりは鮮血淋漓として、二人は朱に染んで、物の美事に自殺した。そ
の時、壁間に掛けてあつた軸は、迸つた血潮に染んで、悽慘の情に堪へなかつた。

その軸こそ、親子三人の合作になるもので、田崎家として唯一の大切なものであつた。
それは室菊女が、長ひ病氣の揚句、いよく危篤と知つた時、衰へた手に筆を持つて、
水盞の跡も麗はしく、

追わけの後世は佛に任せけり。

と辭世の句を半紙に認めたので、草雲先生が、阿彌陀様の像を描かれた。菊女はそれを眺
めながら、微妙なるこの御姿にうれしく、靜に覺えず合掌しつつ、息引取つたのである。
これを親の形見と喜んで、格太郎は表装して珍重してゐた。これを床に掛けて、この前で
美事に切腹した。つまり兩親の前で切腹するので、格太郎は如何ばかり満足であつたか知
れぬ。その上へ、格太郎が漢文で、母の生家松井家と田崎家との關係、及び自分の自殺の
止むなき理由などを、立派に書いたものであつた。

この悲壯なる記念品は、菊女の妹、格太郎には唯一人の叔母金女の家保存されてゐた
が、匆々夢の如く五十年の後、去る大正十二年九月一日の恐ろしき大震災の折、金女の養
子一家が難を避けるため、山谷の居所から吉原堤を越えて上野へ向ふ途中、混々雑々の中
に、何處へやら落して終つたと云ふは、返すくも残念なことであつた。

これは實に眞面目に聽かなければならぬ話で、僕は先生から幾度か聞いた。雲犀が明月
を見て居ると、不思議やこの角に、月の光が映つて、角に紋様が出来ると云ふ。感應道交

である。これを一概に迷信と排斥することは出来ぬ。先生と格太郎、親と子、その真心が相通するのである。こんなことは、近頃の心理學などでもいろいろと説明するやうだ。理外の理あることを知らねばならぬ。ここに宗教の第一歩がある。

格太郎夫婦が自害に用ひた刀は、何れも無銘で、どちらかと云へは鈍刀の方である。格太郎氏の使つたのは、刃渡り一尺七寸で、妻の使つたのは白鞘の九寸五分の短刀である。これはその後池田の家に傳へてゐるが、昨年、記念のため僕は譲り受けた。

二十二 お房の改葬と千葉ヶ嶽の復讐

格太郎夫婦の最期は、悲惨にも亦壯烈であつた。二人が死まで共にするに於いては、全く異體同心で、これこそ、生きては連理の技となり、死しては比翼の塚とならんものであつた。

二人はこれほどまでの熱烈な戀があつたにも拘らず、その親達は、死後までもまだ冷酷であつた。一醜な草雲先生は、この死骸さへ取片付に來られぬ。止むなく、母の生家たる

松井家で引取つて、この菩提寺たる今戸の稱福寺に葬つた。上野戦争没落後、潜伏した思ひ出深いこの寺に葬らるゝことは、格太郎としては寧ろ満足であつたらう。然るにお房の死骸は、一しよに葬ることを許さずして、中山家で引取り、淺草阿部川町の雄念寺に葬られた。心は互に相添れた中でも、生きては晴れて夫婦となれざるのみならず、死しても同じ寺にさへ葬られること出来ず、遠く離れて別々に淋しく葬られるとは、さてもく意地悪い因果であり、不運な戀である。

それから世も治まつて明治の御代となり、草雲先生は足利に閑棲して、畫名を天下に走せてゐられる。一方、中山家は、主人嵩岳も死し、例の妾お墨は、主家が斷絶したので年老いて奉公する身となり、淺草諏訪町の小間物屋へ女中として住込み、永年、主人大切に勤めたので、多少の貯へも出来たが、若き頃に身を持崩した亂行の報いで、心の鬼の攻苦に逢ひ、夜な／＼夢にお房の幽霊が現はれ、格太郎さんと合葬してくれと、せがむので、安々と眠ることが出来ぬから、

「費用は一切、妾が負擔するから、どうか阿部川町の雄念寺にあるお房の骨を掘り出して

今戸の稱福寺なる格太郎の墓へ同葬してくれと、三四度ならず、今戸に住んでゐる格太郎の叔母金女を訪れて、泣くが如く、訴ふるが如く、頼んで来たが、何しろ、以前の行爲が行爲で、金女も程能くあしらつてゐたが、餘り度重ねての頼みであり、又一面には、甥と嫁との合葬のことであるから、女同士の情も合つて、遂に金女もその氣になり、足利に義兄の草雲先生を訪ひ、具さに事情を訴へた、當時、先生は己に七十五歳の高齢で、よほど信心氣も起きて来たので、快く承知してくれたので、早速歸京して、願ひの通り合葬してやつた。

それからは、お房の幽霊も出ず、お墨も初めて安々眠れると大へん喜んだ。咀はれた二人死して三十年後に、初めて思ひが達して一しよに眠ることが出来た。思へば實に憐れな次第で、死んでから初めて手を取り合つて新婚旅行が出来、楽しく三途の川を渡つたことであらう。

こゝに面白い挿話がある。それはお墨が見立替をした例の色男千葉嶽のことから、土地の顔役又五郎、及び甲子屋清兵衛と草雲先生との間に、血の雨降らせた珍事件が出来たこ

とである。

又五郎は、兒分の三千もある髮結ひの大親分、甲子屋清兵衛は、旅館兼料理屋の主人で土地での顔役、而も二人兄弟である。所が江戸角力が珍らしくも兩關揃つて来たので、二人の兄弟分が興行主となり、足利の町で晴天三日間の興行をすることになつたのであるが土地の仕来りで、興行場には、藩のために別席を設ける習慣で、無論、こゝでも設けられた。初日早々、草雲先生は招かれて、同藩の者三四人と共に、設けの別席へ座を占めた。

天に日が出ないでも、先生の常に酒氣を帯びないことはないといはれるほどの上戸黨であるから、殊に場所柄とて、最初からほろ酔ひ機嫌であつた。それとは知らず、又五郎、清兵衛の兄弟分は、殊の外千葉嶽最負であつて、この一番に對し、大分の金を張つて賭博が行はれる手筈となつてゐた。當日は客も満員大入で大景氣であつた。番數も大分進んでいよく、大關の番となり、片や千葉ヶ嶽、片や某と呼び出しの聲も勇ましく、満場湧くが如き喝采である。兩大關の仕切りも濟み、阿伝の息も合つて、やつと組んだ時は、恰も龍虎の如く、吐く息と吐く息とは烈火の如き勢であつた。この時、あちらからも此方からも

「千葉！ チーバーツ」

の掛け聲で、恐ろしい最負の聲援であつた。

今までそんなことに氣付かざりし草雲先生も、何だか聞いたことのあるやうな名だがと朦朧たる醉眼を、ぱつちり開いて熟視すれば、覺えがあるも最も千萬、その千葉ヶ嶽こそ江戸での戀敵の相撲力士、お墨の情夫千葉ヶ嶽であつた。餘りの奇遇に、えッ！と驚かざるを得なかつた。併し思へばこの男のためにこそ毒まで嘸まされた憎つき奴！と、瞋恚の焰がムラ／＼と捲き上つて、一旦、忘れてゐた戀の焰が、胸をも焦がさむばかりに燃え上つて來たから堪らない。何條、ぢつとして居れようや。忽ち破打鐘のやうな大聲に、土俵も破れよとばかりに、ムカ／＼と怒つた勢ひに

「まをとこッ千葉ヶ嶽！ しつかり取れ、土を嘗めると、お墨が泣くぞッ」

と怒鳴つた。これを聞いた土俵の千葉、折角、滿身に力の入つた時に、思ひかけなくも、「まをとこ」の一聲に、がっかり力も抜けた。ぢつと怒りの一聲に眼を張つて、憎くさうにその聲の方を見てあれば、こはそも何事ぞ、この土地で最も大切な藩邸の席、お歴々の

容！ 見上ぐれば、それは確に覺えのあるお墨の戀敵である。えッいま／＼しいと思ふより先に敵はウンと力を入れて投げを打つた、恐ろしい地響を鳴らして千葉ヶ嶽は土俵の土に圍められた。

滿場總立ちとなつた騒いだが、それよりも大騒ぎなのは又五郎兄弟の大損である。搦て加へて最負の千葉ヶ嶽が、一聲の怒號のために敗れたかと思へば、その一聲が憎くてならぬ。二人は烈火の如く憤り、己れ憎つき棧敷の奴めと、長脇差を片手に、棧敷目かけて飛び込んで來た。斯くこそあれと窃に待構へてゐた先生、何條それ等の輩に敗けらるべき勤王運動にまだ勃然たる勇氣を貯へた腕早くも三尺の秋水引き抜き、えッ！とばかりに、飛込んで來た又五郎の眞向へ振り卸した。あつと片手で眉間を抑へた又五郎、早くも機先を制せられて怒氣に弛み、そのまゝ、楷子を降りて行つたが、額には生々しい刀瘡、「このままに黙つてゐては、親分の顔が立たぬ」と大騒ぎになつた。

この騒ぎに、角力はこのまま打出しになつたが、さて後はドウなるか、血の雨を降らさ

ないでは納まるまいとの大評判。又五郎兄弟は直ぐ様、急使を四方に馳せて兒分を集め、夜に入るを待つて仕返しをする」と云ふ噂で、町中が物情騒然としてゐる。

然るに草雲先生は、一向平氣で、頓智即才の妙計を以て、無雜作に彼等の集團を追ひ散らすと云ふ企てだから、決して驚きもせず騒ぎもしない。それは藩の武器藏から高張提燈や陣幕を借り出し、これを切通しの山上に備へ、藩主出陣の様子に見せかけんとしたのであるが、彼等の物見は、案の状、この計略に掛つて、それと親分に知らせた。

「それは容易ならぬことである。藩主出陣となれば、容易ならぬ喧嘩となり、下手なことをすると、散々な目に遇つた揚句、永年住み馴し土地を賣り、食ふにも困るやうになるかも知れぬ、一層のこと、今の中に思ひ止つた方が好からう」

と残念そうに手を引いた。ために、幸ひに大事に至らずして納つた。畢竟。先生の奇略に引掛つたわけである。漢楚軍談などにあるやうな戦の計略を、先生が頓智で應用せられた妙策であつた。以て戦略家としての先生を見るべく、誠心隊のために働かれた志士の面目が偲ばれるのである。

これが双方の幸福であつたが、その後、又五郎清兵衛の兩人とは、互に諒解が出来て、一層親密になり、義兄弟の約を結び、先生が八十近くまで交りを續けてゐられたのであつた。

二十三 脱俗の行爲

先生がまだ大小を帶んで居られた頃、或る日、君公の前へ出られたが、相變らずの酒機嫌、調子に乗つて、御前をも憚らず、悪口雑言の大放題、

「他藩には御家老があるが、御當家のはヨカラウで御座る。他藩で御馬廻と申す役目が、御當家ではラン姿廻りと申す。他藩には、御目附役があるに、御當家では御目附けずで御座る。御佑筆と申すは他藩のことで、御當家は御無筆で御座る」

と、縦板に水の雄辯で、滔々と悪評を言ひ立てたので、流石の君公も堪へ兼ね、「まだ有るか」

との御言葉であれば、好いことに調子づいて、

「御座りますともく、七不思議と申すからには、まだこの外に、三つ不思議が残つてをります」

と、云ひも終らぬうち、君公も殊の外御立腹になり、烈火の如く怒られて、忽ち

「謹慎」を仰付けられ、御親族筋なる上州館林藩へ、御預けと云ふことになり、館林へ護送された。

所が、何處にも變り者はある者で、この館林藩にも、木呂子退造と呼ぶ、草雲先生と負けず劣らずの奇行家があつて、何かの失策で、これも亦、同邸内で謹慎中であつたが、藩でも厄介だから、二人を同じ座敷に入れた。喜んだのは二人で、同氣相求め、同類相應するの御多分通り、意氣自ら相投じて忽ち至極仲好しとなり、二人が申合せて、一つ藩の奴等を驚かしてやらうと、當時ハイカラの厚い雪駄履で、袴の股立を取り、藩の定紋附の提燈に火を點けて、眞晝中、御殿の長廊下を、二人で土足のまま、ガタンガタンと、往きつ戻りつしてゐた所が、勿ち重役の目に止まり、大聲に叱責せられ、

「御兩所は何事で御座る、白晝、提燈を點けて、土足で廊下を御歩きなさるとは」

と、咎められると、二人は平身低頭するかと思ひの外、何の遠慮もあらばこそ、待つてゐましたとばかりに、口を揃へて、

「誠に藩の御政事が暗くて、白晝でも提燈を點けねば、足下が危ないため御座る」と、少しも忌憚なく云ひ切つた。

謹慎中で、而も他藩へお預けの身で此の始末、そんなのが好い相棒を見つけたので、いよいよ仕方がない。館林藩でもほとほと手に餘し、幾程もなく、足利へ送り歸して來た。

この木呂子と云ふ男は、年老つてから、身に餘る大の杖をつき、一本齒の高足駄を履き胸まで垂るて長い白髻を撫きながら、話の相手と呼ぶに、

「貴様々々」と云つて、初めての人を驚かせた。晩年には、能く白石山房へ來て、書生達を驚かせたものである。

磊落、率直、無遠慮にして、竹を割つたやうな氣性は、實に草雲先生で、そんな逸話はそれは澤山ある。

足利に「桂月」と云ふ料理屋があつた。或る時先生が、二三の同輩と一夕の歡を盡して

會食してをられると、何か詮議の件があつて、土地のおかつ引が隣座敷へ来て、その室に飲んでるた客と、大聲で何か論争し初めたが、話がなかなか片附かぬ、聲は益々高くなりて来る。

遠慮や氣兼ねの嫌ひな草雲先生、忽ち怒り出して、

「何だ！ 五月蠅い、静にしろッ」

と怒鳴つた。が、おかつ引も黙つてはゐない、それがウンと癢に觸つた、かと思ふと、役目を笠に着た彼等は、勿ち先生を捕縛して終つた。先生も仕方がない、明らめられたと見え引立てらるるままに屋外へ出るや、大地に仰向様に倒れ、大聲に、

「天下の草雲を、繩で縛つたぞ」

續けざまに叫んで、大に彼等を手古摺らせた。

又或る時、何か藩に對する鬱憤を晴らすため、藩の正門外なる雪輪小路の物見櫓に馳け登り、時ならぬに、鐘を亂打しつゝ、大聲に、

「御殿が火事だ……」

と叫び立てた、

「火事！」

と云ふので、人々が馳けつけたが、御殿どころか何處にも火が揚ない。それと知つた人々は、草雲先生の餘りの仕打に、覺えず、手に汗を握らされた。

氣拔と云へば氣拔、氣狂ひと云へば氣狂ひ、常規を以て律することの出来ぬ偉人の風貌を偲ぶことが出来る。ここに脱俗の行爲がある。

木呂子退造先生に就て思出深き話がある。木呂子先生は草雲先生と共に悲歌慷慨の士で、長鎗大馬各所に轉戦號令叱咤の一人であつた。維新後は板垣翁と共に自由黨を組織し政治家としての大先輩である。予が郷里館林から、白石山房へ通學をしてゐた當時の事であつたが、或日のこと銀よりも白ろき臙髻を朝風に梳り左手には頭上二尺も餘る天然木の杖を持ち、右手には鐵扇を翳し、揚々として予が家を訪れた。「例の貴様と云ふ調子」予の在否を訊て居るやうだから速かに迎に出ると

「貴様足利の草雲のところへいつ行くか」

と問はれたから

「明日御伺したいと思つて居ります」

と答へると

「調度幸ひわしも少し用事があるから、夫れでは明日一緒に行かうではないか」
勿論土地の先輩であるから異議なく同意を表し

「お供をいたしましょう」

と云ふと

「夫なら明早朝吾輩の宅まで誘に來て呉れ」

約束が忽ち成立したから翌早朝誘に行と、はや先生萬事支度が済んで待て居られた様子、フト傍を見ると、昔の「トンビ」の古切れで作た風呂敷を、女中の使ひ古した褪色の紅紫の縫ひ合した襷を紐に代用したので縛てある包がある

「これを貴様脊負て行てくれ」

素より長者に一枝を折るの意味にて敢て拒まず擔き出す。

曉風袂を拂て路上露華濃やるに、夏の早起ほど氣持の良きものなく、左に秩父山脈を見て右に日光連峯前に赤城の晴霽後は筑波の突元館林より白石山房は四里、怪老人のお供をして歩み行く姿は、まるで南畫山水中の點景人物奚僕其ままであつた。
行くゆく

「今日白石山房に御出掛になる御用は何事なのでしょ」

と問ふと言下に

「楠神社のことで、草雲に畫を描いて貰ふつもりで行くのだ」

この楠神社は城沼の東端に在つて瓦の模様嵌柱等まで、盡く菊水の彫刻、社頭に樹てられある幟までも菊水の紋で、子供の自分から種々な傳説も聞いてゐるし、屹度由緒深きものと思つて居た。木呂子先生に訊ると

「嚙昔楠正成が港川で討死した時、忠勇の臣下の二三が其の首を掻き浚ひ遙るばる此地まで來て葬むたところである。今この事蹟を正し、社寺局に申出て格式を更上して貰ふのだ。此の土地にこの神社があるのは、青年修養の爲にも仕合のことヂアー」

頗る得意げ大音聲で話してくれる、この街道は維新當時勤王佐幕の衝突で、屢々交戦のあつた所當時の有様を聞くと喜んで指點して話をする。彼れ是れするうちに足利の町に近ずいた。

足利は一ヶ月の中の五と十の日が市で、近郷近在から機物の既製品を車馬に積んで市に賣に出るのでなか／＼賑てゐる。例の怪老人が緋の總の括り附てある七尺餘りの杖と、鐵扇といふ身装だから、行人が願望して目を睜き、低聲に連れの者などと囁やき合つて居る。喫驚するのも無理がない、餘りに現代離がしてゐるから

白石山房の門の柱には「今日不在」と書た掛け札が出てゐる。正直の人は今日は先生が留守かと踵を倒にする人もある。更に其翌日來ると依然として其の札が掛てある。又其翌日も同じで大に落膽して返る人がある夫は先生常套の手段で、二六時中掛け放しであるのだから驚かない譯にはゆかぬ。其杜門を籬落の隙より手を入れて何なく押開て通る、何時も咎められたことはない。玄關に立て來意を告げると、早速通るやうにとの事であつた。

其時草雲先生持病の痔を患て少し弱り氣味に居られた。戦友が杳るばる來たから元氣を

出されて、木呂子老人も満足の體であつた。

「草雲貴様は何處が悪いのだ」と云ふと先生が

「例の痔と時候の爲か肩が張て困る」老人が

「痔には無花果の葉を火で炙て患部を温めれば、直に癒る、僕の親は痔が持病で、起ると

いつもその方法で鎮めてゐた」「ウンそうかと」

無頓着の返事をする。

「僕の母は常に肩張して、少壯の時分能く揉まされたから、肩では經驗があるから、僕が一寸療治をしてやるから、草雲暫時後を向け」

先生が辭退するのも聞ずゴシゴシ片肌脱で始める主人の先生も素より美髯の持主客も亦た髭髯三尺の所有者で、綠陰深き處で、維新前後生残りたる兩人が追懷談、先生の和歌に

一度は君に捧けし命毛の残りて細き筆の寫繪

命をば君にさゝけぬかうべをはいかなるたけきものやとららん

生杖と頼みし筆の摺り切て腰の抜けたる草の雲助

碧紗を透して列仙傳中の人物が現出したやうで、恍惚境であつた事は、今尙眼の前に髣髴して居て忘れないのである。予が擔た包は秋元家より拜領したる狩野家の軸物と、中に劉松年の唐子圖等があつて、先生に鑑定を乞爲に携へたのである。

二十四 高貴への使

磊落にして洒脱なる草雲先生は、萬事に率直、簡明で、禮節に捉はれるやうなことは大嫌ひ、何事も末節に拘はるやうなことは眞平御免で、恰も虚偽、虚飾なく、活潑、淨裸なること、古禪僧の如くにして、頗る面白い所があつて、平生の行事に、古禪僧の面影を髣髴せしむる。

太田金山の御料地へ、秋になると、毎年、帝室から、畏くも 皇太后陛下、皇后陛下、或は皇太子殿下の御内、御一方は松茸狩のために、必ず御成になることになつてゐた。その節には、白石山房の庭前なる織染講習所が、御小休所と定められてあつた。猶ほ皇太后

陛下が御成の時は、皇太后太夫である子爵杉孫七郎氏が、必ず白石山房を訪問することに極まつてゐた。

或る秋、皇太后陛下が御成になつたので、白石山房では、今にも杉子爵が見へられるだらうと、出入の植木屋や小作男、書生など大掛りで大掃除をやつてゐる。池田彌源太など尻の綻びた袴を着て、草取をしてゐると、果せる哉、杉子爵が來られた。來られたかと思ふと、早や

「お歸り」

と云ふので、お茶を出す暇もない位であつた。あまりにあッ氣なく、匆々として失禮だつたので、他所にお小休所の講習所まで、御見送りをしろと、云はるるので、着物でも替へて、袴でも着けようとする、

「愚圖々々してゐては駄目だ、着物など替へなくとも、そのまま好い、早く早く」と、例の調子でせき當てるので、

「ハイ」

とそのまま飛び出した。子爵も、先生の氣性を知つて居らるので、免に角

「講習所まで送られましょ」

と受けられた、彌源太はおそろおそろ杉太夫について行く

講習所は、式の如く嚴重に御警衛申してをる。長い歩道の兩側には、鎗を持った騎兵が整列してをる。入口には警部が控へてゐる。杉太夫に従いて行つた、池田の風采が、あまりに失禮なので、或は間違つて來たのかとも思つたか、

「何だ！」

と誰呵すると、杉太夫が

「此方は草雲先生の名代で、自分を見送りのため同行されたのである」

と説明されたので、却て丁寧に一禮された、それから整列した騎兵の前を過ぎて、講習所の玄關まで行つたが、元來、この二階は最初から、貴賓の御小休所として建築されたのだから、屋外から直ぐ二階へ昇れるよう出來てゐる。而もその階段の巾が廣く取てあるので、この階段の兩側に椅子を列べて、手に檜扇、腰に緋袴の女官が一段毎に控へて居る

あまりに殿めしいので、池田はそこから歸へらしてすると、杉太夫が、

「構はず、二階まで通れ」

と云はれたが、ハツと氣が付いて、掃除着のままだ、あまりに勿體ないと躊躇してゐると

「構はぬ、早く昇れ」

と、太夫が促されたので、階段を昇りかけた。

はツと氣が付けば、先刻からの尻の綻びが、グツと大きく口を開く、一段昇る毎に、恰もバネ仕掛けの如く口を開く。それを見た女官連は、餘りの無作法に、クス／＼と笑ひ出したのみならず、餘りのをかしさに堪へずしてか、次の女官から女へと、指差しつつ教へるのが、ありありと能く見える。

今更ながら赤面せざるを得なかつた。如何に主命とは云へ、これと知つたから、袴位は着いて來るだつたにと、後悔の念が、潮の如く犇々と小さ胸に押寄せて來た。殊に池田は當年取つて漸く二十四歳の青年だ、殊に斯る貴顯淑女の前へ出たことは初めてである。

穴あらは遣入らんと思つたが、今更ら詮方もなく、つまり胸を押へて、無暗矢鱈に、太夫

の後に従い震ふ足を引摺つて昇つた。宛然、暗の路を歩つたやうた。

昇り詰めたと思ふと、はッと眼が覺めたやうだ、そこには金モール燦爛たる式部官や宮内省の高等官連が、嚴めしく控へて居る。池田はおづおづしてゐると、杉太夫が

「只今 皇太后陛下より、草雲先生へ、下され物があるから、暫らく其處に控へて居れ」と云はれたので、聊か面目を施して、其處に待つた。やがて、掛りの役員が、白木の三寶に戴せた金壹封を恭しく持つて、

「草雲への御下賜金である」

と、出されたので、自分のことの如く恐縮てゐると、復た直ぐ後へ、同じくお盆を恭しく持つて出られる、

「これは御下賜の御茶菓である」

と、もう濟んだのだらう、餘りの窮屈に堪へぬので、匆々にして去らしとすると、又外の役人が、前と同じやしにお盆を持つて來た。

「これはお使の方に、御下賜の茶菓である」

と、ことに、いよいよ恐縮せざるを得なかつた。やつとの思ひで、用がすんだので、池田は逃ぐるが如くにそこを去つたが、最早、濶歩する元氣もなく、坐つたまま後遂ざり階段にまで來て、ホッと一息して、お下賜の品々を兩脇に抱へて降段する、程の所爲で、女官連が丁寧尻の綻びをのぞき込むやうで、眼を閉つてバタバタと階段を降りた。ここに初めて捉はれの身が、戒めの繩を解かれた思ひ、飛ぶが如くに門を出て、桑畑を横切つて鐵道線路を越して、ヤツと白石山房に歸つた。

池田は、好い耻曝しが癢に觸つたので、先生に委細を復命すると共に、

「先生も餘り酷い、こんな用事をさせるとは」

と、不平を列べる、草雲先生は手を打つて笑ひ、氣の毒がるかと思ひの外、

「馬鹿な奴だ、二階まで行く奴があるか、階段口で歸つて來れば好いに……併し貴様も豪傑になつた。それで高貴の前へ出るとは」

と、讚めたり毀したりした揚句、

「どれ／＼先方を向いて見よ」

と、尻の綻びを見て又大笑ひ、その姿で階段を昇つて行く、それを女官連が見てクス／＼笑つてゐる所を寫生して、來る人毎にそれを見せて、

「どうだ、池田も偉いものぢやないか」
と、何時までも笑ひ草となつた、

二十五 愛の涙

草雲先生は、慷慨悲憤の武士であると共に、俠骨男兒であつた。故に威武も屈する能はざる氣節があつたが、正直な貧しいものに同情し、眞實な孝行者に泣くの涙があつた。この涙こそ、先生をして、戎劍を棄てて畫筆を執らしめたものである。

三十恰好の、人品の良い、背のスラリと高い男が、七十五六の切下げ髪のお母に、被布を着せ、その手を靜に引いた二人が、白石山房の玄關に現はれた。忽ちここに土下座して恭しく

「どうぞお助け下さい」

と、その立派な男が、一紙半錢の憐れを乞ふ、いぢらしさ。

聞けば、お母はその男の實母であるが、生活苦に堪へずして淋しい旅に出て、人の憐れを乞ふのである。乞うて廻つても、せち辛い世の中は、思ふに任せぬ日々の苦勞、一昨日夕飯を認めたきり、その後は一食も口にせぬ、今は飢に倒れるを待つのみである。自分は兎に角、この年老いた母に、そんな憂き目をさせるので、可哀想で、不幸の上もない。どうか、母にたけなりとも一食を恵んでくれと、懷中より取出した一枚の短冊、御家流の見事な筆跡、母なる人が詠んだ一首の和歌、それを書いたのである。見れば、

いかにして明日はくらさん今日までは

くらしかねつつくらししたれども

の三十一文字。繰返し／＼讀んでられた先生、兩眼には明らかに涙の露が宿つた。

「ああ可哀想に」

と、痛く感動せられた。

丁度、描き上つたばかりの半折の富士があつた。何處かへ遣るのであつたが、それを惜

氣もなく持出して、外に金貳圓の現金を添へて、

「少しばかりだが」と遣られた。

實に美しい同情である。この同情が凝つて富士山となつた。これこそ正に神洲第一の靈峰で、萬古の鎮護である。この時、先生の眼前には、四十年前、傳法院時代の難儀が、幻影の如く、眼前に浮んで來たであらう。

草雲先生のこの同情には、元より率直で、虚偽や、體裁や、見榮はない。何事にも、この率直と同情とが付いてゐる。白石山房に、久しく女中奉公してゐたお文と云ふ女が、外へお嫁に行つて、一年も経つと早や子供が生れた。それから又直に生れた。又生れた。都合三人目の子が生れた時、何が縁起でも擔いたのか、そのお文さんが赤ん坊を抱いて、白石山房へ土産物まで持つて、

「どうか偉い人になるやうに、名を命けて下さい」と頼みに來た。

先生は、ニコ／＼しつゝその赤ん坊を見て、

「これは良い兒だ、きつと偉い人になるぞ」

と慰めてゐられたが、忽ち

「お文、お前はこの子で何人目だ」

と、無難作に問はれたが、お文さんの方では耻かしく、眞つ赤な顔して、耻かしそうに

「ハイ三人目です」

と「小さく答へた。

「三人目?! もう三人も生んだか、どうも教育のないものは仕方がない、所才がないものだから、子供ばかりこしらへて居る」

と、呵々大笑された。が、お文さんは一層赤くなつた。

これは先生でなくては云へない言葉だ。これこそ全く同情の丸出しである。聽いて實に氣持好く、我がお祖父さんのやうに親しくなつかしくなつて來る。その憎まれ口を利く裏には、熱い涙がハラ／＼と零れてゐる。我が孫のやうに愛さるればこそ、この言葉が出る

のである。

世間のうるさい交際や、面倒な禮儀など大嫌ひの先生、どう戸惑つたのか、今日は東京舊藩主戸田子爵の玄關に立表はれた。それに先生が七十の春の一月のことである。

已に門松は除れてゐるが、年始御祝儀を君公に捧げるつもりで訪れたのである。訪はれた君公も餘りの意外に驚かれたが、折角、舊臣の賀禮と云ふので、二階座敷へ通し、主人夫妻が應待で、早速、膳部が運ばれた。その時、膳に載つたのは、先づ二合入の爛徳利と魚は鹽鮭が一切れ、而も奥方の御酌で、勿體なくも御前様から、

「何も無いが、寛いで澤山傾けてくれ」

とのお聲掛り、世が世ならば、疊三尺、後へすさり、頭を摺りつけて、

「尊顔を拜し奉り、恐悦至極に存じ奉る」

と申上ぐべき處、皮肉を一生の持前である先生、面白からずや思ひけん。お流れ頂戴と感激すべき御杯も御辭退し、膳部の鹽鮭を懷紙に包み、

「これは君公より御慈悲の御馳走、ここにて頂戴仕るより、恭しく郷里に持歸り舊藩の面

々へ聊かづつでも割愛すれば、如何ばかり有難く頂戴することで御座りませう、草雲一人お思召を擅にするは勿體ない」

と、御前を下つた。

足利へ歸つてから、その鹽鮭を細かに刻み、舊藩臣が白石山房へ見へる毎に、

「これは君公より下し置るもの品、些少ながらお裾分け致す、勿體なく感賞せられよ」と、披露に及ぶ、餘りのことに人々が驚いて問へば、

「子爵の御身分、正月の御祝儀、當り前ならば、魚は何であらふと頭附にきまつてゐるのだ、鹽鮭の一切れ、餘りに御質素に恐れ入る」

とのお話、君思の廣大を感謝するのか、格外的質素を諷刺したものか、變つた先生、人の考へとは違つてゐる。

二十六 是眞の知己

明治二十三年、七十六才にして帝室技藝員が制定された時、柴田是眞が巻繪師として、光榮ある帝室技藝員に任命された。一代の面目として世間では評判したが、獨り先生は、大へん氣の毒がり、

「同じでも畫家としてでなく、巻繪師として任命されたのは意外である。是眞の如きは立派な畫家であるに……」

と、頗る同情して残念がつてゐられた。これで誠に知己である。忽ちそこにあつた紙片を取つて

畫仲間にぬしや入らぬも是眞なし

と、上の句を認め

「十分間の猶豫をやるから、下の句をつけろ」

と、側にゐた池田に突き付けられた。

池田も、直ぐそれと分つたので、暫し推敲してゐたが、
「出來ました」

と、下の句をつけた、見れば

もとは柴田の巻繪かく人

と云ふのであつた。この上下を續けて見ると、

繪仲間にぬしや入らぬも是眞なし

もとは柴田の巻繪かく人

と、好い三十一文字となつた、先生は繰返し〜讀んで、

「これで好い〜」

と喜んでゐられたが、池田の才智を愛せられてか、

「それならも一つやらう、俺が上の句を起すから、貴様は矢張り下の句を作れ」

と、云ひつゝ、紙片に踏臺を描き、

踏臺にされしと人の笑ふとも

と書いて渡された。池田は暫らく考へてゐたが、

足らぬところを足す人となれ

と結んだ。これは更に秀逸であつたので、先生は大喝采された。

草雲先生の武膽、俠骨の半面には、この無邪氣な、茶人めいた、罪のない風流があつた。こんな所を見ると、先生は實に洒落の人であつた。

或る時、庭から美しく咲いた野菊を折つて来て、活花に挿された。挿し終つてから、

怪童が道草につむ野菊かな

と、珍らしくも十七字の俳句を詠み、早速、すらくと短冊に書いて、この枝に下げられた。實に自由な、自然な、捉はれぬ俳人であつた。

或は歌を詠み、詩を吟じ、又は俳句を作られ、こゝに先生の詩人としての半面を見るこゝとが出来る。

是真と先生とは、共に今戸の稱福寺の擅家であつたので、稱福寺には、是真と先生の描いたものが澤山あつた。殊に是真の手に成つた高巻繪の重箱や、その他の器物が随分有つ

たが、廢寺となつたので、皆人手に渡つて散逸したことは、返すくも惜しいことである。

狸々曉齋や大蘇芳年についてこんな批評をして居られた。

曉齋の畫風は、俳優で云つたなら五代目菊五郎のやうなもので、氣品は乏しいが藝は遠者過ぎるほど達者である。併し氣品に乏しいと云ふことは、曉齋のためには至極損だ。畫は巧者でありながら、死後の曉齋畫は餘り世上に珍重されまい氣の毒のことだ。

村瀬玉田は、極めて温厚且つ謙遜の畫家であつた。一頃は玉田が、東京から度々白石山房へ來たが、何時も歸つたあとで、玉田を評しては、餘り謙遜過ぎて氣力が缺けて居る。

人間も長生の出來ぬらしい面影が見え、又その謙遜過ぎるのが、東京の大舞臺に立て行くには、大分の損がある、これも天性だから止むを得ぬと云つてをられた。

二十七 露根蘭の詩

草雲先生は、南畫家としての一大資格たる詩文にも、相當の蘊蓄があつた。殊に詩に於ては、傳法院時代に、日本の杜甫と稱せらるゝ梁川星巖と最も親密に往來せられたので、

熱心な先生は、こゝでも深く研究せられた。星巖の眞摯な態度に依つて教授されて、詩の容易に至り難きを悟らるゝや否や、下らぬものを作つて後生に醜を残すに堪へぬと、それから断然、詩を作ることを止められた。即ちその力を、畫の一途に注がなため、實に斯道に熱心なる驚くべきである。この熱心が遂に成就したのである。

それだから、先生の詩は餘り澤山になし、從て自ら得意とされたものも亦餘り無いやうである。一つ露根蘭の詩には、最も得意なのがあつて、能く書かれた。曰く、

住在巖頭生不堪。雪霜風靄自相甘。斯心必竟有誰解。知己千年鄭所南。
の一詩がある。

先生は、千年の知己として鄭所南を愛せられたのである。以て先生が如何に忠誠、高潔の人であつたかは、想像に餘りある。この一を以て見ても、如何に氣品が高尙で、識見が卓犖であつたか、知れる。それと共に想ひ出すのは渡邊華山である。

華山も亦好んで露根蘭を描いた。そうしてこの題詩が立派なもので、正に草雲先生と共に南畫壇の双璧にすべきものであらう。特に好で鄭板橋の詩を題す。曰く、

鄭老畫蘭不畫土。有爲者必有不爲。醉來描竹似蘆葉。不作鷗波無節枝。

と云ふのである。華山も亦た忠誠無二の人であるから、鄭所南を愛し、その理想とする露根蘭を能く書いた、自ら日本の鄭所南を以て擬したのである。これに向て華山と草雲先生との氣慨を想ふことが出来る。

これ等の偉人が私淑せらるゝ、鄭所南は、支那宋末の忠臣で、宋は元のために遂に滅ぼされたが、所南は、義を以て毅然として二君に仕へず、畫が好きで蘭を描いたが、元の土を食ふに忍びずとて、露根蘭を描いた。この頃に名を改めて所南としたが、復た他姓に北面せずとの意である。又、一名を思肖と云ふが、肖は趙の略字で、宋は趙氏であるから、宋を忘れぬとの意である。

華山先生が自刃の時、罪人は石碑が立てられぬからとて、「不忠不孝渡邊登之墓」の九字を書いて残された。實に壯烈、鬼神を感じしむるものがあるが、これも實に鄭所南に倣はれたのである。所南は義を以て一生元に仕へなかつたが、友人趙子昂が元に仕へたのを怒り遂に絶交した。所南は七十八歳で死んだが、病革つた時、その友唐東嶼に依囑して曰く、

「我輩が死んだ後には、位牌に大宋不忠不孝鄭思肖と書いてくれ」

と、如何に忠烈悲愴であるか。自らその像に賛して曰く

「不忠可誅。不孝可斬。可懸此頭於洪々荒々之表、以爲不忠不孝之榜標」

と、以て如何に至忠至孝の烈士であつたか、實に欽仰に餘りあるものである。華山は實にこれに私淑せられたので、殊に我が日本として一段の光彩を放つて居る。

この所南の壯烈に比して、同じ友人なる趙子昂は、全く雲泥の相違で、節を二三にして男兒として最も愧づべきである。これを教へて不作鷓波無節枝と云はれたので、鷓波とは子昂の號である。

この歴史を知ると、華山がこの露根蘭の題詩の意義が初めて分り、以て華山が高邁壯烈の精神を知ることが出来る。こゝに初めて我が草雲先生と、時は五十年を隔て、處は田原と足利と百里を隔てゝゐても、自ら一脈の精神の相通する所あつて、誠に隔世の知己であつた。その詩の文字は相違つてゐても、その人の心は正に同じでこれこそ同工異曲と稱すべきであらう。

華山の子小華も、亦能くこの精神を解し、父の志を繼いで露根蘭を描いたが、題詩に面白いのがある、曰く

露根寫得寄薇沈。筆々誰知感慨深。千古高風同一操。畫蘭心即探薇心。

と云ふのである。鄭所が畫蘭の心は、正に伯夷叙齊が探薇の心と同じであると云ふ。全くそうである。

斯く觀じ來ると、一片の露根蘭が、國民思想上の教訓である。考へ來れば、畫は決して道樂や慰みの餘技ではないことは勿論、作家自身の萬斛の抱負が畫中に含蓄され、觀る者をして、反射感應して、愈々高尚雅純之境致に導くの一夫至寶で六藝と功を争ふ者なるを思ばざるを得ないのである。

二十八 逸話の教科書

慥か明治二十二年頃であつたらう、まだ元老院のあつた時で、時の元老院議官神田孝平氏が白石山房へ來られ、

「豫てお頼みして置いた、梅に頬白の花鳥圖は、最早、出来てゐるでしようと思つて、貰ひに来た」

と云はれて、草雲先生は愕然として驚き、

「そんなお頼みを受けてをりましたか！」

と、全く忘れて居られた。

神田氏も餘りのことに聊か驚いたが、指折り數へつゝ、

「先生、丁度十三年目ですよ」

と云つたので、

「そうだったか」

と草雲先生も誠に氣の毒がられて、早速描いてやられた。

感興に乗じて事を執らるゝ先生は、潤華料のことなど元より忘れて終はれる。畫に對して捉はるゝことなし實に自由であつた。そんなことは能くある。

太正天皇の立太子式に献上するために、九鬼隆一男はお目出度い双鶴の圖を依頼したが、

先生に何時の間にか時期を忘れて終はれた。偶ま福羽美靜氏が來られて、いよ／＼來年度が立太子式だが、出来たかとの催促を受けて、びつくりされたが、この時已に依頼を受けてから五年目であつたが、更に手が着けてなかつた。それから俄に凝想且つ丹誠を籠めて描かれたので、見事に出来上つて、漸く式に間に合つた。

この献納の畫は、先生が一代の光榮でもあるので、非常に苦辛して着想せられ、且つ齋戒沐浴して謹んで描かれた。出来上つたのは雙鶴圖で、自分でも近年の傑作であると喜んで、早速九鬼男方へ届けられた。

それから稍二ヶ月も経てから、縣廳の手を経てその畫が返戻せられた。何事であるかと驚き且つ怪しみつゝ、荷造を解くと、「再考」の朱札が附いてゐる。「再考」とは何事ぞと思ひ煩ひつゝも、先生は二階の畫室へ持ち込み、例の池田を呼び寄せて、

「足下はなか／＼物の落を拾ふことが上手だが、これを「再考」せよと云ふが、俺には解らぬが、「負ふた子供に淺瀬の相談」と云ふことがあるから、今、足下に相談するのであるがこの畫の何處に缺點があるか、今日は決して遠慮は入らぬ、思ふ存分、アラを探してくれ」

と、平素から勝氣の先生が、おとなしくも殊勝な言葉であつた。

なか／＼立派な作で、筆法嚴正賦色秀潤流石は先生が苦辛の作だけあつて、一點、批難の打ちやうがないと思つた。が、アラ探せとの仰せで、アラあれかすと、ぢつと見てあつたが、忽ちハタと膝を打つて、覺えず、

「これですよ」

と云つた。と云ふのは、鶴が片足を揚げ、首を一巻してゐながら、目が正しく開かれてあつた。全體鳥類は鶴に限らず、凡て首を曲けたり殊に一巻した時には、必ず目を閉ずるものである。それがこれは依然として眼を開いてゐる。

「たとへ書はうまく出来てゐても、動物の姿勢行動に「嘘」があつては、折角の苦辛も無駄骨折である。この眼を開いてゐるのが即ち「嘘」である。「再考」はこゝにある。

と、憶する所もなく無遠慮に云つた。

が、又例の如く馬鹿野郎と怒鳴られるかと思ひの外、先生黙々として

「筆到つて心到らぬのだ」

と、早速、復た齋戒して描き直された。

過を改むるに吝ならざる所、下聞を愧ぢない所、池田の言の當否は別として先生の態度は正に君子の風がある。

土地の山佐と呼ぶ豪商の隠居が、八年前に依頼した、書を取りに来た。根が商人だけに何事にも算盤高く、

「先生、八年前に染筆料を拂ひ、今日やつと受取ると云ふ段になると、大分の金になる、八年前の利殖を勘定すると、大さう高いものになる」

と、一寸、不平ケましく云ふと、先生も透さず、言下に答へて、

「成程、利殖を目的とする商人の君から云はせると、或はそうかも知れぬが、俺の方でも八年前の書と今日の書とは格が違ふ、随て染筆料も稍倍額を取て居るから、本來なら、今日の場合は染筆料の拂増しをして行く義務がある」

と呵々大笑せられたので、隠居も頭を抓いて、

「これは道理だ、飛んでもない口糞を垂れた」

と、互に笑ひ合つた。

畫の依頼などは、先生のことゝて面白い奇談がまだく澤山ある。殊に先生の磊落か自ら世間離れの快話が生れて来る。恐らくは苦辛の作に悉く副産物として逸話があると云へる位だ。今日残つてゐる何百の神品傑作、悉く逸話の教科書とも云ふべきである。その中には實に無邪氣で、子供のやうな、罪のない話もある。

足利在の水車場の主人が、畫を依頼したのは好いが、田舎者の正直とて、足利へ出る度に、ヤイ〜と毎日のやうに督促に来るので、先生も聊か癢に觸つたらしい。

「あなたの水車小屋の梁には、鰻がかゝりませんか……若し取れたなら五六尾持て来て貰ひたいが」

と云はれると、その男は、唯畫が描いて貰ひたいがために、

「ハイ取れます〜、明日持つて参りませう」

と、翌日、果して生きた大鰻を五六尾届けた。鰻は届いたが畫はまだなか〜届かない。

先方はもう出来たかと又復た日參の催促だ。一度、味を占めた先生、

「今度こそは直きに描き上るから、今一度、鰻を持て来てくれ」

と、うるさい催促の撃退法としての即興としてやられる。驚く忽れ、この手で六七回も鰻は運ばれて、漸く畫は出来上つた。時には自ら知りつつこんな悪戯をされたが實に無邪氣で罪がない。

二十九 寄附の精神

足利の雪輪町に火事があつて、その罹災者救助のために、土地の有志が寄附金を集めることになり、先生にも賛助を求めに来た。先生は心好く承知せられたので、約束の日に、お金を取りに来た。思ひきや、この間に先生は、感ぜらるゝ所あつて、心氣忽ち一轉した。「氣の毒だが、あれは取消す」

との御挨拶で、来た者も聊か驚いたが、先生は更に語を繼いで、

「聽けば隣長屋の熊公は、火事の救助金で却て裕福になり焼ばこつたから、俺も火事に遭つて、ウンと救助金を貰ひたいと、頓だ不量見を起す者がないとも限らない、それでは

折角の好意が却て害になるから取消すのだ」と、頑として應じなかつた。

こゝに面白い先生の人生観、社會観がある。兎角、名に捉はれ安い慈善事業などに、當時已にこの意見のあつた所に、先生の高邁なる識見があつた。殊に東洋流の形式的の慈善事業に對する頂門の一針で、慈善の精神を能く諒解したものである。それでこそ眞の慈善である。この點から見ると、先生は正に古くて新しい人である。

足利地方の習慣として、祭禮や佛事など凡ての祝儀不祝儀の折、饅頭又は赤飯を親戚知人へ配る時、別に餛飩を添へるのである。或る時、祭禮の赤飯の重箱の上に、例の如く餛飩を載せて配つて來た。先生はその使の者に向て、だしぬけに

「何だ！ こんなものを持って來て、こんなものは胃の毒だ。俺の家の者を胃病にするつもりか！ 入らぬ〜持つて歸れ〜！」

と、恐ろしい見暮に、ほう〜の體で持ち歸つて終つた。

新しい衛生思想から、古い習慣を打破するの勇氣は、實に驚くべきものである。正に

是れ生活改善の先驅である。これ等の思想が矢張り畫の方面にも影響して來てゐるのは云ふまでもない。

大山呉服店と云ふは、足利の松坂屋とも云ふべき老舗である。其處の先代が五十回忌とか云ふので、その頃(明治廿三年)一人前三圓もすると云ふ程の上等の膳部を、先生の所へ届けた。幸ひなる哉、その御馳走が大へん甘いので、大に先生のお氣に召した。最早夕刻近くになつた頃、

「この膳部を今一人前貰ひたいと大山へ申込んで來い」

と書生の池田に命ぜられた。池田もなか〜利かぬので

「今頃になつてこんな事云うても困るでせう、もう料理番も歸つたでしょうから」と云へば

「それが面白いのだ、その困るのが見たいのだ」

と、料理一人前の無心書を認め、これを持って返事を取て來いと云はれたので、池田は澁々ながらそれを持つて大山へ行つた。果せるかな大迷惑、老爺さんが早速、婆さんと呼んで

の相談

「外ならぬ先生から、書間の膳部を今一人前欲しいとの仰せだ、今頃になつては初谷（料理店）でも困る、と云つて、餘分は一つも無し、と云つて届けなければ、先生が大立腹だ、どうしたものだ」

と氣使ひつゝ事情を陳べて初谷へ聞きにやつたら、外ならぬ草雲先生の御注文、先生の氣性も能く呑み込んでゐるので、整へますと引受けたので、大山でも先つ一安心、早速その旨を池田に返事した。池田が歸つて來ると先生は、

「大山では何と云つた」と面白さうに聽かれる。

「ハイ大山では大分困つたやうです、困つたが先生からの御注文であらからと初谷へ掛合ふ、初谷でも先生からと聽いて、兎に角作ると申しました」と返辭すると、

「イヤ夫れが面白い〜」

とて一人で喜んでゐられた。夜分になつて、大山からこの膳部を届けて來た。來たから早速喜んで食べられるかと思ひの外。

「俺は食ひたくはないのだ、池田、貴様と女中達で食つて終へ」と、御馳走はそのまゝ下げられた。

實に子供のやうに無恥氣なものである。先生の逸話の中には、こんな罪のない惡戯が往々ある。一面から見れば、仙人のやうでもあり又禪僧のやうでもある。

三十 愛犬コロ

明治二十年頃であつた、大きな猫ほどもある英國産の黒犬を座敷飼ひにして、名をコロと呼んだ。

このコロがなか〜、伶俐に至つて物覚えが良く、先生がすることを能く見てゐて、直ぐその眞似を上手にやるので、コロコロと至極可愛がられて白石山房唯一の愛嬌者となつてゐた。

先生が一絃琴を弾すれば、傍で一絃琴と同じやうな聲で、聲を絞り上げて鳴く。瑟聲を吹けば、その音に和し。今様を唄へば、又その聲に和すと云ふ調子で、それは實に巧妙なものであり、器用なものであつた。夜は先生の枕邊に臥して、大さうのお氣に入であつた。頃は新曆のお正月、或る夜家中の慰みに三四の女中が集つた、先生は老人でもあり寒いので、何時ものやうに床の中にもられるので、この机邊で双語六を始めた。驚く勿れそれでコロが仲間入だ。賞與としては、菓子や蜜柑をかけた位であつた。先づコロの番だよと送つてやれば好し若し、コロの番だよとの掛聲無くして、次の者が賽を振るとコロは猛然として怒つて、かけてある菓子の上に乗つて仕舞ふと云ふ素振が殊に面白いので、先生も頗る興がつて見てゐられる内、早や夜も大分更けて二時近くにもなつた。忽ち雨戸をドンドンと激しく、叩く者があつた。こは何事ぞ！ と一同はびつくりした。取敢す一人の女中は、こはくくながらそこへ行つて、雨戸の節穴からそつと覗いて見ると、こはそも何者ぞ、頬冠りした二人の大男、而も何れも長刀を手挟み、股引足袋洗足で襦袢を煽り、腰には繩を下けてゐるので、女中はびつくり、わな／＼と震へつつも適切、夜盜と察し、委

細を先生に告げると、流石は先生、びくともせず、

「そうか、夫れならばお前達は二階へ登つて、晝間、俺が畫を描いてをる時のやうに、階段口に伏戸をして靜かにして居れ」

と云ひつけ、自分には深く信ずる所あるが如く、やをら起つて、平生、臥床の下に伏せて置く三尺の大ダンビラを取り出し、悠々として下緒を纏に掛け、着物を端折り、目釘に濕りをくれて、どツしり／＼と雨戸の下に立寄り、靜かに僅かばかり戸を繰り開け、いきなり大音聲に、

「貴様達は夜盜であらう」

と叱り付けると、敵も去る者

「否、私等は小俣の者で、小俣の木半のお老母さんが急病なので、夜中にも拘らずお知らせに來たのです」

と云つたが、元より間に合せの返辭で怪しい奴なのは云ふまでもない。先生は早くも秋水をズラリと引き抜き、更に戸を廣く開き様、

「それなら何故、長刀を挿して来た」

と問ひ詰めると、

「途中が物騒だから」

と、落ついて白々しいので、

「腰の繩は何だ、家内の者を縛るつもりであらう……さア覺悟をしろ、靜かにせぬと怪我するぞ」句調が(あべこべだ)

と言ひ様、ヒョイと庭へ飛び降りた。

前は小高い丘で、それより先きの廣庭との境に腰垣がしてあり、垣の内が芝原に成つてゐる松が二本ある。先生は三尺の秋水を中段に構へ、松を背にして、

「サア来」

と云ふと、賊も敗けてはゐる殊に達者な二人とて、ひるまず渡り合つた。先生は誠心隊以來の鍛へた腕に覺えのあるに引替へ、賊は無茶苦茶で隙だらけだから、再々突きを入れられて危く見えた、更に有利なる助太刀が表はれた。これは愛犬コロであつた。

影の形に副ふが如く、先生の側を離れぬコロは、主人の一大事と従いて来たが、この二人の賊を見るや否や、二人のヒツかゞみやら、腰のあたりへ飛上つて噛み付く機敏な助太刀に、賊は痛さに堪へで、兎角ひるみ勝となり、しどろもどろとなつて段々と追ひ詰められ、庭の西なる小山へと追上けられた、一人はこれまでと、隙を見て直ぐ下の渡良瀬川へ洶然と飛び込んで、後白浪と消え失せた。他の一賊は何處かへ逃げて姿を見失つたが、忽ちコロが物置から嗅ぎ出したので、先生に亦た追ひ詰みられたが、後の垣を破つて、ほうくの體で公園の山へ飛出して、雲を霞と逃げ失せた。

俗塵を超脱した白石山房に、思ひも設けぬ夜盜の襲來に、狼藉たる戦ひに美しい青苔は踏み躪られたが、後は再び元の靜けさに歸つた。

愛犬コロの助太刀に、先生も深く彼の忠勇を喜ばれたが、見ると齒の間から、喰ひ千切つた夜盜の肉をぶら下けて、ハ、ツと舌を出してゐた。

それからは殊に危険であるとして、私服巡査が白石山房を警衛してくれたが、先生は平氣なもので、

「五六人の君等よりは、俺一人の方が却て確かだから、来て貰はなくとも好い」と断つたが、署長からの命令であるとして三週間ほど毎夜詰めた。先生は傲然として「年老の一人者の畫家位と思ふと心得違ひだ、まさかの時には戦死を覺悟の武士として修業し来た自分である。高が知れた夜盜の一人や二人、何の恐るゝことがあるか、今後若し再び来るやうなことがあらば、最早、容赦はならぬ、切捨て、終ふから、この由、署長に申告してくれ」と、護衛の巡查を煙に巻いての大元氣で、何れも驚いてゐるが、こゝに全く先生の本領があつた。

それから程経て後、先生が一寸病氣で五六日も臥せられた。例のコロは枕邊に附切りなので、先生が戲談半分に、

「コロ、貴様、俺よりあとへ生残ると、皆の者にイヂめられるから寧ろ先へ死んで終へ。俺も今度は死ぬかも知れぬ」

と云ひ聽かせた。コロは靜に聽いてゐるが、その翌日から姿が見えなくなつた。毎日枕邊

へ來るのが、今日は來ないのでどうしたのかと心配してゐるが、三四日後に、これは又意外！ 死骸になつて床下から發見せられたので、先生始め一同の者は實に驚いた。先生が戲談に云はれた言葉が通じたのである。別して先生は深く感ぜられ、

「これは靈ある犬だから」

とて、菩提寺なる長林寺の和尚を頼み、丁寧な葬式をしてやつて、庭内に石碑まで建て、やつた。

犬の因縁談は随分あるが、このコロの話など確に傳ふべき逸話である。殊に草雲先生にこんな逸話のあることは、先生としても亦傳ふべきことである。

三十一 風流な動物園

先生、燕室に起臥して三昧に入るの傍はら、動物を愛護し又翫弄して、小猿を飼つた。先づ赤い袖無しを着せて、來客の折には愛嬌に茶を持つて出させやうと大に稽古に努めた。教練が漸く出來て、ヤツと茶を運ぶようになつた。やれ嬉しやと思ふ間もなく、猿公、身

の自由なるを覺べ、矢鱈に生水を飲んで、忽ち痢病に罹つたが、不幸にして癒えずして、直に黄泉の客となつて終つた。

今度は鸚鵡を飼つた所が、鸚鵡先生、矢鱈に

「馬鹿！々々！」

を連發するので、奉公人に憎まれ、鐵火箸などでおどかされて、荒鳥になつて終つた。それとは知らぬ草雲先生、可愛い奴と、

「鸚鵡ちゃん々々々」

と手を出したら最後、主人とは知らぬ畜生の情けなさ、その手を遠慮もなく、曲つた嘴でした、かに噛みついたので、先生は食指の端を、後まで噛みぬかれたので、大に立腹せられ「畜生だから仕方がない」

と云ひつゝ、早速、桐生の金子屋へ呉れて終つた。

次は變つて鷺鳥を飼つた。然るに鷺鳥殿、體格ばかりは大きくなるが、一向、卵を生まないで、ガア、と斷へ間なく鳴きを續けるので八釜しくて仕様がな、山房の閑寂を破

らるゝに堪へずして、幾何もなくお暇が出て、鳥七へ呉れて終つた。

その次に飼はれたのは餘りに平凡ながら小猫であつた。處が此奴、一通りの寒がりではなく、心安い池田の膝ばかり睨ふので、堪りかねて池田が膝から敲き落す。それを見て居られた先生は、

「そんなに憎くければ、一層、殺して終へ」

と云はれた。池田も敗けぬ氣性だから、

「殺しても好いのですか！」

「殺す勇氣があるなら、物の見事に此刀で斬つて終へ」

と問答の揚句、尺五寸程の白鞘の短刀を池田に渡された。こうなつては最早、引く譯にはゆかぬ。池田はその刀を取つて、抜き足指し足忍び足で、猫の行衛を尋ねた。可哀想に猫はそれと知らず、臺所の水甕のの陰に身をすくめた所を、エイ！とばかりに、勇ましい掛聲と共に、一刀をスバリと浴せたら、脆くも首は前にと落ちて、早やお陀佛。これを聽いた草雲先生、池田に向つて大にその不都合を吐かり、

「貴様は俺の命令なら何でも聴くか、そんなら人の首を斬れと云つたら斬るか」と、厳しく誠められた。先生が戯談のやうな一言でも、決して無駄には出されぬ、この精神を能く知らねば、兎角失敗する。

その次に來たのが變つた奴で、生れて八ヶ月ばかりの小牛であつた。先生の考へでは、その背に花籠を戴せて、近くの山へ花を伐りに連れて歩き、恰も老子か仙人のやうな氣持であつた。然るにこの小牛、なか／＼癡鈍で、容易に自由にならず、馴らすことが一通りの苦勞ではなかつたので、到頭、しびれを切らして、忽ち三行半くたひとなつた。

白石山房の動物園は實に風流なものであつた。

三十二 奇抜な七ツ道具

五條橋の辨慶に、七ツ道具があるやうに、白雲山房の草雲先生にも、亦七ツ道具があつた。が、源平時代と明治時代、時代に七百年の相違があるから。同じ七ツ道具でも品物が違つてゐる。而もその品物が奇抜で、流石は先生だ實に振つてゐる。

先づ第一に四角な盆が二枚、第二が最も奇抜で、横ッ腹に穴を穿けた二升樽、この樽を一枚のお盆の上に戴せて置くのであるが、その樽が最も振つた御用を達するのである。それは夜中、小便に行きたくなると、その樽を床に引寄せ、横ッ腹に穿つた穴へ、生れた時から黄泉の客となるまで、唯の一時たりとも親の側を離れたことのない、至極、親思ひの俸を挿入れて、無雜作に用便を達するのであるが、若しその穴の周圍の磨き方が悪い時は憤るわ／＼、それもその筈、肝腎の俸がチク／＼痛いのだ。それ故穴の周圍は至極入念に木賊まきまで磨いて置かねばならぬ。勿論、樽は豫備が三つ四つあつて、一夜交替に使ふのであるが、何にしても晩酌一升の先生の小便であるから、臭氣紛々として迎も鼻持がならぬその樽を翌朝、裏の小川へ繩で縛つて流して置くのだが、この名譽なる役目は、最も信任の厚かつた池田が擔當であつた。

それから今一つの盆には、雞卵と白砂糖と、清水を入れた水指を戴せて置き、目の覺め次第、雞卵水を呑むのである。これは丁度、今時の裏長屋と同様、お隣の雪隠と此方の勝手と背中合せになつてゐるやうで、お尻の便器と喉の飲物と、枕邊に列べて置くので、先

生に非ずんば能はざる處である。禪宗の淨穢不二と云ふはこゝのことで、先生は實に大悟徹底の人である。

今一つは煙草盆へ櫻炭を活けて置くのであるが、若しその火が途中で消えたり、翌朝まで保たなかつた時は、直ぐ書生を枕邊に呼び寄せ、

「何のために女中を二人も三人も置くと思ふ、一體、貴様達の監督の不行届だからこの始末だ……申譯がないと思つたら切腹して終へ！」と来る。

その次が種ヶ島と云ふ極めて舊式な鐵砲と、抜けば玉散る三尺の秋水とである。鐵砲は床の右下に、刀は左下に潜ませて置くのであるが、臥る時、

「道具は揃つてをるか」

と必ず尋ねる。若し雨戸が風のためにガタガタと敲く時は、吉良邸の清水一角宜しく、晁々たる秋水を引抜き戸を排して、家の周圍を一巡せねば氣が濟まぬ。

「あれは風ですよ」

と召使などが云ふと、

「お前達は神経が鈍い、夜盗は風のやうに見せかけて、家内を窺ふのである」と、頑として聽かなかつた。武士として鍛へた腕だ、太平の時節に腕が鳴つて仕様がなまいよ／＼七ツ道具の必要を感じて來るのである。

三十三 鐵齋の來訪

先生が七十七歳の時であつた。或る日、玄關で亂暴な大音聲で而も如何にも横柄に、「頼む！」

と案内を乞ふ者がある。芝居にでも見るやうな餘りの舊式なので、書生の我輩が

「ハイ」

と答へつゝも微笑を禁ずる能はなかつた、

立つた人は、小柄な老人で、頭は白黒交りの總髪を紐で結び、慈姑の取手宜しくで、最も異様な、現代離れの風采で、

「頼む！」

の聲と最も能く調和してをる。見れば、手には鐵扇を握り、足は草鞋履き、その上漢法醫の旅に出るやうに、大きな兩掛を擔いだ供を連れてをる。取次に出たものを見るや、

「草雲は居るか」

と大きく出る、これは適切、氣狂ひだなと思ふと、

「自分は京都の鐵齋だ、草雲に取次でくれ」

と、如何にも尊大である。

二階に一心に畫筆を執つて居らるゝ先生に取次ぐと、これは又意外！

「それは俺が舊知己だ、丁寧にあいせよ」

との言葉だ。これが京都でその人ありと知られたる南畫の大家富岡鐵齋先生かと、驚かされた。

鐵齋は二階へ上るや否や、時候の挨拶もなく、開口一番、

「ム、まだ死なゝかつたな！」

と、如何にも超人間だが、答ふる草雲先生も亦、

「足下も今時分は、松の肥料にでもなつてゐるかと思つたら、能くまだ生きてゐた」

これも亦大聲で、まるで喧嘩のやうだ。忽ち供に擔がせて來た兩掛から、さも大事さうに出した品を、恭しく草雲先生の前に出して、

「これは手土産だ」

と云ふ。この人にしてこの兩掛、

「何だらう？」

蓬萊島の不老不死の藥か、武陵桃源の茯苓かと思ひの外、これは又意外！ 俗に云ふ陰部具が三つ、これは紙の肌などをこするもので、能く江の島土産にする三文具である。それが二三十年振に逢ふ人への土産だ。鐵齋はさも感に堪へぬ如く、

「維新の當時屢々松浦武四郎の宅で會つた切りでのう」

と云へば、草雲先生も、

「ム、そうだつたらう」

と答へる。これでは逆も人間世界の話ではない。

折柄、兩毛線の下り列車が、轟々と響かせて、桐生から足利驛へ来た音が、鐵齋の耳に入るや、

「あれは何だ?!」

と、びつくりしたやうに聴く、

「あれか、あれは汽車だ」

と草雲先生が説明すると、

「なんの事はない、足下の家は騒々しい近處隣で凄い音のする家だ」

と、妙な形容をする。

「それからあのゴトゴトとする音は何だ」

と、兎角、神經質らしい詮索、草雲先生は無雜作に、

「あれは此邊で名代の水車の音だ」

と答へられた。それを聴くや鐵齋先生は忙然として、

「あんな無風流な音が名物ぢや、片時も居るが厭ぢや……實は一二ヶ月も泊つて行く氣で

来たが、これでは迎も居れぬ、モウ歸へらう〜」

と、無遠慮に云ひ出されたが早いか、さつさと立たれた。

「まア〜」

と引止めるべきだが、そこが草雲先生で、

「歸へる?! これ式の音に驚くやうぢや、迎も長くは居られまい、歸へれ〜」

と、追立てるやうな挨拶

東西の二大家が幾十年振の會見、面白い維新談の追懷やら彰義隊の思ひ出、日本の發達や人生の變遷、藝術の凋落や南畫の將來、さては今後の指導など、一代の名談逸活があること、期待したのに、忽ちの物別れ、失望と云ふもなか〜愚かなる次第である。まるで古禪僧の商量見たやうである。草雲先生は、所謂世間で云ふ政治家、學者、畫家、文人の大家と唱ふる者は

「遠く聞いて近く見るべからず」

と、平生口癖のやうに云つて居られたが、剛に一面の眞理である。この一言哲學は能く先

生の人生觀を盡し兎毫粉墨をことゝする尋常一様の畫人でなく人品氣節の高邁なることを證明するに足る。さてもく日本南畫壇のために惜しみても尙餘りあることで、若しその二人が、白石山房に二三月も滞在して相語られたなら、必ずや明治南畫史上に一大光彩を放つたであらうに。

三十四 國旗の盜難

明治二十四年の一月一日の朝、國旗を掲げようとする、餘りに古びて不敬なやうで困つた。と云つて今直ぐ買ふ譯にも行かぬので、甚だ當惑してゐると、先生が

「俺が描いてやらう」

と云ひつゝ、早くも畫絹へ、鮮かな日の丸を忽ち二枚描かれた。これはお目出度いと一同が喜んで、景氣好く門へ立て、今日のお祝いであると喜んだ。

夕方、片付けに行くと、その國旗が二本ともない。

「どうしたやらう」

と四邊を探したが頼と見當らぬ。いくら風が吹いたからとて、二本とも見えなくなると云ふはと怪しみつゝ、甚だ縁起が悪いと呟いてゐた。二日三日も過ぎて五日の朝、もと料理屋をやつてゐた清瀬と云ふ男がお年始に来て、何やら風呂敷包みから出して、

「先生、濟みませんが、これに落款を入れて頂きたいが……」

と云ひつゝ、出すのを見れば、紛ふ方なき日の丸の國旗、元日に紛失したやつだ。これは又どうしたのだと問へば、清瀬は氣まり悪るさうに、

「實は元日の朝、お年始に來ると、門に立てられた日の丸の國旗が、まだ生々してゐる。

云ふまでもなくこれは先生のお直筆だ、これを立て、徒に風雨に曝すは勿體ない。國旗は手前で作りますからその代りにこれを頂いて行かう、元日早々から先生の日の丸が手に入るとは縁起が好い、今年は屹度福運が來るのだ、御禮はその後で出来る、幸先き好しと喜んで失禮とは承知しつゝも、決して惡意でないからと、無斷で頂戴して行つたのです。それから段々考へれば、折角のものが落款なくては不具だ、佛作つて魂入れずだどうぞ魂を入れて本物にして頂きたいと、今日改めてお年始旁々持つて参りましたと、

酷い奴だとは思つたが、正直な懺悔談に、先生も苦笑しながら、その場で落款をしてやられた。

三十五 織姫の贋作

足利五丁目の北裏にある龍骸山にある織姫神社は、何年か前に火災に罹つたまゝなので有志が集つて、織姫を先生に描いて貰ひ、再建することゝなつて、山藤儀助と云ふ人が代人となつて、織姫の揮毫と依頼に來た。

勿論、町の鎮守として祭るのであるから、先生も快諾され、直に入念に描き上げ、山藤方へ届けられ所が、山藤でも大喜び、殊に出來が又格別に良いのに、見たものが何れも垂涎した。こゝに山藤の二階にゐて多少、畫の描ける恩田半之助と呼ぶ男があつた。恩田は町役場に勤めつつ、畫が好きで稽古し、自ら半雲と號して、草雲の門人だと云つてゐるので山藤は

「恩田さん、後學のために見せて上げよう」

と、今夜一晩だけ貸して上げようと云つた。恩田は早速、熱心にそれを臨寫して一晩で卒業したが、恩田が臨寫した畫に、草雲と偽名を、十一屋と云ふ酒屋の主人が好んで入れたので、それを表装して關根佐七と呼ぶ男が、隣家の長谷川金藏と云ふ人に、眞蹟だと云つて賣渡した。

然るに恩田が慌つて寫したので、織姫が小田巻を持つた指が六本あるので、忽ち偽物だと發見されたので、關根と長谷川とが紛紜した揚句、長谷川が先生の所へ持つて來た。こゝなつては罪惡露見、尤も其頃は贋作を今日ほど罪惡と思はぬ時代であつた

「俺の描いたものでない」

と先生から突込された。長谷川はやつと安心したが、餘りのことに忌々しく、關根の臺所へそれを投げ込んだ。併し奸智に猛けた關根はビクともしないで、却て一策を案じ、大膽にも夫れを持つて自ら白石山房へ遣つて來た。これは恰も七月の或る明月の晩で、先生は晩酌後、良い心持で、座敷を明け放つて美しい月を眺めてゐると、片手に香竄葡萄酒二本片手には問題の織姫を抱へて、

「先生、今晩は、この清風明月を着に、先生と一杯傾けたいと存じて上りました」と云へば、先生は莞爾として、

「ヤア丁度良い所だ、相手欲しやでゐたのだ、それなら早速、始めよう」

と、關根が持つて來た葡萄酒の栓を抜いた。先生は晚酌の餘醉がまだ醒めきらない所とて詩吟など始められた。胸に一物ある關根は、時分は好しと、

「時に先生、一つ御願ひが御座ります、どうかこの織姫に描き添へてある式紙へ、七夕の歌を書いて頂きたい」

と、例の贗物の織姫を出せば、醉眼朦朧たる先生は、祿々見定めもせず、關根の云ふがままに七夕の歌を書き入れられた。關根に我が事成れりと微笑して、先生が歌を書き入れられる位であるから眞蹟疑ひ無しと、復も長谷川方へ持ち込んだ。長谷川もそれではと引取つて置くことにあつた。

然るにその後、

「イヤ夫れが間違いだ、關根めが先生をたばかつたので、正直な先生は、その奸策に掛つ

たのだ。論より證據眞蹟は一枚より無い、その一枚が山藤にあるではないか」

と、傍から水を指す人が出たので、長谷川は又その氣になつた。長谷川はムツとして、今渡は自身でそれを白石山房の勝手口へ投げ込んで、關根と草雲とが共謀で、悪い事をやつたのだと云ひ振らした。

さア問題はいやが上に大きくなつた。それがため問題の織姫は、彼方此方と持つて歩かれたが、元より先生が、關根などと共謀してそんな事される筈もなく、決局、先生が關根の奸策に掛つたことが明瞭して、町の有志なども却て氣の毒がり、有志の方でそれを引取つて應急の處分をして、やつと一段落がついた。正直な先生は、總ての人を正直と見てゐられる、この正直を付込んで、こんな悪いことをするやつが居る。先生にも一代の失策であつたと、後には自分哄笑せられた。

今も昔も同じことで、大家になると、贗作が餘計に出来る。贗作に大家の反影と云ふやうな憐れな状態である。

この數に漏れず、草雲先生にも随分、贗作が出来よつた。畫ばかりなら不思議もないが

人物の贋作が出るに至つては、聊か驚かざるを得ない。

「我は田崎草雲である」

と云つて、閑馬、飛駒界限を、畫を描いて歩く老人がゐた。その由を先生の處へ忠告して来る者がある、と先生はから〜と笑ひながら、

「昔、將門には七人の影武者がゐて、流石の田原藤太も、どれを射留めたら好いかと、大に當惑したと云ふことがある。今は二人の草雲が表はれた、どちらが眞の草雲だかと迷はせるのだ、これで世の中が面白くなつて來た」と笑つて、更にその贋物を咎められなかつた。

三十六 門人との愛情

門人の中でも古河竹雲は、十一歳の時、出入の魚屋の倅を、小僧待遇で引取り、山谷時代からの門人で最も故參の人である。殊に幼年時代からの師弟關係で、實に親密で、外の見る目も羨むばかりで、自然、その應待ぶりも他の門人とは餘程違つてゐた。

或る時、竹雲が、丹誠籠めて漸く描き上げた精密の山水圖を以て、示教を乞ふべく土産物まで整へて持て來た。先生はスツと一覽して、

「チト浪が五月蠅過ぎる」

と云ひつつ、竹雲の努力を遠慮もなく、滅茶々に直して終つた。

時は七月の正午近くで、炎熱燒くが如きの暑さなので、先生は裸體になつてゐた位であるから、平生から肺病氣味で兎角、健康の憂れぬ竹雲は、二丁目の自宅から綠町のこの白石山房までは、身體を運んで來るだけすら容易でないので、如何にも息苦しさにセイセイ云つて應對してゐると、老いて益々盛んなる先生は、氣息奄々たる竹雲を、

「不甲斐ない奴だ、俺から思へば孫ではないか、若い癖にこんな大義なのか、畢竟、運動が足らぬ所以だらう、運動をせよ運動を……さアさ、運動のために、井戸のポンプを押して水溜へ一ぱいになるまで水を押せ」と云ひつけた。

謙遜の權化とも云ふべき竹雲は、先生の嚴命維れ隨ひ、直ぐ庭へ降りた。それを見た先

生は、更に叱するが如く、

「そんなゾロゾロした態さまで何が出来るものか、もう少し元氣を出して、尻を端折つて終へ、尻を……」

と、連發されるので、竹雲は唯々と返辭しつつも恐縮して、生氣いきなお召縮緬の單衣を端折つた。と今度は、

「次手に跣足になれ。跣足に」

と命ぜられるので、命せらるるままに跣足になつて、井戸端まで行つた。

一體、白石山房は山の上なので、飲料水には乏しい所から、庭内に井戸を掘つたが、不幸にして逆も飲料にならない。止むを得ず、その井戸から約五十間も離れた所へ酒樽を活けて水溜とした。その間を鋺力の桶を架へて水を流すようにした、故に水溜に一杯汲み込むは容易なことでない。況して竹雲には手に餘る大仕事であるが、師命には絶對服従と心得てゐる竹雲、ハイハイと大汗を絞りつつ、一生懸命にポンプを押して、漸く水溜に一杯になつた。それを見てゐた先生は、

「待てゐた」

と云はぬばかりに、庭へ飛び下り、その水溜へ土砂を投げ込み、竹のサ、ラで引掻き廻し「もツと押せ押せ……」

と命じつつ。自分で水溜の水垢掃除を始め、その汗膏の結晶たる水を、勿體ないほどにドンドン使つて、ザアザアと流して樽を洗ふ、洗つて水を代へ出して、

「さアポンプを押せ押せ」

と水を汲ませる。一杯になると復たかへ出して終ふ。こんなことを五六回もやつたかと思ふと、水溜が綺麗になつて、汲んだ水がすつきり澄んで、樽の底まで見え透くやうになつた時、ヤツと

「もう好いもう好い」

と云はれたので、竹雲も漸く休ませられたが、憐れやお召の着物は、汗でグシャグシャに濡れて、セイセイと苦るしさうな息使いで足を運んで座敷の方へ來た。ヤレ嬉しや、お役済みと思ひの外、先生は遠慮會釋もあらばこそ、

「跣足ついでに、家の周圍に水撒きをして行け」

と云ひつけられた。竹雲は一言隻句も争はず、ハイハイと、苦らしい身體を勞して復た水撒きを始めた。手桶に七八杯、漸く撒き終へて、そよそよと吹く風さへも涼しく、實に氣持好くなつた時、

「あゝ御苦勞々々」

と云はれて、初めて無罪放免となつたので、竹雲は早速、禮を述べて歸つて行つた。その後で先生は、

「ああ好い氣持になつた、竹雲の奴、餘りハキハキしないから、チト苛めてやつた」と呵々と笑はれた。

この笑ひの裏に熱い涙がある。それこそ本當の親切で、我が子と愛すればこそ出来るので、使はるる竹雲より、使ふ先生の方がドレ位辛いか知れぬ。幸いなる哉、竹雲にも、先生のその親切が分つてゐたやうだ。これは敢て竹雲一人のみではない、他の門人にもこの心があつたのである。

「新氣運社長石田秀人君の著書快男子横田千之助」

を一讀すれば氣魄俊邁の眞面目か了知されるのである、この變りものが未だ郷里足利に在る時分、先生のところへ入門したことがある頗る面白きことゞもである。

現在の宮内次官關屋君の嚴父は足利町を隔つ僅に一里の八木と云ふ所に住居せられ、世々漢醫の家である、詩情畫趣に富む先生と來往して肝膽相照の友なり、其風交の緣故から貞三郎君も入門の一人であることは多く人の知らざるところである。

横田君生存中、鼎足會と命名して月一回、予と共に三人會合の機會を作り、抱臂懷舊に耽つたことがある、愉快の極であつた。

竹雲が晩年まで住んでゐた家は、もと釜屋と云ふ料理屋のあとで、町の本通の南側で、丁度、大日様の正門から眞正面に當り、往來から少し引込んだ所であるが、その家が料理屋時代には、まば先生が六十に手の届かない頃でもあり、斗酒猶ほ辭せずと云ふ盛んな時代でもあり、殊には維新後、間もないこととて、なかなか盛んに馬力をあけて料理屋廻りをしたのである。その上、この釜屋に思ひもかけぬ先生が意中の女中がゐた、容姿に惚れ

たか、意氣に投じたのか、殆んど日課のやうに通つて慰安を求めてゐた。

所が土地の老舗の呉服屋の次男殿も、亦その女が御氣に召して、若氣の至り、血道を上げて通ひつめたので、一人の女に二人の容、自然、衝突は免れない。そこを流石は客商賣の女、上手に手練手管に取つて相手にしてゐたものだ。然るに戀の神様に何の遊戯か、先生が山三郎の役目に廻り、右の次男殿が不破の敵役に廻つたので、御定の如く山三が好かれ、不破が嫌はれた。實に戀は思案の外である。

或る時、山三に廻つた先生が、葛城ならぬ意中の女と、二階で雲隠れを嗅ぎ付けた不破に廻つた次男殿は、焼くは焼くは、關東大震災の火事のやうに燃へ立て、目も心も無茶苦茶になるほどの猛火で騒いだ揚句、この戀敵奴、この鬱憤を晴らさで置くべきやと、ムカとしたまゝに、登る階子段をソツと取脱して、ドンドンと引揚げた。

とは知らぬ、山三の優さ男の先生、

「お近いうちに」

とか何とか云はれつゝ、送られて階段にまで来たのは好いが、酒の機嫌で千鳥足の歩みも

危く、勝手馴れた階子と、後を向き、無雜作にひよつと、階子段に足をかけたから堪らない。十三文半と云ふ大足の持主、仁王様のやうな巨大漢、ズンデンドウト、ぶち落ちたので店中の大騒ぎ、先生は山本勘助ならぬビッコ引き、人に扶けられて漸く歸つた。

この事件を聞いた不破を勤めた次男殿、覺へず

「我事成れり」

と横手を拍つて微笑を禁じ得なかつたが、結局は戀の失敗、氣まりも悪くて、間もなく姿を東京へ隠して終つた。

三十七 土産に畫を

太田の吞龍様は、關東の名刹であると共に、春秋二回の開山忌は、大へんな人出で、足利近在での名物である。明治二十五年の秋だったか、眞名子の親類から七人も揃つて、吞龍様まで參詣に來た序に、白石山房へお客に來た。元よりお百姓衆、野人禮に習はずで窮屈なことは眞つ平御免、勝手放題とは云ひながら、此方では珍客なので、應待も至れり盡

せりで、山海の珍味を添へた膳部を出した。特に先生が大秘藏の珍味カラスミを、玻璃の小皿に盛つて出すと、乍ちにペロリと一嘗めに嘗め盡し、

「この味噌漬は誠に甘い……も一皿くれ」

と云ふお客が居るかと思へば、二合徳利をケロリ平けて、それを持って臺所へ来て、

「も一本お變りを」

とせがむお客もある。とても振つたのは、折角お勝手に心配した茶碗盛へ、生醬油をサブくくと注ぎ込んで、味も減茶くくにして唯鹽辛いのみにして終ふ。その上に、大鍋一杯煮た味噌汁を、大早の國からでも来たのか、カブくくと吸い干して終ふの盛況、先生は寧ろ無遠慮な偽らざる、飾り氣のない野趣を、ホ、と喜んで居られた。

所へ、この様子に少々調子づいた一人が、

「先生、折角初めて来た御馳走だ、親類であるから、書を一枚づつ描いて下さい」

と云ひ出した。と思ふと、先生はむツとして、堪へ兼ねて疥癩玉が破裂した。さア大變、もう先生にも遠慮はない、

「さア、モウ歸へれく、親類だからとて書を一枚づつとは何事だ、貴様等は田舎の土百

姓だ、親類だからとて米の一俵づつも土産に持て来たかッ」

と怒鳴り出されたので、一席は忽ち白けて終つた。

「まアく」

とおとなしくなだめて終んだ。

それがため畫の無心もならず、お泊りも三晩限りにして、珍客はお歸りになつた。

三十八 草雲先生と水戸浪士

萬延元年三月三日朝、江戸城中に於て古例に倣ふ節句の盛大なる祝儀が行はれる、大小諸大名は威儀堂々として行列の登城はなかく美事なものであつたさうである、折しも夜來の降雪は歇む景色もなく益々降りしきる、満目白皚々の瓊林瑤樹を開展した、彦根城主二十五萬石大老井伊掃部頭直弼の暴逆苛政と、壓迫的態度とを骨髓にまで徹るほどに、憤怒した一代人傑水戸齊昭侯尊攘主義を高調し、大義名分を正し士氣を鼓舞したる功績は鴻

大のものであつた、水戸を脱出したる志士の高橋多一郎を始として總て十九人、外に薩摩藩の有助で有村治左衛門。將軍繼續問題、外交問題、密勅事件等の横暴肆にするに對し、公憤を禁する能はず、勇士面々井伊を寸斷せんば止まざる決意のもとに二日夜品川に生死の別宴を張り、三日蚤晨愛宕山上に集り一死以て國家の奸賊を斃すの身支度をと、のへ、隊伍を二道にとり櫻田門外に来るや、遅しと待構ゆる間もあらず家臣五十人ばかりの供揃に、丸に橋の紋の駕籠を擁してやつて來た。

「ソレ來た油斷するな」

と各刀の目釘を濕す、一人辻番所の蔭より躍如として出で

「御願ひの筋がござる」

と叫び訴狀を突出すと、供頭の日下部供目付の澤村が

「無禮者下がれ」

と一喝した、すると豫て期待の勇士は手早く饅頭笠と赤合羽を脱捨ると、かいふくしくも白鉢巻に白の襷を十字に綾取る勇姿であつた。電光一闪玉散る秋水を引抜き、日下部澤村

の兩人に斬り付けた浪士の一隊

「ソレとばかりに亂入した、こゝに王霸兩電相撃て火花を散すことになつた、なかにも有村治左衛門は當時天下無雙とまで稱された千葉周作の高足にて、武術は同志の中でも一段優れて居たから槍持の飾槍を奪ひ取り、寒風を衝裂いてその音リユウくと突き立てた有様は、進退共に飛鳥のやうであつたから、井伊從臣の大半はそれを見掛けて有村に桃み合ふ、自然駕籠の方か手薄となるのに氣が付なかつたからその隙を好機逸すべからすと、背後より跳出した勇士が太刀風鋭く大老の首を刎ねて終たのである。積鬱をはらした同士凱歌を揚たのであつた、有村治左衛門は重傷を負て苦痛に堪へず、櫻田門外で立腹を切る其他のものも途中で昏倒したものがある、白雪も忽ち赤雪と化し慘憺物凄き言語に絶したと云ふことである。これが維新革命の第一歩を拓られたのである。

竹橋半藏門其他の門を固める役の張番所は、上杉内藤其外七八藩もあつたさうで其責任上から閉門の申つけをも受けて喫驚仰天したのがある。足利藩主戸田家もその一藩でこれは幸に閉門を免かれたが、關係上水戸浪士の殘黨を一時お預と云ふことになつて、藩では